

# 壁のむこうの不協和音

——そんなことはない！

芸術は国境を越える、というだれかの言葉を否定して、別のだれかが叫んだ。

驚いて見渡すも、みな気にもとめずにここにこと談笑している。いや、違う。聞こえていないのだ。その叫びは、ここにいるだれかのものではない。

耳を澄ませる。記憶のなかの、今はもうないあの壁のむこう。遠い昔のような、昨日のどのような、世界と地続きのようで、確実に切り離されていたあの壁のむこう。

泣きたいほどの不協和音が響いていた、あの壁のむこうに。

ぼくが母とともにライプツィヒへ移り住んだのは、第二次世界大戦が終わって一年が過ぎた一九四六年だった。父と二人の兄は戦争に行き、戦後しばらくは帰りを待っていたのだけれど、ついに諦め、母の生まれ故郷へ戻ったというわけだ。

ライプツィヒには古い建築物が多く残っている。大戦による被害が小さかったのだ。もちろんなかったわけではない、空襲を受けた中央駅あたりはぼろぼろだったが、ぼくたちが落ち着いた場所は平穏そのものだった。

きれいな建物と澄んだ空気。この数年で失われたと思っていたものがそこにはあった。それまでがれきの山と化した町に暮らしていたぼくには、にわかには信じられない光景だった。

しかし幾日か経って現実だと認めると、今度はこれまでが嘘だったように感ぜられた。ああ、戦争はただの悪夢だったのだ、古いけれど温かい家、

厳しくも優しい父、大好きな兄さんたち、ぼくはまたあの日々の続きを過ごせるのだ。

いや、わかっていたとも。すぐに別のぼくが否定する。現実を見る、父さんも兄さんももういない、あの家ももうない、母さんを困らせるな。

ぼくの手前か、母は気丈に振る舞っていた。日中は印刷工場で、夜は友人夫妻が営むバー「オクタージュ」で、寝るまも惜しんで働いた。

オクタージュでは母よりもぼくが世話になった。料理をごちそうになったり、古い本をもらったり、ひまなときは店にあるアツプライトピアノを弾かせてもらったり。おじさん、おばさん、と実の親戚よりもなつき、母がいないときでもしよっちゅう訪ねた。

少年合唱団のことを教えてくれたのはおじさんだった。もちろん知らないわけではなかった、国内、いや世界的にも歴史ある合唱団だ。その入団試験を受けてみたらどうか、と。とてもわくわくする話だった。

しかし希望はすぐに露と消えた。少年合唱団を志すには遅すぎたのだ。彼らはもつと小さなころから見いだされて勉強している、つい最近やっと音楽を始めたばかりのぼくに、チャンスなんてものはなかった。

いいんだ、ただでさえ歌は不得手なんだ、人前で歌うなんてとんでもないじゃないか。そう言い聞かせるも落胆は大きくて、しばらくはピアノに触れることすらしなかった。

先生と出会ったのはそのころだ。

あるときオクターヴを訪ねるとピアノが聞こえた。聞いたことのない曲で、しかしとても美しかった。きらきらと瞬き、弾み、踊る——ついつい歌い上げたくなるような演奏だった。

ただだろう。いつもピアノを弾いているのはおばさんだけど、これは違う。お客のだからだろうか、いいや、まだ開店時間じゃない。どきどきしながら裏口から入った。

音はますます飛び跳ねる。

薄暗い店内。締め切った薄いカーテンが橙色に光る。つやのある黒い木製のカウンターには下ごしらえの済んだ野菜たちが並んでいる。そのむこうに、ぼかんと口を開けてピアノのあるほうを見つめるおばさん。

ぼくに気づいたおじさんが肩をすくめた。

「どうしても弾かせてほしいってんで招き入れたら、これだよ」

白が混じるボサボサ頭の初老の男性。子どもにもわかるくらい仕立てのいいスーツは、どこの茂みを抜けてきたのか、細かな葉や草の切れ端と泥で汚れている。その人は子どもみたいに無邪気な顔で、ピアノと、音符と戯れていた。その姿はまるで、

「ベートーヴェン……」

とたん、低音が強烈にとどろく。ダダダダーン！ダ、ダ、ダ、ダーン……ピアノが爆発したかと思った。風に舞う花のように軽やかに、日だまりのように暖かに、そしてまた迫り来る動機。

感電でもしたみたいだ、息をつけない。

### 交響曲第五番。

「きみは音楽が好きかね」

不意に訊ねられ、我に返った。ピアノは優しい旋律を歌い続けたまま、ぼくの答えを待っている。思わず「はい」とうなづく。するとその人は躊躇なく演奏をやめ、さっと立ち上がってぼくにいすを譲った。

「弾いてみなさい」

えっ、と後ずさりした。

「ぼく？」

「ほかにだれがいる」

だれがって——戸惑って振り返ると、おぼさんは身じろぎひとつせず、おじさんはなにをしているやら、カウンターの陰に隠れている。このとき初めて、自分が、知らず知らず近づいていたことに気づいた。

ピアノは黙っているのに、店内には熱を帯びた音符が残っている。

さあ、と再度促されて、恐る恐る、久しぶりにピアノと向き合った。さっきまで鍵盤を叩いていた指がぼくの背に触れる。ビリビリするような気がした。なにを弾いたらいいだろうとは考えなかった、つられてしまった、弾けるような気がしたんだ。

ダダダダーン。

同じ旋律なのに先ほど聞いたものとは似ても似つかない、つたない第五番。音は弱いし間違えるし、だいたいしばらく弾いてなかったんだ、前はもうすこし弾けたはずなのに、テンでだめだった。宙を泳いでいた音符たちがはかなくはじけて消えていく。あんまりひどくて泣きそうだった。

だのにその人は満足そうにうなずいて、こう言ったんだ。

「すばらしい」

それから、テーブルを借りると言ってバタバタと鞆をあさり、白い五線譜とペンを取り出すと、中括弧を書き足して大譜表——ピアノ用の楽譜と

してよく見る、二段組の譜表だ——を作り、さらさらと旋律を書きこんでいく。またたくまに見開き二ページ、二四小節の小曲ができた。

「きみ、名前は？」

「……アルベルト・ハインリヒ……」

「よろしい」

さらに書き加え、完成した譜面をピアノの譜面台に置く。

「ありがとう、おかげでよい曲ができた。次は夜、食事に参りますよ——たぶん、きつと」

ハハハと笑いながら、ステップを踏むような足取りで出て行くその人を、ぼくたちはぼんやりと見送った。

あとになって考えれば、まさしく運命の出会いだった。

残された楽譜を見て舞い上がり、ぼくはしばらくピアノから遠ざかっていたことも忘れ、繰り返しその曲を練習した。だってそうだろう、タイトルにこうあったんだ。

「ライプツィヒのアルベルト少年」

作曲、ストリンダナー。この小曲が、ぼくの人を大きく変えた。

次に先生と会ったのは二週間ほど経ってからだった。あのあと言葉通り夜の営業中に来たと聞いて、連日オクターヴへ通い、店の片隅で待っていたのだ。約束は果たしたのかもしれないのかも諦めかけたときの再会だったから、飛び上がるほどうれしかった。

先生はぼくのことを覚えていてくれた。ぜひ聞いてほしいとお願ひして、いただいた楽譜を弾くと、今度は先生が飛び跳ねて喜んでくださった。

「きみの先生はだれかね」

「イレーネおばさんです」

「よい師に出会えたものは幸せだ」

うんうんとうなずき、グラスを傾ける。カウンターでレタスをちぎるおばさんが、恥ずかしそう

にうつむいたのが見えた。

「では、イレ－ネさん。おこがましくもお許し願いたい、このすばらしい少年に、わたしのやりかたをすこしばかり指南しても？」

「ええ、ええ、どうぞ」

いつも堂々としているおばさんが焦るなんて珍しい、大きな目をぱちぱちさせ、声はうわずって口を開け、先生とぼくを交互に見た。視線がくすぐったかった。

先生はお客様のいすを持ってきてぼくの真横に並べ、しかしかけずに立ったまま、では、とひとつ咳払いした。

「きみには、音が見えるかね」

「見える……？」

「そう。きみの奏でる音が、どんな姿をしてどんなふうになる舞っているか——耳をこらして見てごらん」

うしろでだれかが笑った。端から見たらそりや

あおかしいだろうね、音の姿？ 振る舞い？

「耳」をこらして「見る」だなんて、あんまりちぐはぐだ。

でもぼくは、ちっとも変だと思わなかった。あなるほど、だけどできるかな。鍵盤にそっと手を置いて、慎重に音を出す。意識しすぎて、さっきよりもゆっくりなのに、何度か間違えた。

「どうだね」

「……見えません」

「まだ生まれたてで小さいのだ、じっくり育てたまえ。さあ、もう一度。今度は、そうだな、四小節ずつ弾いてみようか」

やっとな腰を下ろす。

初めてのレッスンはわずか三十分足らず、けれどこんなにも思えば深い。

以来、先生は気まぐれに現れてはピアノを教えてくださった。ぼくは無邪気に喜んでいたが、母はいつ高額な授業料を請求されるかと気をもんでいたようだ。ピアノをただで教わるなんてとんで

もない、しかも有名な音楽家らしいじゃないか。

おばさんは先生のことを知っていた。オーストラ出身の音楽家で、オルガン、ピアノ、アコーディオン、さらにはバイオリンまで弾きこなす。作曲も手がけており、当時発表済みの作品が交響曲で一作、歌劇で二作、練習曲や宗教曲は数知れず。それを聞いて母は青ざめたというわけだ、そんな先生の個人レッスン、いったいいくらになるやら。

結論から言えば杞憂だった。たしかにストリンドナー先生は、本来ならばよくなんか教わるなんて方にひとつもない、言ってしまうえば違う世界に住む人だ。しかし同時に奇人変人として有名だった。これにはのちのちぼくも驚かされることになるのだが、その話はあとに譲ろう。

とにかくあまりの奇行に生徒がつかず、いつだったか、ぼくがレッスンを喜んでくれることがうれしいと、目を潤ませながら仰っていた。奇行よりなによりそれが一番驚いたな、先生のレッスン

はいつだって丁寧でわかりやすく、楽しかった。きみが音楽を好きでいてくれればそれでいい、と先生は言った。とはいえ無償で教わり続けるだけなんて不義理はできない。いつか立派なピアニストになって先生に恩返しをしてみせると、心に誓った。

## 二

先生にとってライプツィヒは憧れの町なのだという。メンデルスゾーン、シューマン、テレマン、そしてヨハン・セバスチャン・バッハ。

「彼なくしてこんにちの音楽界はない。偉大な音楽家だ」

鍵盤をラからラまで、半音ずつ上っていく。そこに表現はなく、音は素直に、伸びやかに広がる。バッハはどの調でも演奏できる調律を実現し、



「ウエル・テンペラメントによるクラヴィーア曲集」を発表したことで知られる。クラヴィーアとは鍵盤楽器の総称で、チェンバロ、クラヴィコード、ピアノなどを指す。バッハはクラヴィコードを愛用していた。

「どのような調整であったか、詳しいことはわかっていない。だが、いかなる曲も演奏できる調律が可能になったという事実は、音楽界を確実に、したたかに揺るがしたのだよ」

先生の指が鍵盤の上を歩き始める。柔らかな旋律。クラヴィーア曲集第一巻第一番ハ長調。

「やがて十二平均律が生まれた。これがいかに画期的な発明だったか、わかるかね？ 転調——つまり曲の途中で調を変えることが容易になった」とつぜん曲が変わる。暗くよどむ音符たち。聞いたことのない曲だがすぐにわかった、先生の作品だ。

練習曲二十二番ト短調。重々しい始まり、二短調、へ長調、へ短調と転調を繰り返す。感傷的な

曲だ。悲しみ、苦しみのなか、ささやかな平穏はすぐに絶望へ変わり、胸を締めつける。

最後は主調に戻る。冒頭のフレーズを繰り返し、やはり重々しいが、絶望の終わりに安堵を覚えた。「調の垣根を越え、音楽はより自由になったのだ！」

戦後、なにより早く復旧したのは音楽だった。

一九四五年五月にベルリンがソ連軍によって陥落したわずか二週間後、ベルリン・フィルがコンサートを開き、さらにソ連軍によるアンサンブルコンサートもあった。青空の下、彼らの歌声が荒れ果てた街に響いたという——ぼくはそこにいなかったから聞いた話だ。

敗戦によりドイツはソビエト連邦、アメリカ合衆国、イギリス、フランスの四国に分割統治されることになった。ライプツィヒはソ連の占領区だ。ライプツィヒでもソ連からやってきた役人や兵士

たちがそこらをうるちよろしていた。

芸術の復興を後押ししたのはほかならぬソ連だった。戦争により破壊されたコンサートホールや劇場などの修復・再建は、ソ連主導の下に進められた。

また彼らはわれわれの伝統を尊重してくれた。ソ連国内じゃジダノフ批判がどうだ、形式主義がなんだとやっていたころだ。宗教色の強いバッハの音楽は彼らの主義にすぐわないが、しかし禁じられることはなかった。もっとも、政治的思惑あつてのことだが——少なくともぼくらは阻まれなかった。ぼくは学校が終わるとオクターヴへ行き、先生が現れることを期待してピアノを弾いた。毎日いるものだからこの子だと勘違いされることもしばしばだった。

レッスンの日時は特に決まっていなかった。先にも書いたとおり先生の気まぐれだ、授業料を払っているわけでもなし、先生にも都合がある、文句を言える立場じゃない。

とはいえ先生の生活は気になった。

先生はライプツィヒに住んでいるわけではなかった。住まいはどちらだったか、とにかくふらりと訪れては何日か滞在し去って行く、というのを繰り返していた。なにをしに来ているのだろう、とはつねづね疑問だった。

あるとき唐突に判明する。

母の勤める印刷工場へ出かけたときのことだ。古い書籍を整理するから手を貸してくれ、と。それは建前で、欲しいものがあれば持って帰っていいということだったから、喜んで行った。

いかにも歴史があるといった風情の工場だった。工場といっても外観はふつうの建物だ、石造りの壁、行儀よく並んだ窓、高い屋根。歴史主義建築というらしいが詳しくはない、この町じゃよく見るデザインで、古びた看板、紙とインクと機械油のにおい、規則正しい作動音さえなければ、人が住んでいると言われてもたぶん納得した。

案内されたのは倉庫だった。広さは教室と同じ

くらいだろうが、整理した書棚のあちこちがぼっかりと空き、おそらくそこに収まっていただろう本たちは机や床に山となっている。とてもほりっぱかった、庫内にいた数人はみな口にハンカチを当てて作業していて、ぼくもそれにならった。

古書の整理はなかなかの重労働だった。欲しいものを探しているひまなんかありやしない、あれをこっちに、それをあつちに、と次々言いつけられる。しかも、なにせ重い。あつという間に汗だくになった。

外となかを何度か往復したとき、ふと楽譜が混じっているのに気づいた。そうか、楽譜の出版もしているんだ——と思ったとき、背後から首が伸びてきた。

「すばらしい」  
「わっ！」

思わず手を放す。バラバラと落ちた本をすぐさま拾い上げたのは、白が混じるボサボサ頭、ほこりとインクであちこち汚れたシャツの男性——ス

トリンドナー先生だ。

二度びっくりした。

「先生、どうしてここに？」

「楽譜を探している」

「楽譜？」

「バッハだよ。ヨハン・セバスチャン・バッハ」

見つけた楽譜を丁寧に調べて、にこにことうなずく。

ずつといたのだろうか、ぜんぜん気づかなかつた。みんな必要以上はしゃべらず黙々と作業していたし、ハンカチで口元を覆っていたからわからなくてもふしぎではないが、なかなか心臓に悪い。「バッハですか」

「いいや、これはバッハではない、だが——」

そういう意味ではなかったのだけど、まあいいことだ。上機嫌に歌う鼻歌は、たぶんその楽譜だろう。先生は鼻歌すら美しい、ほかの人たちが手を止めて振り向く。

「メンデルスゾーン！ 無事だったか、友よ」

楽譜を愛おしそうに撫で、ほこりまみれなのもいとわず抱きしめる。こちらをうかがっていたうちの何人かがうつむいたのが見えた。

フエリックス・メンデルスゾーン。ドイツが誇る大音楽家の一人で、作曲家としてはもちろん、バッハの「マタイ受難曲」再演やライプツィヒ音楽院の設立などでも知られる。

だが彼はユダヤ人だった。ゲヴァントハウス前にあつた記念像がナチスによって取り壊されたこと、反発した当時の市長がその後ヒトラー暗殺に関わつたとして処刑されたことを、過去のことにはまだできない。

「バッハなくしてこんにちの音楽界はない、しかしメンデルスゾーンなくしてこんにちのバッハはない。彼の像は再建されるべきだ、いや、いつかかならずされるだろう：失礼、この楽譜をいただいても？」

「ええ、どうぞ」

近くで作業していた女性に確認し、にこにこ

鞆にしまう。鞆は大きく膨らんでいて、ちらりと覗くと、すでに数冊の楽譜が収まっていた。

楽譜を探していると言った。

「先生はバッハの楽譜を探しているのですか」

「そうだ」

「てつきり、もうお持ちだと」

「もちろんバッハ全集は持っている、ほかにもたくさん。だがねアルベルトくん——きみは、バッハの全作品を言えるかね？」

問われてたじろぐ。バッハの全作品だって？

バッハ全集も見たことがない、何曲あるのかすら知らない。自分がとびきりの無知に思えて恥ずかしくなった。

でもすぐに、それは間違いだとわかる。

「：：：いえ：：：」

「わたしもだ」

にやりと口角を上げる。ぼかんとした。先生が言えない？ こんなにバッハが好きなのに——しかしわかってみれば当然だ、バッハの作品は膨大

すぎて現在も整理しきれていない、今見つかった  
いる楽譜がすべてとも限らない。ヴォルフガング  
・シュミーターによってB W V、つまりバッハ作  
品主題目録番号が提唱されたのは一九五〇年のこ  
とだ。

咳払いをひとつ。先生はしゃべり続けているの  
に、庫内はふしぎな静寂に満ちていた。

「わたしは疑っているのだよ、アルベルトくん。  
バッハの作品はまだまだ眠っているのでは、とね  
…：やっとな探しに來られた」

細めたまなざしは手元を見ているようで、どこ  
か遠く、過ぎ去った年月を見つめているようにも  
思えた。バッハ全集が発表されたのが一九〇〇年、  
それからもうすぐ五〇年になるというころだ。そ  
のあいだに二度の大戦があり、多くの人々、建物、  
芸術が戦火に飲まれた。先生の生まれ故郷は三度  
も体制を変えた、そのうちの一回はドイツに併合  
され、ナチスによって支配された。

多くの友人を失った、と先生は言った。どうい

う意味かは訊かなかった。

ゆがんだ窓ガラスから差し込む透き通った日差  
し、きらきらと舞い上がるほこり、紙と紙のあい  
だをのんきに歩く紙魚、ページをめくる音だけが  
よく響く薄暗がり。ぼくたちは平穩をかみしめて  
いた。

「戦争によって生まれたものもある、だが失われ  
たものはずっとずっと大きい。アルベルトくん、  
その手は音楽のためにあれよ、きみが握るべきは  
銃ではない、自由だ」

「はい、先生」

その約束を守れると、ぼくは思っていた。

一九四八年に通貨がドイツマルクに変更され、  
四九年にはソ連占領区はドイツ民主共和国になっ  
た。

国のありかたや生活は大きく変わったけれど、  
当時のぼくらはそれらに関心がなかった。先生は

バッハの楽譜探しに熱中していたし、ぼくはピアノを弾けたら満足だった。

### 三

一九五〇年、ヨハン・セバスチャン・バッハ国際コンクールが開催された。話を聞いたときは胸が躍った、先生の指導を受けて三年、ぜひ腕前を試したいと思った。しかし参加資格に阻まれた。十六歳以上でなくてはならなかったのに、すこしだけ足りなかったんだ。つくづく中途半端な年に生まれたものだ、早すぎたし、遅すぎた。

同年、ライプツィヒ・バッハ資料財団が設立された。先生も少なからず関わっていたはずだ、そのころから忙しくなってレッスンが減ってしまっただ。ときどき手紙や楽譜が届いたけれど、置いてけぼりを食らったようであんな寂しかった。

ピアノをやめる気はなかった。コンクールはきつとまた開催されるだろう、バッハだけじゃない、ピアノコンクールはたくさんある——いつか舞台に立つ日を夢見て、ピアノをひたすら弾き続けた。まるで友だちはピアノだけと言わんばかりだが、人間の友だちももちろんいた。オリバー、ギュンター、ライナルトの三人とは高校で知り合い、親しくなった——いや、親しくなったというより——授業が終わったらすぐさま帰るぼくをおもしろがってついてきて、いつのまにかオクターヴの常連になり、仕方がないから話すようになった。

オリバーは優秀だったけど、あとの二人ははっきり言って落ちこぼれだ。ギュンターは電子工学、ライナルトは宇宙に夢中で、頭のなかはそればかりだった。学校が終わったらあれをやるう、これを試そうなんて考えていたから、授業の内容なんて右から左、急に指されてヘンテコな回答をするなんてしょっちゅうだ。

わからないでもなかった。ぼくだってストリン

ドナー先生とピアノのことばかりを考えていたから。しかし不真面目にはできなかった、悪目立ちしてはよくない。

オクターヴでの過ごしかたにも変化があった。オリバーたちはしよっちゆう来て、それぞれが好きなことを——先日出版された本の感想だの、壊れたラジオをもらって直しただの、新しい星が見つかっただの——を気ままに語る。ギョクスターなんか学校の成績が一番悪いくせに、真空管やら周波数やらのことは、そこらの大人よりずっと詳しい。

ぼくからは特に話すことがなかったから、ただピアノを弾いていた。耳を傾けて聴いてくれることもあれば、単にBGMと化すときもあった。ぼくも彼らの話を聞き流すことはあったから、まあお互い様だろう。

たまにピアノに合わせてライナルトが歌った。あいつの歌は評判がよくて、居合わせたほかの客からリクエストされることもあった。ぼくのピアノ

ノにはリクエストなんかされないのに、ちょっと悔しかった。

彼らとの付き合いはそれなりに楽しかった。母も、ぼくに同年代の友だちができたことを喜んでいたのであった。ばかばかしい会話しかしないけれど、悪いやつらじゃない。

ばかばかしい話をして、ばかばかしいなど笑ってやりすごせば、それなりに——そう、それなりに、楽しかった。

その日は母からお使いを頼まれていて、学校が終わったら、隣町に住むベルントおじさんのところへ不要品を届けに行くことになっていた。

憂鬱だった。ベルントおじさんは母のいとこで、隣町に住んでいたのだけど、人を見下したような物言いや、じろじろと人を観察するような目つきが、ぼくはどうにも苦手だった。母より五つくらい年下だったはずだけど、ずいぶん老けて見えた。

かつては優秀な科学者だったらしいが、このころには仕事をしているようすもなく、どう暮らしを立てていたやら。親戚ながらうさんくさい男だ、母も同じように感じていたらしいが、当時ぼくらが住んでいた家はベルントおじさんの持ち物だったから、下手なことは言えなかった。

さっさと行ってさっさと帰ってこよう。隣家のおじさんに自転車を借り、大通りを行く。交差点を何度も渡って——たしかにこのとき、なにかしら、やあねえ、なんて眉をひそめる人たちと何度かすれ違った。でもまだ気にならなかった。

ベルントおじさんはその日もいやな感じだった。なんだおまえか、と舌打ちされて、ムツとするのと同時にざまあみろとも思った。包みを確認して、中身がなんだったかは忘れたが、もっと丁寧扱えとにらまれたのは覚えている。

そしておもむろに訊かれた。

「最近、あのじじいはどうしてる」

「じじい？」

「ストリンドナーとかいうじじいさんだよ。おまえ、ピアノを教わってるんだろう」

ふん、と鼻で笑う。ムツとした。じじいだった？ 自分こそ、若作りしているだけのじいさんのくせに。のどまで出た文句をぐっと飲み込む。

「来てないよ。忙しいみたいだ」

「本当か？ 隠すためにならんぞ」

「隠すってなにを？」

「へっ、おれは耳がいいんだ」

なにをばかな、耳がいいからどうだというんだ。その口ぶりも薄ら笑いも、すべてが不気味で不愉快だった。

最低な気分で帰路につく。いやしかし仕事は済ませた、早くオクターヴへ行こう、オリバーたちが待っているはずだ。それこそ先生が来てくれたらしいのにな、ひよっとしたら今日にも先生が来るかもしれない。待てよ、お使いのあいだにいらして、ぼくがいけないからと帰ってしまったとしたら？ もしそんなことがあれば二度とおじさ



んへのお使いは——母さんに自分で行けというのか？ 聞いただろう、あの舌打ちを。

考えるほど頭のなかはいらだちと悔しさにあふれた。ペダルをこぐ足に力が入る。遠くに重たげな雲が見えた。雨が来るぞ。来たときとは別の道に入って、：：ブレーキを握りしめた。

先生が交差点で地面に這いつくばっていた。

通りがかかる人々がみな先生を困惑顔で見ている。しかしだれも話しかけようとはしない、先生は遠目にもわかるほど熱心に、楽しそうに取り組んでいた。

なにをしているのかはぼくにもわからなかった。でも心は一気に晴れた。

「先生！ ストリンドナー先生！」

自転車を降り、押しながら駆け寄る。先生はぶつぶつと同じ数字を二回繰り返してから振り返って、おお、とほほ笑んだ。

「奇遇だな、アルベルトくん。元気かね」

「もちろんです。先生はなにをしているんです？」

す？」

「敷石の数を数えていた」

「数？」

先生が石畳を握りこぶしてコンコンと叩く。規則正しく並んだ四角形。目地には細かな砂が詰まっているが、ところどころ緩んでがたついた。先生は、がたつく石とそうでない石の数を、懸命に数えていた。

「ええと、八八四と：：いくつだったかな」

「二六五二です、先生」

「そうだそうだ、二六五二：：すばらしい、すばらしい」

うなずきながらメモを取る。なにがそんなにすばらしいのだろう、首をかしげるばかりのぼくに、先生は解説する。

「その角からここまでおよそ一五メートル、敷石がぜんぶで三五三六個、固定されているものが二六五二、揺らぐものが八八四。すばらしい響きだ」

「はあ」

なにを言っているかわからなかった。今もわからないし、先生がどんなに大きな意味を感じていたとしてもただの偶然だと思ふ。本当はもうすこし詳しい説明を求めたいところだったが、こういうときの先生にはついていけない——いや、止めてはいけない——それも違ふ、止められなかった。そう、それだ。

「ひらめいた、ピアノが必要だ、きみのバーへ行く」

ガバツと立ち上がったかと思ふと、猛然と走り出す。慌てて追いかけてよとしたら背後から老婦人に呼び止められて、あの人の忘れものだと鞆を渡された。道路の隅に置いていたらしい。

お礼を言つて受け取つたとき、とつぜん周囲の視線に気づいた。どうやらぼくたちはずいぶん注目を浴びていた。そりゃあさうだ、ぼくが先生を見つけたとき、すでにひそひそさされていたんだから。気づいたらとたんに恥ずかしくなつて、逃げ

るように先生を追いかけた。それから噂を思い出して納得した。なるほど、奇人変人。

気づかないぼくも大概だけれど。

雨が降り始めたころオクターヴに着いた。まだ開店前だったけど関係ない、おばさんはいつものように招き入れてくれた。先生は短く挨拶したあと、手を洗つてからピアノに飛びつき、一心不乱に弾き始めた。

ああ。

いろんなことが胃の腑に落ちた。ときおりうなずき、あるいは首をかしげながら、たしかめるように音を紡いでいく。その後ろ姿は初めて出会った日とそっくり同じで、なぜあの日ここに訪れたのか、今なにをしているのか、ぜんぶがいつべんにわかつた。

先生の頭のなかはいつでも音楽であふれている。

ピアノを弾いて小一時間、テーブルに移り五線譜を広げて十分ほど。新しい曲の誕生だ。

しかし先生はご不満らしい。再びピアノに向か

い、楽譜通りに演奏する。小鳥がさええずるような、風で舞う花のような、屋根を打つ雨のような、石畳のおりて遊ぶ子犬のような――ぼくには甘くて色鮮やかな、愛らしい曲にしか思えなかったけれど、先生はううむとうなって眉間にしわを寄せ

る。

「響きがいまいちだ」

「平均律の宿命だ、自然な和音にならない」

言うが早いか楽譜を畳み、鞆へしまう。がっかりした、ぼくも弾かせてもらえなかったのに。

せつかく来たんだ、レッスンをしようとして先生が仰って、開店時間までピアノを見ていただいた。

でもなんとなく元気がなかったし、ぼくも気持ちに乗らなかった。雨のにおいばかりを覚えている。新曲の後だけれど、お蔵入りはしなかった。しばらく経って気を取り直し、オーケストラ用に書き直したのだ。先生の交響曲第二番、通称「山びこ」の第二楽章がそれだ。

この「山びこ」という副題は先生がつけたものではない。初演の際にとある音楽ジャーナリストから取材を受け、なにかの弾みで「山びこの響きは自然で美しい」と話したところ、なぜか副題とされてしまった。緑豊かな山々を表現したなんて嘘っぱちの解説つきで！

本当はライプツィヒのあの石畳の小道で生まれたことを知るの、今やぼくだけなのだ。

#### 四

ルッツ・ベルネット先生の教室を訪ねたのは十年生になってすぐのことだ。ストリンドナー先生のレッスンはほとんどなくなって、おばさんに理論を教わりながらピアノは自主練習という状態だった。ピアノも教わりたかったけれど、先生のあの指導を目の当たりにしてはもう教えられない

い、と拒まれてしまったのだ。

高校を卒業したらストリンドナー先生のところ  
に押しかけて正式に弟子にしてもらえないだろう  
か、なんて考えました。しかしとても現実的では  
ない、母を置いてはいけません。だいたい先生は外  
国人だ、ドイツと同じく連合国らに分割占領され  
ていたオーストリアがこれからどうなるか、まだ  
わからなかった。

先生を当てにするのはもうやめなさい、ピアノ  
ストを目指すなら音楽大学で学んだほうがいい、  
アビトゥーア——卒業試験合格を目指しましょう、  
あなたは勉強ができるのだから。母からすれば  
あなたは最後の一人だ、音大進学は言い訳で、将来の  
可能性をすこしでも広げてやりたいというのが本  
音だろう。説得を受けて、しぶしぶ勉強を始めた。  
音楽の勉強もしなくてはならない。ストリンド  
ナー先生がだめならばとほかの先生を探していた  
ところ、とベルネット先生が生徒を募集している、  
いっしょに見学に行かないかと、ライナルトに誘

われたのだった。

ベルネット先生をぼくは知らなかったのだけ  
れど、公園沿いの屋敷で三十年以上に渡り音楽教室  
を開いていて、何人ものピアノリストや音楽家を育  
てた、有名な先生だという。母に相談すると、授  
業料のことなら大丈夫だからやってみなさい、と  
言ってくれた。

初めて訪ねたときは授業中で、奥様が迎え入れ  
てくれた。コーヒーのいいにおいが漂い、ピアノ  
の演奏が響いていた。フレデリック・ショパンの  
即興曲第四番、嬰ハ短調「幻想即興曲」だ。聞き  
入っているとつぜん止まり、また同じところを  
弾き始める。そつと教室に入ると、きりりと整え  
た黒ひげの男性が、年ごろはぼくらと同じくらい  
だろうか、生徒の演奏を険しい顔つきでにらみつ  
けていた。

パン、と手を叩く。またも演奏が止まる。

「そうじゃない、速すぎる。楽譜をよく見たまえ、  
モデラートだ、最初のアレグロより速くなつては

いけない。それとここからはカンタビレだ、歌うように。だらだらとしてはいけない——もう一度」

「でも先生、ぼくは……」

「もう一度」

生徒が諦めて鍵盤に目を落とすと、先生は楽譜をトンとはじいた。見ろ、ということか。冷たい緊張が走る。

彼の演奏は、流麗で美しいがすこし硬いように思えた。ピアノから跳ね出た音が、落下傘みたいにゆらゆらと着陸し、豪華なカーペットの上で隊列を組む。ベルネット先生の目が音の一粒一粒を監視している。列を乱すな、命令に従え、勝手な行動は慎め。

ライナルトが、ひええ、と小さく漏らすと、ベルネット先生の強いまなざしがこちらに向いた。音楽教室ってこんなふうなのか、思っていたのと同じぶん違う、おもしろくない。しかし母の顔が浮かんだ。ピアノリストになるなら先生はいたほうがいい。

がいい。

ぼくもあんなふうに厳しくされるのだろうか。でも我慢しなくては、今は考えないようにしよう。なるべく彼を見ないように、目を室内に泳がせる。きれいな白い壁、小ぶりながら細工が美しいシャンドリア、金のFRINGINGがついたワインレッドのカーテン、年季の入ったテーブル、妙にシンプルなデザインのリッキングチェア、ピカピカの黒いグランドピアノ……。

重苦しい雰囲気のまま、どうやら時間が来たらしい。今日はここまで、と先生が言うと、生徒もぼくも、ほっと息をついた。

生徒は手早く荷物をまとめるとそそくさと出て行った。入れ替わりで奥様が入ってきて、先生に淹れたてのコーヒーを置いていく。上品な立ち振る舞いと柔らかな笑みが印象的なただけけれど、一言もしゃべらないものだから、ひどく冷たく感じた。

コーヒーを飲みながら、きみたちはなにをした

い、と先生が言った。訊ねるといふより問いただすような言いかただった。ライナルトはすっかり萎縮して黙っているから、ぼくが先に自己紹介をした。

「アルベルト・ハインリヒです。ピアノを教わりたくて来ました」

「ピアノを弾いたことは？」

「毎日弾いています」

「なにが得意だ」

「えっと……」

答えに詰まった。とっさに浮かんだのがあの曲だったけれど、まさかここで言えなかった。先生はせっかちで三秒も待たなかったと思う、まあいっとカッパを置いた。

「弾いてみたまえ」

ぼくは小さく返事をして——いや、もしかしたら黙ってうなずいただけかもしれない、先生の顔を見ないようにしながら歩み出てピアノに向かった。緊張していたし怖かった、手に汗がにじんで

いた。なにを弾こう、なにを弾こう……ええいままよ！

八小節ほど弾いたところで先生がぼつりとつぶやいた。

「ストリンドナーか——アルベルト——そうか、きみか」

ああ、やっぱりほかのにすればよかった。顔から火が出そうだった、ぼくが弾いたのはストリンドナー先生の「ライプツィヒのアルベルト少年」だったのだ。

演奏は最後まで続けた。止められなかったから。ベルネット先生はおかしそうにクスクスと笑いながらぼくのピアノを聴いた。

いつものようには弾けなかった。しかしもはや関係なかった、深くため息をついたあと、余韻をなぎ払うかのように、ベルネット先生は厳しい声で言った。

「ピアノニストになりたいならストリンドナーを捨てろ」

思いがけない言葉に頭が真っ白になった。

「趣味にとどめるならかまわんがね。だが、ならばわたしの教室には入れない」

「どうしてですか？」

「やつの音楽は音楽ではない！」

ぐわっと目を見開き、声を荒らげる。稲妻でも落ちたかと思った、いや、少なくともぼくには落ちた。ストリンドナー先生の音楽が、音楽ではない？

言葉を失ったまま先生の目を見つめていた。さつきまでは恐ろしくて顔を上げることもできなかったのに、この人はなにを言っているんだろう、ただただ信じられないという気持ちで、次の言葉を真正面から待ち構えていた。振り子時計がコチコチと沈黙を刻む。

ぼくの視線を振り払うように顔を背け、ロッキングチェアにどざりと腰を下ろす。ギシロときしんだのはチェアか床板か。先生は大きなため息をつき、またぎろりとぼくを見た。

声を落とす。ピアノシモ、ピアノシツシツシモ、もつと小さく。

「それを抜きにしてもやつとは関わりたくない」

「…どうしてですか？」

同じ質問を繰り返した。それしか言えなかった。先生は首を振った。答えてはくれなかった。

「わたしはストリンドナーか、決めるのはきみだ。やつを捨てられないなら、二度とこの屋敷の敷居をまたぐな」

そのあとどうやってお宅をあとにしたのか覚えていない。気がついたらライナルトとともに公園沿いの大通りを歩いていた。湿気を含んでジメジメした風が不愉快だった。

それから数日。オクターヴでピアノを弾いていると、帽子を目深にかぶった青年から声をかけられた。どこかで会ったような気がする、しかしわからない。首をかしげていると、ベルネット先生

のところ、とほほ笑む。驚いた、まったくわからなかった、あのおどおどとした雰囲気はどこへやら、いかにも利発そうな顔つきと堂々とした態度は、まるで別人だった。

「ベルネット先生が怒ってたよ。わたしよりストリンドナーを取るだなんて、って」

「他人の音楽を否定する人はいやだってだけさ」

「ぼくもそう思う」

彼はアイスコーヒーを二つ注文して、ひとつをぼくにくれた。

店内なのに帽子を取らないこと、やけに注意深くキョロキョロしているのが気になったが、疑問はすぐに解けた。彼はぼくの隣——外からだと思える場所にいるのを並べて素早く座ると、小さな声で、知り合いに見つかりたくないんだ、と言った。

咳払いをひとつ。それで、と切り出す。

「きみの先生は弟子を取っているかい？」

「さあ……おれのほかに生徒はいないと言っているよ」

たけど、いらなるとは言ったことがないよ」

「そうか」

「弟子入りするつもりか？」

訊ねると、シー、と合図された。それから早口で熱っぽく、とうとうとまくし立てる。

「うちは代々音楽家の家系でさ、小さいころから音楽家になれと育てられて、ベルネット先生の教室もいやいや通わされていたんだ。」

このあいだ音大への入学許可が出た、両親も先生も、ぼくが進学すると思っている。でもこのままピアノストになったらさ、ぼくはルツツ・ベルネット先生を師と仰ぎ……って言われるんだ。大嫌いなのに。

大人になって家を出たら音楽をやめようと思っと思ってた。でもね、そうそう、あの日、あのあと、ぼくは公園にとどまってるきみの演奏を聴いていたんだ。よく響いていたからね。それで気が変わった。

きみのピアノはとても自由だ。白状するがね、



音楽を楽しいと思ったのは初めてだ、どきどき、わくわくする！ ああいう音楽をやりたい、だからきみの先生に習いたい、どうだろう？」

「どうだろうと言われても……」

興奮しほおを上気させる彼の気迫にたじろぐ。輝く目、弓なりに上げた口角、表情には情熱があふれていた。

「喜ぶと思う——先生は教えるのが好きだから」

「そうか」

先生の連絡先を教えると大喜びで礼を言われた。その後、本当に先生を追いかけて弟子になった。

彼こそE・H・ヘルベック。自慢の兄弟弟子さ。

## 五

アビトウーア、高校卒業、就職までに、おもしろい話や事件はない。もちろん周りじゃいろいろ

起きてた。そのころの主な出来事といえば、一九五三年にスターリンが死んだとか、東ドイツのあちこちで労働者蜂起が起きたとか、一九五四年にあのフルトヴェングラーが亡くなったとか、一九五五年にはオーストリアが独立したとか、ウィーン国立歌劇場が復活したとか——国立歌劇場の件でストリンドナー先生がウィーンに帰ったきりになって、ぼくの音楽人生は完全に休止してしまっ

た。  
アビトウーアには合格した。これでいつでも大

学へ進めるようになった。しかしちょうどそのころから母が体調を崩し、病院へ通う日々が始まった。長年の疲れが出たんだろう、心配しなくていいと本人は言うけれど、放っておけるわけがない。オクターヴも辞めた。どうせ先生もいないんだ、大学進学はいったん保留にして、就職することに

した。  
就職先は運送会社だ。そこは週六日勤務だが一日当たりの就業時間が短くて早く帰れた。事務仕

事をこなしつつ配送の補助も数年、やっと免許を取ってトラックの運転手になったのが一九五七年。アウトバートを毎日行ったり来たりした。

毎日とはいかなくなったが、休日になればオクタージュに集まって仲間と楽しんだ。高校卒業後、ギンターは電気技師として働き始め、ライナルトは家業のパン屋を継ぐべく修行を始めた。オリバーは大学で法学を学んでいた。仲間内では唯一の大学生だ、大学での勉強の話を聞くのは興味深かった。ぼくらは互いの苦勞をいたわり、励まし合った。

集まるのは高校時代の仲間ばかりではない。運送会社で知り合った同僚たちもいた。ぼくがここにいると知って来る人もいれば、以前からの常連で、新入りが来たと思ったら行きつけのバーのピアノ小僧だったから驚いた、という人もいる。ハンス・マイエがそうだ。

長兄が生きていれば同じ年ごろだ。当時三十代半ば、上背があって筋骨隆々、酒好きで酔っ払う

と夫人とお子さんの自慢話しかしなくなる。

職場では頼りにしていたが、オクタージュでは距離を置いていた。決して嫌いではなかったのにどうしてだったか——母のことがあって、彼といっしょにばか騒ぎできるような気持ちではなかったのだろう。それでもたびたび呼びつけられて、おごってやるから飲めだとか、ピアノを弾いてみると言われれば付き合った。

ハンスの交流範囲は広がった。褐炭採掘場の責任者、図書館司書、家具屋の中堅社員、基礎学校の新任教師。老若男女、業種も問わない。仲良くなれないのはソ連兵くらいだ、なんてジョークがよく交わされた。もちろん近くにやつらがいないときだ、大声じゃ話せない。

ともかく、ハンスの周りにはいつも人が絶えなかった。なにせ面倒見がいい。ギンターもいつのまにか打ち解けていたな、ベルントおじさんのところへのお使いの帰りにオクタージュへ寄ったら、二人でげらげら大笑いしていた。なにがそんなに

おもしろかったのかはわからなかった。酔っ払っていて要領を得なかった。

ほかに、どこで知り合ったのか若い連中——彼からしたらぼくもそのうちの一人だったろうが——を連れてきては、仲間に加えていた。ラーラ・コルベもそうして連れてこられた一人だ。ぼくよりすこし年上の、小柄でおとなしい女性だ。

初対面ではなかった。彼女は母の通う病院の看護師で、通院に付き添ったとき、案内してくれるのはだいたいいつも彼女だった。オクターヴに現れたときは驚いた、あちらも戸惑っていた。

夏の暑い日で、店はいつもとより混雑していた。オリバーたちが来ていたが早々に切り上げて席を譲り、ぼくも帰ろうとしたところ、ハンスに見つかってピアノを弾けと命じられた。彼はすでにすこし酔っていた。気が乗らなかつただけけれど、彼の背後から顔を出したのがラーラだったから、断りきれなくなつたのだ。

選んだのはジュゼッペ・ヴェルディのオペラ

「椿姫」より「乾杯の歌」——おあつらえ向きだろうか？

弾き終わったとき、ハンスは大げさな拍手をして歓声を上げた。彼は楽しければいいんだ。しかしラーラは違つた、お疲れさまとねぎらいながらビールをくれて、こうささやいた。

「面倒なら断ればいいのに」

ざくりとした。事実、面倒くさかつた。この曲を選んだのは、だれでも知っていてわかりやすく華やか、それほど難しくないわりに盛り上がるという理由だった。現にハンスはなにも気づかず大喜びだ、まさかぼくのピアノを初めて聴く人に見透かされるとは思わなかつた。

「あなたも音楽を？」

「ううん、わたしは聴くだけ——友だちに音楽家が多いの。おかげで耳だけは肥えちゃって」

いたずらっぽくにんまりと笑う。病院じゃあ決して見せない顔だ。手を抜いたことがバレバレだったのが恥ずかしくなつて、目をそらし、ビール

を一気に飲む。

ハンスがぼくを呼ぶ。聞こえないふりをした。店内はいつもより賑やかだ。

「それより、息子さんがピアノを弾いているバーだと聞いていたんだけど、違うよね？」

ビール片手に、チーズを口に運びながらラーラがつぶやく。

「よくある勘違いさ、ピアノも商売にはしていない」

肩をすくめる。ふうんと首をかしげたとき、いつもはきつく束ねている髪が柔らかに揺れて、つられて見やった。大きな瞳はどうやら窓の外を眺めている。

外はすっかり暗くなって、風が出てきたのか、新聞紙がバラバラと飛んでいくのが見えた。雨が降ると面倒だからと帰ろうとしたら、ならわたしも、と言うからいっしょに出てきた。あとでハンスに冷やかされたっけ。ラーラが悪いわけではないが、まあ、思うところはあった。

それ以降、ラーラは病院でも親しげに笑ってくれるようになった。オクターヴにもハンスとともに、やがて一人でも訪れるようになった。

演奏会へ行かないかと誘われたのは一九五九年一月の半ばだった。もちろん、誘い主はラーラだ。すこし悩んだが受けた。世話になっているのだし、母は彼女を気に入っている。

よく晴れた日曜日の朝、ぼくたちは中央駅で待ち合わせた。ぼくだってそれなりに緊張していた、手持ちのなかで一番上等なコートとスーツを選び、靴はこの日のために買った革製の。約束の一〇分前には駅について、それぞれキョロキョロしていた。うまくやらないと。

ラーラは時間通りに現れた。そしてぼくの格好を見て笑った。そんなにかしこまらなくてもいいのに、と。それよりこれを、ときれいな花束を渡された。出演者へのプレゼントかなと思った。

「それで、どこまで？」

「ベルリン動物園駅」

「えっ？」

「やましいことはなにもないわ、わたしたち、お友だちの誕生日パーティーへ行くだけよ」

「誕生日パーティーだって？」

あっけらかんと舌を出す。

ベルリン動物園はベルリンのイギリス占領区、つまり西側にある。演奏会だと言うから了承したのに、ここにきて誕生日パーティーなどと言い出して、やましいことはなにもない？

不満が顔に出ているのだろう、さすがにまずいと思ったのか、ラーラは上目遣いと猫なで声で甘えるように言った。

「西へは行きたくない？」

「違う、嘘をつかれたことが気に入らないんだ」

嘘だなんて、と彼女が眉尻を下げる。いけない、泣かせたいわけじゃない。だけどおれが謝ることだろうか、嘘をついたことを抜きにしても、ベル

リンだなんて小旅行じゃないか……なにを言ったらいいだろう、視線を落とすと、赤と橙が揺れている。

「これはなんて花？」

「ガーベラ。花言葉はね、希望」

「ふうん……」

考えていても仕方がない、電車に乗り遅れたら大変だ、長距離鉄道は本数が少ない。歩き出すとラーラも慌ててついてきた。表情には安堵がうかがえる。とりあえずこれでいいか、と思った。けれどやっぱり失敗だ、電車内で過ごした長い時間、ぼくたちはほとんど黙りこくってしまった。

無事にベルリン動物園駅へ着いたのは昼前だった。独特のにおいがした。動物園があるからだけじゃない、西側は歩いている人の服装も顔つきも違う。精一杯おしやれをしたのに、自分がお上りさんみたいに思えた。人とすれ違うたびに靴やらコートやら髪型やらを観察した。東じゃ入手しづらいものばかりだ、かっこよかった。

ラーラはちつとも気にしない。シンプルな服が好きみたいだとは感じていたが、どこへ行ってもラーラはラーラだった。先に彼女を「おとなしい」と表現したが、訂正しておこう。我が道を行くゆえに周りを気にしない、興味が無いものにはとことん無関心、その代わり好きなことには全力投球する人だ。

しばらく歩いて会場に到着した。地下へ続く階段、酒の甘いにおい。ドアの前で立ち話をしていた男女にラーラがにこやかに挨拶をする。女性はラーラに気づくと、満面の笑みで両手を広げた。

「ラーラ！ 来てくれてありがとう」

「こちらこそ、呼んでくれてありがとう。それから誕生日おめでとう」

「ありがとう」

預かっていた花束を渡す。誕生日パーティーは本当だったのか。呼ばれていないどころか知り合いいでもないのに来てよかったのだらうかと心配したが、とにかくたくさんの人に見てほしいからい

いの、楽しんで、となかへ通された。

なかは薄暗く、カラフルな照明がチカチカしていた。すでに人で賑わっていて、手前にバーカウンター、奥にステージと見えた。ステージにはマイク、アンプ、ドラムス——今回使わないのか、ピアノが隅に寄せられているのが見える。

演奏会も嘘じゃなかった。悪いことをした。だけれどどうやら、ぼくが親しみなじんだものじゃない。

「なにか飲む？ もらってくる」

「いいよ、自分で行く」

「遠慮しないで」

なら、とビールを頼む。出てくるまでにステージに数人の演奏者が現れた。ギター。ベース。ドラムス。そして先ほどの女性がギターボーカル。全員が女性のロックバンドだった。

そわそわした。挙動不審だったと思う、悪いことをしているような気がした。実際、当時の東じや認められなかっただろう。だけどみんななんに

も気にせず楽しそうで、ああ、これが西なのか、と感じた。

ぼくは生まれて初めて、ロックンロールを生で聞いた。

## 六

東ドイツじゃ西のラジオは禁止されていた。もし聴いているのがばれたら逮捕される。お偉いさんたちはこう言う、墮落した資本主義の嘘つきラジオだ、聴いてはいけない、と。

だけどみんな聴いていた。ぼくだってそんな品行方正ではない、いつものメンバーでライナルトの家に集まり——ラジオはギョントーのものだったけれど、あいつがラジオに詳しいことは周知の事実だったから警戒したんだ——こっそり楽しんでいた。

ロックを初めて聴いたのは西のラジオ番組だった。ドンドンジャカジャカしてやかましい、音はやたらとがっている、しかし楽しそうだ、こういう音楽もあるのか。

西ベルリンで聴いたロックは、ラジオで聴くそれよりずっと、ぼくを揺さぶった。

帰りの電車はまたお互いにだんまりだった。だけれど行きとは意味が違った、ぼくらはそれぞれ余韻に浸っていたのだ。耳のなかにはまだロックが居座り響いていた。ドラムスの迫力。ベースの安定感。エレキギターってあんな音が出せるのか。寒いのに演奏中は薄着で、真剣なまなざしで、ときどきはコーラスをしながら弦をかき鳴らす——クールだった。目も耳も離せなかった。

だけど感想を口にするにはできない、そこは東の鉄道だ。

ライプツィヒに戻ったときにはすっかり暗くなり、雪が降っていた。家まで送ろうかと申し出たが固辞され、じゃあまたオクターヴが病院で、と

手を振る。

「今日は、誘ってくれてありがとう」

ラーラは目を丸くして、それからにはにんだ。

それにしても、なぜラーラはぼくを誘ったのだろうか？ 音楽が好きといってもジャンルが違いすぎる、ロックは嫌いではないものの好きでもない、ロックの話をしたこともない——もちろん。

次の休みにライナルトの家で集まったとき、オリバーとギンターが探りを入れてきた。演奏会に誘われたことは言っていたのだ。正直に答えると、鈍いなあなどと笑われ、からかわれたが、そんなんじやあないと確信があった。もしそうならあんなだまし討ちみたいな誘いかたをするものか。ああいうのは嫌いだ。

ラーラの態度に変化はない。ただ音楽好きとして誘ってくれただけなのだろうか、きつとそうなんだろう。考えたところで答えなんかわかるはず

もない、本人に訊いてもよかったのだろうけどそれも面倒だ、そのうち理由なんてどうでもよくなくて、やがて忘れてしまった。

思い出したのは二週間ほど経ったころだ。仕事中だった。

そのころぼくが受け持っていたのは、ライブツイヒからポツダムを経由し、ベルリンへ向かうルートだった。臨時ではかのルートを任せられることもあったが、多くはない。

その日もぼくはまずポツダムへ向かった。荷物を下ろし、すこし休憩してから、ベルリンへ向かって再びハンドルを握る。目的地は東ベルリンだが、ポツダムからだると西ベルリンを横切ったほうが早い。国境検問所でチェックを受けて西ベルリン入りを果たす。

仕事だ。なんの緊張も興奮もない。

道路は葉の落ちた森に囲まれ、路肩には積もった雪が壁を作っていた。黒い雲が空を覆っている、ひと降り来そうだ。



交通量は少なく、気楽な道のりだった。もうあと半分くらいというところ、前方に自転車を押す人影が見えた。パンクだろうか。近づくに女性らしいことがわかった。かわいそうに、ただでさえ悪路なのに雪まで積もっている、町まではまだまだあるぞ……後続がないことをたしかめて、ゆっくり路肩に寄せた。

「パンクか？」

トラックを降り、声をかけながら近づく。女性 はびっくりしていたが、すぐに笑顔を作った。ぼくはそのとき、もう気づいた。

「ええ、でも大丈夫よ、お気遣いなく」

「乗りなよ。さっき荷物をすこし下ろしたんだ、自転車くらい載せられる」

「ありがとう、でも」

「動物園あたりで下ろせばいいかい？」

「えっ？」

その人はまん丸に見開いた目でぼくを見た。金色のまつげに縁取られた青い瞳。はっきりと覚え

ていた。

「きみ、ギターリストだろう。このあいだきみの演奏を見たんだ」

どきどきしていた。彼女はぼくを知らない。挨拶もしなかった。ぼくも彼女を知らない、ギターを弾いているということしか。

自分のことをなんと説明したらいいかわからなかった。それでも彼女は多少気を許してくれたらしい、ほっとしたようにほほ笑んで——作ったものじゃあないことはすぐにわかった——じゃあお言葉に甘えて、と言った。

助手席に乗るように伝え、自転車は荷台の空きスペースへ。運転席へ戻ると、彼女はシートベルト相手に四苦八苦していた。車にはあまり乗らないのだろう、珍しくない。ここに差し込むんだと教えると、やたらと感心された。

アクセルを踏む。

「このあいだって、ゼルマの誕生日パーティーかしら」

「主役の名前はわからないけど、たぶんそうだ」

「ゼルマを知らないのに来たの？」

「知人に連れて行かれてね」

「はあ、と笑う。」

「ぜんぜん知らない人だったら、助けに来てた？」

「たぶんね。だってきみの顔を見たら思い出したんだ」

「……優しいのね」

ふふふ、と柔らかい笑い声。急に、ずいぶん大胆なことをしたように思えてきた。いやいや、助け合ひさ、そうだろう？

「ただの気まぐれだよ」

雪が降ってきた。声をかけてよかった、あのまま歩かせたらきつと風邪を引いていた。とはいえ車内も決して暖かくはない。外気を遮れるだけマシな程度だ、カーエアコンなんて贅沢なものはない。彼女もすでに巻いていたが、広げて肩にでも羽織ればいくら違うだろう。マフラー

を外し、差し出した。

「きみは西ベルリンに住んでいるの？」

「いいえ、家はポツダムなの。自転車は節約のため」

「西に移ったらしいのに」

うーん、とうつむく。今のはよくない発言だった。撤回しようとして、彼女が先に答える。

「おばあちゃんがいるから」

「……そうか」

ちらと横目で見る。前をまっすぐに見つめている。特に気にしてはなさそうだ、こっそり安堵する。

社会主義の恩恵を、ぼくはたしかに受けていた。裕福ではなかったのに十分に学校へ通え、母の医療費だってさほどかかっていない、ありがたいと思っている。だけどぼくも母も社会主義者ではない、生まれ育った国が戦争で負け、暮らしていた土地がたまたまソ連占領区とされ、社会主義国になっただけだ。

断っておくが、社会主義の思想自体は悪くないと思つてゐる。ただ、国のやりくちには疑問と不満が大いにある。体制を嫌い、たくさんの人が西へ逃げた。難しくなかった。自転車で西ベルリンへ通つてまでロックをやる彼女だ、好んでこちらにゐるわけではないだろうと思つた。

やがて森を抜ける。雪は静かに降り続ける。視界の隅に映り込む家々の屋根には、雪が布団みたいに積もつていた。

高速を降り、一般道へ入る。並ぶ建物、行き交う人々、西ではどれも色鮮やかだ。雪のせいでもより白く薄暗いけれど、カラフルな傘たちが、あちこちで楽しげに揺れている。

不意に彼女が言う。

「名前を訊いてもいい？」

「アルベルト・ハインリヒ」

「……ライブツイヒのアルベルト少年」

思わずブレーキを踏みそうになつた。

「知つてゐるのか？」

「本当にあなたなの？」

墓穴を掘つた。ああ、とか、うう、とかしか言えず、笑われた。本当にびっくりしたんだ、ロックギタリストの彼女がストリンドナー先生を知つてゐるだなんて——残念ながら決して有名な曲ではない、作者は知らないが曲は知つてゐる、なんて作品ではない。

そうか、彼女はストリンドナー先生を知つてゐるのか。ぼくが「ライブツイヒのアルベルト少年」だなんて、そりやあ驚くだろう。アルベルトなんて珍しい名前じゃない、会つた場所だつてライブツイヒじゃない、まさか本人だなど思うまい……なんだ、もうすこし早くわかつていれば話題もあつたのに。まもなく動物園駅に着く。もう会うこともないだろう……いや、またライブへ行けば……ロックのライブでストリンドナー先生の話をも？ まさか。

彼女はまた笑つてゐた。

「ごめんなさい、からかうつもりじゃなかつたん

「ただ。でも、ねえ、それって名誉なことよ」

「もちろん誇らしく思っているよ」

ウィンカーを出す。到着だ。自転車を下ろさないと——そうだ、パンクは直せるのかな。

「友だちに器用な子がいるから頼んでみるわ。今日は電車で帰る」

「そう、ならよかった」

帰りも乗せようかと言いたいところだが、帰路は別ルートを通る。それに時間も合わないだろう、一時間後には、ぼくはベルリンを離れている。もつと話したい、だけどこれでさよならだ。そう思っていた。

「助けてくれてありがとう。でも、あの……ひとつだけ忠告させて」

「なに？」

「いやだと思ったら、いやだって言ってね」

ぼかんとした。彼女は遠慮がちに笑いながら、しかし心配そうに眉尻を下げる。

さすがにムツとした。なんなんだ、急に。

「あなたって流されやすそうだから」

「心配ご無用。子どもじゃない、きみに——」

「よかった、約束ね。じゃあ、また」

きみに言われる筋合いはない、と言いたかったのに。彼女は屈託のない笑みを浮かべ、雪のなかへ消えていった。

## 七

そういえば名前を聞いていなかったと気づいたのは別れてすぐだ。けどもう遅い、彼女の姿はとつくなかったし、なんたってぼくは仕事 중이다、あまりのんびりもできない。いつものコースに戻り、西ベルリンを出た。

また、と言っていた。期待を込めて？ それとも、またライブで、という意味だろうか。いやだと思ったら——これがわからない、初めて話した

のに、ぼくのなにを知っていると言うんだ。

考えたらイライラしてきて、だけど最後の笑顔  
を思い出すと、イライラはモヤモヤになり、やが  
て溶けてしまう。

妙な感じだ。まったく、妙な感じだった。

このことを、ぼくはだれにも言わなかった。業  
務以外で西ベルリンで停車しただなんて大問題だ  
し、こっそりオリバーたちに話したとしてもきつ  
とからかわれる、雪の日の思い出としてそつと胸  
にしまっておくつもりでいた。ところが三月の初  
め、ぼくにとっては青天の霹靂、彼女にとっては  
予定調和、ぼくらは再会した。

ラーラが彼女を連れてきたのだ。

週末の仕事上がり、いつものようにオクターヴ  
へ行ったら、テーブル席で飲んでいたラーラに呼  
ばれた。手を振って返事とし、いつもの席——こ  
のころ、一人のときにはいつもカウンター席の一  
番端に座っていた——へ向かおうとして、いや待  
て、二度見した。

ラーラの隣に彼女がいる。遠慮がちにこちらを  
見ている。

心臓が飛び跳ねる。どうしてここに？ 住まい  
はポツダムと言っていた、ラーラを訪ねてきたの  
か？ 今度はこっちでパーティーでもあったら  
うか。胸の高鳴りを悟られまいと、平静を装って、  
彼女たちの席へ進路変更した。

「やあ——このあいだは——…」

「あら、案外めざといのね」

言葉を選んでいると、ラーラがにやりと笑う。  
おそらくライブのときのことだと勘違いしている  
のだろう、けれど特に差し支えない、説明も面倒  
だ、そのままにしておく。

ラーラが彼女に向き直る。

「彼ね、アルベルトくん。このあいだ話した人」  
「どうも」

これはどちらが言ったのだったか、互いに会釈  
する。うまく目を合わせられない。このあいだ話  
した？ なにを？ ラーラがなにを言い出すやら

わからず、不安と緊張でどきまぎした。

空いている席に座る。なにを思ったか、おばさんがぼくにビールを持ってきて、立ち去り際に肩を二回叩いていった。彼女がふしぎそうな顔でおばさんの背中を見送る。

「それで、その、あなたの名前は？」

「ヒルダ。よろしく」

「…：そう、よろしく」

ヒルダ、ヒルダか、よし、覚えた。握手を交わす。細くて小さな手。指先がすこし硬い。

ラーラがぼくの隣にいすを寄せる。視線はぼくへ、でも体は彼女のほうを向き、手振り身振りで彼女を紹介する。

「彼女、音楽院に通い始めたの。週末はかならず帰るって約束でこっちに来て、先週からわたしとルームシェアしてる。それで——」

顔を近づけ、急に声を落とす。

ハンスが同僚たちとともにやってきた。ぼくが女性二人とテーブルを囲んでいるのを見て、うれ

しそうに近づいてくる。ラーラはすぐさま手招きし、ヒルダを自分の隣に移らせた。

三つあった空席がハンスたちで埋まる。

「あなた、仕事でポツダムやベルリンへよく行くんでしよう。ハンスから聞いたわ」

「ああ、まあ」

ハンスが得意げに片眉を上げた。ラーラはさらに小声になる。

「それで、週末、乗せてくれない？」

「えっ」

「彼女、実家がポツダムなの。毎回電車じゃお金がもったいないでしょ、遠回りだし。都合が合うときだけでいいから」

「お願い、とウインクをひとつ。」

なるほど、すべてに合点がいった。なぜぼくを西ベルリンへ連れて行ったのか、それから彼女——ヒルダのあの言葉も。

彼女はうつむき、ぼくの返事を待っていた。ハンスが口を挟む。

「週末って何曜日の時だ？ 土曜日の——十一時には着きたい？ なら土曜だけ出発をすこし早めにすればいいな。いいよな、アルベルト。なんならおれが所長に掛け合ってやるよ、任せろ！」

「いえ、自分で言います」

答えると、ヒルダが顔を上げた。瞳にはまだ不安が残っている。

「ああ、でも、もしだめだと言われたら——そのときは頼ってもいいですか」

「もちろん」

ハンスがふふんと胸を叩く。たった三〇分ほど早めるだけだ、心配はしていないのだけど、頼るそぶりを見せておけばハンスも気分がいいだろう。ラーラは喜色满面、ヒルダは——またうつむいていた。

もしかして、断りたいのは彼女のほうなのだろうか。

「じゃあ、オツケーってことで？」

「ああ……彼女がいやでなければ」

「いやだなんて、そんな！」

きっぱりと強く。勢い余ったか声が裏返ってしまつて、恥ずかしそうにほおを両手で包んだ。柔らかなような髪のスきまから真っ赤になった耳が覗いている。

よかつた。いやではないのか。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ……ええと？」

こちらこそはおかしいな、ならなんて言えばいいんだろう？ 言葉がとっさに出さず口ごもつてしまつて、みんなが一斉に笑い出した。みんなというのは、ラーラと、ハンスと、同僚たちと、それからいつのまにか背後に立っていたおばさんもだ。恥ずかしかつたけれど、やっと彼女が笑つてくれたから、まあいいかと思つた。

どんな人なの、と母に訊かれたときは、あまりにとつぜんなんのこともわからなかつた。母が

知っているなんて思わなかったんだ。

「イレエネから聞いたの、大盛り上がりだったんですって？」

ウフフ、と口角を上げる。

自宅で早めの夕食。ライナルトのところで購入した焼きたてパンと、おばさんが届けてくれたスープ、それから適当に作ったサラダ。外はまだ明るい。すこし前までならもう真っ暗になっていた時間だ。気温もじわじわと上がってきた。春だ。

「わたしもお会いしたいわあ。今度、家へ連れてらっしゃいな」

「残念だけどそんなじゃないんだ。週末に彼女の地元まで送っていくだけだよ、仕事のついでにね」

「あら、そうなの」

おばさんめ。

オクターヴを辞めて以来、母は見る見るうちに弱っていった。印刷工場は辞めていなかったのだけれど、ろくに出勤できていない。ベッドの上で過

ごす時間が長くなり、病院すらおっくうに感じているようだ。そんな母を氣遣って、おばさんはたびたび訪ねてきてくれる。感謝しているが、これは黙っていてほしかった。

どうやら母は、ぼくよりもおばさんを信じるらしい。

「ラーラさんのお友だちなんですってね。きっといい人だわ」

うつとりと目を細める。ああ、きっとそうだろうさ。なんとたっておばさんのために東に残り、節約のために自転車で西ベルリンへ通っていたんだ。毎週末に帰る約束だって、家族を安心させるためだろう。

しかし、しかしだ。

「とつくに決まった人がいるかもしれないじゃないか」

「それならラーラさんがそう言うと思うわ」

期待しすぎてはいけない。そう思って張った予防線が、あっさり取り払われる。たしかにそうだ、



ならなにも——いや、彼女の気持ちはどうだ、周  
りの口車なんかに乗ったら痛い目を見るぞ、彼女  
を傷つけることにもなりかねない。

母がいよいよ笑い出した。声を上げて笑うなん  
て久しぶりだ、そんなにおかしいだろうか。

「あなたって本当、わかりやすいわあ。ぜんぶ顔  
に出るんだもの。お父さんそっくり！」

ひとしきり笑ってから、目尻に浮かんだ涙を人  
差し指で拭う。

思わず顔を両手で覆う。ほおが熱くなっている  
のがわかる。つい最近だれかがこうしているのを  
見たな、だれだっけ、ああ、ヒルダさんだ。思い  
出してまた熱が上がる。

頬杖をつき、深く息を吐きながら、母がぼくを  
見つめる。温かいまなざしは子どもものころからず  
っと変わらない。

「あなたは賢くて優しい子。だから臆病になるの  
よね。勇気を持って。もしそのかたとご縁がなく  
ても、だれかを愛したことは、いつかあなたの宝

物になるわ」

よろりと立ち上がり、手を伸ばして、ぼくの頭  
をぐりぐりと撫でる。細くなった腕は今にも折れ  
そうで、しわしわの手のひらは柔らかくて、指先  
は思っていたより力強い。心に火を灯されたよう  
な気がした。

食後、片付けをしていると、母がアルバムを引  
つ張り出してきた。アルバムといっても写真はほ  
んど残っていない。結婚の記念に撮影したもの、  
ぼくら兄弟がそれぞれ生まれたときのもの、父と  
二人の兄が出兵するときの、つまり最後の写真と  
——それから、一通の手紙。

婚前、父が母に宛てたものだという。

「あなただけ特別よ。兄さんたちにも見せたこと  
がないんだから」

硬いソファに並んでかけて、二人で読む。緊張  
していたのだろうか、丁寧だけどところどころで  
揺れる父の字は、切々と愛を訴えている。そっと  
母を見やると、少女のようにきらきらした瞳で文

字を追っていた。

実のところ、父との思い出らしい思い出はほとんどない。物心ついたときには戦争は始まっていた、家のなかでも外でも、なんだかいつも張り詰めていた。物々しい雰囲気には怖じけて泣き出せば口を塞がれ怒られた。子どもでも容赦なかった。

しかし泣くのを耐えて震えていたとき、あるいはどうしようもない恐怖から眠れない夜、抱きしめ慰めてくれたのは父だった。大きくてごつごつした手の重さとぬくもりに、幼いぼくは安心したのだった。

そうか、ぼくは父さんに似ているのか。

手紙の結び、父が母に立てた誓いを、指先でそつと撫でた。

八

土曜日は朝からよく晴れた。三〇分早く出勤し、荷物の積み込みを済ませてヒルダを待つ。やがて時間通りに出勤してくる同僚たちに紛れ、ラーラと、ボストンバッグを抱えた彼女が現れた。

「おはよう」

「おはようございます。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。

「そんなかしこまらないでください。荷物、うしろに積みます？ ……汚れたら困るか」

ボストンは年季の入った革製だった。手編みだろうか、かわいいニットのモチーフがついている。

ラーラが目配せしてくる。慌てて、持ちます、と手を伸ばすと、ヒルダは首を横に振った。

「ありがとう、大丈夫。これは足下に置くわ」

ほほ笑むヒルダの隣で、ラーラがぼくをにらむ。こういふのは慣れていない。目をそらし、引つ込めた手で頭をかく。

トラックへ案内しようとしたとき、じゃあこれで、気をつけてね、とラーラが帰っていった。足取りは軽く、鼻歌でも聞こえてきそうだ——いや、聞こえた。

「ヒルダさんたちが演奏していた曲だね。本当に好きなんだな」

「よく覚えてますね」

「そりゃあ——ああ、行きましようか」

あまりゆっくりもしてられない、トラックに乗り込む。彼女は今回もシートベルトに手こずり、ぼくが締めた。そして、用意しておいた膝掛けを渡す。

「もし寒かったら使って」

「ありがとう：：わざわざ用意してくれたの？」

「ええと：：母が寒がりで、うちにたくさんあるんです」

嘘はばればれだった。見るからに新しいし、ななっただってタグを取り忘れていた。しかしそのときはまったく気づかなかった、彼女も気づかないふ

りをしてくれた。

いよいよ出発だ。ハンスが野次馬根性丸出しの笑顔で、気をつけろよ、と叫ぶ。ほかの同僚たちからも、口笛を吹いたりわざとらしく両手を振ったり、まあ存分に冷やかされた。

まったく——クラクションを鳴らしながら走り出す。ひいちまうぞ。

「すみません、無神経なやつらばかりで。まあ、そのうち飽きると思う」

「どうかしら」

クスクスと控えめに笑う。飽きてくれなきや困る、毎度これでは参ってしまう。休み明けもきつといういろいろ言われるのだろう、いや、今夜だってオクターヴで待ち構えているに違いない、行かないことにしよう。

八時半をすこし回ったところだろうか、人通りはそこそこある。すぐその動物園がまもなく開園だ。何組もの家族が楽しげに歩いている。今日は絶好の行楽日和だ。

やがてアウトバーンに入る。アクセルを踏み込む。スピードがぐんぐん上がる。建物が減る。若い草花が伸びる。ただっ広い平野と、新しい葉をつけ始めた木々。窓外の景色が瞬きするうちに変わっていく。

「それで、目的地はポツダムでいいんです？」

「え？」

「ベルリンまで行きたいときは言ってくください。ルートを外れることはできないけど、ちよつと止まるくらいなら大丈夫だろう」

ライプに連れて行かれたのはそういうことだと思つた。それに、オクターヴでぼくに運送ルートを確認するとき、ラーラは「ポツダムやベルリンへ」と言つた。あちらへ行きたいだなんて話はそう簡単にできないが、これだけ情報を揃えられたらだれでも察する。

「ありがとうございます。でも今日はポツダムでいいわ」

「わかつた」

定期的に実家へ帰らなくてはいけないのも本当なのだろう。おばあちゃんがいるから、と言つていた。二人暮らしだろうか、ご両親は？ ……いや、それは気軽に訊いていいことではない。

あれこれ話したいことはあつたのに、いざなるとどう話を切り出したものかわからない。そればかり考えてもいられない、ちゃんと前を見て、ハンドルを握り、アクセルを踏み、ブレーキはいつてもかけられるように。事故を起こしてはなにもかも台無しだ。

空港が見えてきた。

「本当によかつたの？」

不意にヒルダが言う。

「引き受けてもらつておいてなんだけど——このあいだの、ほら、あんなふうに話を進められたら、やっぱり断りづらかつたんじゃないかしらと思つて」

「ああ…。」

ラーラのお願ひだけならともかく、ハンスの、

退路を断つようなあのまくし立てかたは、たしかにいやな感じだった。

「言つたら、子どもじゃない。いやなら断るさ」

見栄を張った。普段のぼくならわからない、飲まれてしまったと思う。今回はたまたま——いやではなかった、だけだ。

ヒルダは心底安心したように、ほっと胸をなで下ろした。

「よかった。ラーラも強引なところがあるから：ライブに連れて行かれたのだって、きつとちやんと説明されなかったんでしょ？ 演奏会だとかくらいしか」

少々愚痴っぽく言いながらため息をつく。思わず吹き出してしまった。

「よくわかったね」

「ゼルマから聞いたの、やたらめかしこんだ人を連れていたって：：ごめんなさいね、あなたを悪く思ったんじゃないの。ゼルマも、ラーラがきつとまた：：って。かわいそうに話してたのよ

：：ラーラのことは大好きよ、ただ、悪いくせだよねって」

あつちもこつちもフォロしようとして、しどろもどろになっていく。

かわいそうに、か。あの日、演奏を聴く前のぼくは、今日という日をなんとか無事に終わらせたいとばかり考えていた。行きの列車では、乗らずに帰ればよかったとか、早く戻ってピアノの練習をしたいとか、きっぱり断るべきだったとか、小さな後悔を積み重ねていた。

「うん、でも、楽しかったよ」

正直な感想だ。ヒルダが、へへ、と照れくさそうに笑う。

「じゃあ西ベルリンで会ったとき、ぼくがラーラの連れだって、きみにはすぐにわかったんだね」

「きつとそうだろうなって。トラックだし、背格好も年ごろも聞いていたとおரிだし」

「どんなふうに聞いていたの？」

「背が高くて、銀髪で、顔がちよつと怖くて：：

あ、ごめんなさい」

顔が怖い？

うっかりブレーキを踏みかけた。落ち着け落ち着け、運転に集中しろ。

顔が怖いだなんて、ラーラはそう思っていたのか。そしてその説明でぼくがわかったヒルダも。西ベルリンで話しかけたときのことを思い出す、そりゃあ、正体がわからないうちは警戒もするだろうな。

右手で自分の輪郭をたしかめる。顔の作りか？無意識にうなづいていたらしい、気づいたら彼女がオロオロしていた。顔の怖い男がうなり出したら：：そりゃあ、うん、怖いだろう。

「初めて言われたから：：その：：怖いかな」

「えっと：：ちよつととっつきづらそうかな、つて。でも話してみたら親切だしよく笑うし、もう怖いなんて思わない」

「笑っていたほうがいい？」

「作り笑いはかえって怖いわ！」

真剣な声で即答する。シヨックを受ける反面、

その断言ぶりと、直後にまたまごまごするさまが、おかしくてたまらなかった。正直な人だ。緊張していたせいもあったと思う、歯止めが利かなくなつて、大笑いしてしまった。ちらと見やると、ヒルダは顔を真っ赤にして、首をすくめている。

「ごめんごめん——ラーラは、ほかにはなにか言っていた？」

笑いすぎて息が苦しい、ほおが痛い。片手で痛みをほぐしながら続きを促す。ええと、と首をかしげ、大きな瞳はどこか遠くを見ている。

「バーでピアノを弾いてるとか：：あと、同い年だつて」

「そうなのか？」

てつきりラーラと同じかと——いや、だとしてもあまり変わらないし、たいした問題でもないのだけれど。

「だったらなおさら、もっと気楽にしてもらっていいのに——やっぱり、顔が怖いから？」

「本当に心配だったんだもの、無理をしているんじゃないかって。今日だってわたしのために三〇分も早く出勤しているんでしょ？　いつでも断ってくれていいんですからね」

「断らないよ、断るもんか」

きっぱり言い切る。そのときの彼女の顔をちゃんと見ておけばよかった。どう思っただろう、彼女のほうこそ、ぼくがいやになっても断れなくなってしまうんじゃないかと、あとで思い返すたび不安になった。ただ、少なくともそのときは、お互いにそれ以上言わなかった。

ポツダムまでの一時間半とちよつとは、あつという間に終わった。話題はラーラから音楽へ飛び、もともとは音楽を習っていたこと、やがてギターに興味を持ったこと、西のラジオを聞いてロックを知ったこと。ライブツイヒへ来る前は西ベルリンで仕事をしていて、そこでゼルマと知り合い、バンドを結成したこと。音楽理論をちゃんと学びたくなって音楽大学へ進んだこと、これからは月

に一度だけ西ベルリンへ行くこと——彼女の音楽遍歴をざっくりと聞くことができた。ストリンドナー先生を知っていたのも納得だ、先生は歌曲もいくつか書いている。歌いやすく短い曲が多く、練習によく用いられる。

同乗させるのは行きだけだ、実家に一泊して日曜の午後、列車で帰ると言う。ぼくのほうは日曜は仕事が休みだからどうしようもない、迎えに行くなんて押しつけがましいことはできないし、そもそも足がない。

彼女の後ろ姿をいつまでも見送る。丁寧に畳まれた膝掛けが残された助手席には、仕事をやり遂げた誇らしさと、すこしの寂しさがあった。

ラーラには心の底から感謝していた。単に彼女にとつて都合がよかっただけなのはわかっている、それがよかった。

逆に言えば、彼女の都合に添えなければぼくは

除外される。受け持ちは変わることがある、少なくとも彼女の在学中は担当を死守しなくてはならない。とはいえもうヒルダのことはみんな知っている。まじめに働いて信用さえ保てば大丈夫だろう。そう思っていた。

甘かった。

## 九

五月十一日は月曜日だった。ベルリンから戻ると事務所がなにやら慌ただしい。ぼくを見るなり全員が黙り、所長が、片付けはこっちでやるからすぐに病院へ行けと言った。

意味はすぐにわかった。けれど次には、頭が真っ白になった。所長に肩を抱かれ、ほとんど引きずられるように外へ出る。

外にはハンスがいた。彼は通勤に自家用車を使

っていた。その車を、いつでも出発させられるようにエンジンをかけたまま、営業所の玄関前に停めていた。そしてぼくを見るなり、乗れと言った。有無を言わず病院へ連れて行かれた。でも、もう遅かった。

母が亡くなった。うすうす気づいてはいたが、あまりにも早かった。

次の日は休みをもらって、さらに翌日からは仕事に出た。葬儀は土曜の午後に決まった。職場には休みを申請し、ラーラには、今回は送れないことをヒルダに伝えてほしいと頼んだ。あとの記憶はぼんやりしている。よく事故を起こさなかったものだ、我ながら感心する。

木曜か金曜か、ベルントおじさんがうちに来た。母の荷物を物色するので止めたが、あとで調べたらネットワークスや指輪がいくつか、それからアルバムがなくなっていた。返すよう訴えたらアルバムだけは戻ってきた。こんなの、他人が持っていてどうするんだ。



この家にはおれが住む、葬儀が終わったら出て行けと、ベルントおじさんは言った。おばさんが怒って抗議していた気がする。でもどうでもよかった、むしろこれで縁が切れる。一月猶予をくれと返した。

葬儀にはいろんな人が来てくれた。おじさんとおばさんはもちろん、印刷工場の人たち、オクタ―ヴの常連、隣家のご夫婦、ギンター、ライナルト、ラーラ。ぼくの勤め先からも所長とハンスが来てくれた。この春から就職していたオリバーはちょうど出張で来られなかったが、お袋さんがお悔やみを届けてくれた。

そしてヒルダ。

「ご実家へは？」

「今回は見逃してもらった。わたしにも見送らせて」

「ありがとう、よろしく」

火葬され、小さな箱に詰められた母を見たとき、は嗚咽が漏れた。心とはふしぎなものだ、大きな

悲しみは、まったく健康な体を動かなくさせてしまふ。いろんな人の手のひらが、ぼくの背中を代わる代わる温めてくれて、ようやくすこしずつ動いていた。

みんなたくさんの花を贈ってくれた。ぱらぱらと雨が降っていた。葬儀は、つつがなく終わった。そのあとも慌ただしかった。仕事の合間を縫って引越し先を探し、帰宅すれば片付けた。仕事は休んでいいと言われたが、働いていたほうが気が紛れた。土曜日になればヒルダを乗せる。なにを話したかはさっぱり記憶にないが、母のことはわざと触れないでいたし、触れないでいてくれたことは覚えていた。

五月が終わるころには新居に越した。営業所からほど近い、できたばかりの集合住宅だ。一人住まいには十分だがなにしろ荷物が多い、母の私物はほとんど、ぼくの荷物も使わないものは手放した。しかし落ちこんでいるときにやるものではないな、やりすぎてかえって寂しくなった。

手紙は捨てられなかった。ぼく宛のものももちろん、母宛のものも。ベルントおじさんからの手紙が一番多かったことには驚いた。内容はほとんど金の無心だった。勝手な男だ、葬儀直前のやりとりもあつて猛烈に腹が立ち、ひとまとめに目につかない場所に隠した。

それから先生に手紙を書いた。母が亡くなったこと、引越したことを伝えなくてはならない。何度も何度も書き直して、やっとポストに投函したときには六月になっていた。

運送ルートの変更を言い渡されたのはそのころだった。ひと仕事終え、事務所で片付けをしたところ、所長から切り出された。

言い分としては、家族を亡くして辛いだろう、近場で負担の少ないルートを、というものだった。たしかドレスデン方面のルートだ、それまでもときどき回っていた。気遣いはありがたいが納得で

きない、母を亡くしてからもうすぐ一ヶ月が経とうとしている。なぜ今さら？

ルートが変わればヒルダを乗せられなくなる、それは困る、いやだ。大丈夫です、やれますと訴えたが、もう決まったことだと取り付く島もない。幸い撤回された。ハンスが助けてくれたのだ。

「所長、そんなことしたら、こいつ死んじやいますよ。土曜日にヒルダさんを乗せることだけが生き甲斐なんだから」

「だがなあ」

「彼女、ポツダムにおばあさんがいるんですよ。だからぜったい逃げません。彼女が逃げないならこいつも逃げない。心配いらないですって」

愕然とハンスを凝視した。どういう意味だ？次に所長を見ると、あからさまに動揺している。

「そんなことは心配していない」

「じゃあ今まで通りってことで！ アルベルト、飲みに行くぞ」

強引にまとめてぼくを連れ出す。所長はそれ以

上なにも言わず、いや言えず、話はそれきりになつた。

そのあとはハンスに従ってオクターヴへ行った。母の死後はずつと行っていなかったから、みんなぼくを見て驚き、歓迎してくれた。こつちへ来い、おごつてやる、なんてあちこちから手招きされる。そのどれにも応えられず、ぼくはハンスによってピアノのいすに座らされた。

「なにか弾いてくれよ、派手なやつがいい」

言いながら隣にいすを寄せ、座る。ピアノに背を向け、おばさんが持ってきたビールを飲みながら、たぶん彼は店内を見渡していた。

派手な曲：：思いつかない。そもそもずっと弾いていなかった、ここにも来ていなかったのだから。悩んでいると、いつものやつでいい、と背中を叩く。いつも：：いつも、ぼくはなにを弾いていた？

「そうだ、娘がバレエを始めたんだ。あれは弾けるか、くるみ割り人形」

「ああ、はい」

ピョートル・チャイコフスキー、作品七一「くるみ割り人形」より「行進曲」。華やかに弾む音が心地よい——指が動けば、だが。鍵盤は指が覚えているより重く、遠く、鈍い。ぼろぼろだ。

だがハンスは気にしない。演奏の質など問題ではなかった。ぼくに顔を寄せ、やつと聞こえるくらいの声で話し出す。

「おまえ、目をつけられてるんだよ」

「え？」

手を止めようとしたが、続けろと促される。

「ストリンドナーとかいう音楽家。前によく来てたけど、おまえの知り合いだろう？ ヘルベックの息子がストリンドナーを追いかけて国を出て行ったのは、おまえの手引きだって聞いた」

耳を疑った。ハンスはもともオクターヴの常連だ、ストリンドナー先生のことには知っていてもおかしくない。でもヘルベックは一度しか来たことがないし、ぼくは彼のことをライナルト以外に

話したことはない。なぜ知っている？ いや、顔の広いハンスのことだ、たまたま知っていたのかもしれない。しかし。

「手引きだなんて：：紹介してほしいと言うから連絡先を教えただけです、ほかにはなにもしていない」

「当局のやつらはそう思わない」

ジョッキをぐぐつと傾ける。

行進曲だけでは短い、本当ならすぐ終わってしまうが、次の曲目が浮かばない。同じところを適当に何度も繰り返して延長する。練習しているとでも思っているのか、だれも気にしない。

「おまえのルートは西ベルリンを通る。いつだれにまた手を貸すか、あるいはおまえが逃げ出すか、所長はビクビクしているってわけだ」

「でも、じゃあ今までは？」

「お袋さんがいたろ」

指が震えた。ハンスは真剣だった。

「母一人子一人。おまえが弱った母親を置いて逃

げるようなやつじゃないことは見ていればわかる。人手も足りていないしな、信用して任せていた。けどおまえ、」

ぼくの顔を覗きこむ。まっすぐな瞳の黒が、絶望の色に見えた。

「西ベルリンで彼女を降ろしたろ」

——なぜそれを？

手が止まる。瞬間、ハンスが酔ったふりをして鍵盤を派手に叩いた。おじさんやおばさん、ほかの客たちも、驚いてこちらを向く。

「悪い悪い、続けてくれ！」

ハンスがわざとらしく言うのと、まったくもう、大丈夫かよ、と笑いが起きる。おばさんが水を持ってきて、大事なピアノなんだから丁寧に扱ってよ、と文句をつけた。

ぼくは黙って震えていた。とても続けられなかった。ハンスは笑いながらぼくの背を叩き、べらべらとまくし立てる。

「なんだよもう酔ったのか、まあ久しぶりだもん

な、そろそろ帰るか。そうだ、うちにくるか？

嫁のメシは世界一うまいぞ！ 娘にも会え、未来のバレリーナだ」

「酔っ払ってるのはおまえだろう、ハンス！」

だれかがヤジを飛ばす。ぼくはひとくちも飲んでいないが、ぼくのぶんのビールは、いつのまにか空になっていた。

酔っ払ったハンスを送るといっていで、連れ立って店を出る。もちろん彼は酔ってなんかいない。もしかしてこれまで見てきた彼の酔っ払い姿はぜんぶ芝居だったのでは、と気づいた。

「皮肉なもんだよな、信用を得るために嘘をつくんだ」

ハンスがぼつりと言った。七時を過ぎたばかり、空はまだ明るい。

「おれに話してよかったですか」

「だっておまえ、本当に死にそうなんだもの」

はは、と乾いた笑い。ポケットからたばこを取り出し、慣れた手つきで火をつける。吸うか、と

差し出されたものを、いったんは断った。母はたばこのおいが苦手だ——ああ、もういないんだった。

「やっぱりもらえますか」

にやりと笑いながら一本。おまえはかわいがられて育ったんだな、とハンスが言った。根拠はわからないが、なぜだかうれしかった。

たばこを吸ったのはそれまで二回か三回か、うまいと思ったことはないが、大人になったような気持ちにはなった。

「さっきの話だけどさ、彼女から聞いたわけじゃないぞ、そこは信用してくれ。西で降ろすのが悪いわけでもない。ただそれが、外野からどう見えるか、だ。そうだ、所長の前では気をつけろよ、あの人、あれで気が弱いからさ。問い詰められたらなんでも話しちまう」

「ハンスのことは、信用しても？」

「どうかな、おれはお調子者だから」

肩をすくめてうそぶく。役者の顔を脱いだハン

スは、賢くて頼もしい、かっこいい大人だった。

十

「最近、なんだかイライラしていない？」

そう指摘されて、思わず頭に血が上った。相手がヒルダじゃなかったら、たぶん感情に任せて怒鳴ってしまっていたかもしれない。

土曜日、二人きりの時間。ハンスの言うとおり、当時のぼくにはそれだけが生き甲斐だった。一週間にながもあっても、土曜日の一時間半、彼女が隣に座っているだけで気持ちが悪く落ち着くようだった。

しかし彼女のほうは、そうではなかった。

「疲れているなら休んで。わたしのことは気にしないでいいから」

「…今は慣れたことを慣れたとおりにやってい

たいんだ」

ヒルダがうなだれて、しまった、と思った。あまりにつっけんどんだった。でも謝るのも格好悪い気がしてできなかった。

ハンスのおかげでルートの変更は免れたが、安心はしていられなかった。だれがどこで見ているかわからない、ずっと気を張っていないとならない。事務所なんか最悪だ、所長の目はギラギラ光り、ぼくの一挙手一投足を見張っている。ぼくら従業員がなにかしてかせば責任を問われるのは所長だ、神経質にもなるだろうが、もっと信用してほしかった。

いや、できないだろうな。ぼくだってそうだった、だれもが互いに疑っていた。たしかに、ぼくはいつもイライラしていた。

指摘は的確だった。だからいやな気持ちになつた。

六月ももう終わり、じわじわと気温が上がっていく。その日の空は黒い雲に覆われていたが、閉

め切った車内にいるせいとか、じつとりと暑く感じ  
た。降りそうだな、どうせ降るならさっさと降り  
始めてほしい。傘は二本用意している。

「今日はベルリンまで乗っていく日だったね」

努めて明るい声を作る。ヒルダは、応えてくれ  
た。

「ええ、よろしく——そうだ、来週の日曜にまた  
ライブをやるの。よかつたら来て」

安堵と同時に、心がにわかに弾み出す。久々の、  
いいニュースだ。

「本当に？ もちろん行くよ、楽しみだ。それじ  
ゃあ、来週もベルリンまで？」

「お願いできる？ そうしたら、ゼルマの家に泊  
めてもらう」

やった、と小さく喜ぶ顔はきらきらとまぶしい。  
いけない、ニヤニヤしてしまう。ほおの筋肉が久  
しぶりに働いたような気がした。

エレキギターはゼルマの家に置いてある。東ド  
イツではエレキを入手することも、所持すること

も困難だ。大学では理論を学び、クラシックギタ  
ーを弾いているが、やはり勝手が違うと彼女は言  
う。両腕を前方にぐっと伸ばし、華奢な白い手を、  
グーパーと結んだり広げたりする。

そうそう、と彼女は続ける。

「もうすぐ夏期休暇に入るの、そのあいだ、月曜  
から金曜まで、オクターヴでアルバイトすること  
になった」

「えっ？」

「人手が足りないってラーラから聞いて。休みの  
あいだだけならって」

そう——ちゃんと声になっていなかったかもし  
れない。ヒルダはラーラが一度連れてきたきりオ  
クターヴには来ていなかったはずだ、まさかアル  
バイトなんて——そう、そうしたらぼくは毎日通  
ってしまうな、最近はハンスに誘われて酒を飲む  
ことが増えた、運転をするのだからもうすこし控  
えなくちゃいけないと思っていたのに。そうだ、  
まだ彼女の前でピアノを弾いたことはない、きつ

と弾く機会があるだろう、音楽大学で学んでいる彼女だ、とびきり上手ではなくても恥ずかしい演奏はしたくない、練習しておかないと。短いあいだにつらつらと考えた。

黙ってしまったぼくに、ヒルダは不安そうな顔を向ける。

「いや？」

「まさか、うれしいよ、その：：おばさんたちは、ぼくの第二の両親みたいな人たちだから、きみが助けてくれるのは、とてもうれしい」

素直に、店にきみがいてくれるのがうれしいと言えばよかったのに、なぜこんな回りくどい言い方をしたんだろう。

その日からぼくはまた毎日のようにオクターヴへ通い、猛然とピアノの練習に励んだ。二ヶ月近い空白は大きかった、指が思うように動かない。ぼくが狂ったとも思ったのか、おじさんが妙に

顔をうかがってくるようになった。

前のバンドのライブをまた観に行くという話をしたところ、オリバーとライナルトも行きたいと言うので、ラーラも含めて四人で行った。ギンターも誘ったが先約があると断られた。

オリバーは興奮していた。ライナルトは楽しいけど耳がキンキンすると言った。ラーラはいつも通りだった。ぼくは——わからない。曲目、仕切り、演奏者それぞれのパフォーマンズはぜんぶ覚えていけるけれど、自分がどんな反応をしていたかはさっぱり思い出せない。ラーラによると、曲に合わせて静かに揺れているそうだ。

そしてこっそり耳打ちされる。

「ヒルダだけ見ていればいいのに、律儀よね」

「：：：どういう意味？」

「あなたは本当に音楽が好きなのね、って意味」

あはは、と笑う。そのときはよくわからなくて、ぼくは首をかしげるばかりだった。オリバーたちには最後しか聞こえなかったらしい、なんの話だ



い、と割り込んできたが、言えるもんか。ラーラが、ないしょ、とはぐらかす。オリバーはニヤニヤ、ライナルトはつまらなそうな顔をしていた。

帰りの列車では、オリバーとラーラがやたら盛り上がっていた。いや、オリバーが一方的に話を振り、ラーラが適当に相づちを打っていたというのが正しいのだが、オリバーは気づかない。ライナルトは疲れたみたいで、背もたれと壁に頭を押しつけて目を閉じていた。ぼくは耳のなかに残る音楽を再現してはまた楽しんでた。

ラーラに手を叩かれる。驚いて見やると目どりがめられた。ああ、いけない。手がひざの上でリズムを刻んでいた。オリバーがまたニヤニヤしている。ああそうか、そういうえばヒルダのことを彼らには言っていなかったなと気づいたが、面倒なので黙っておいた。

ついに彼女がオクターヴに現れた日、その日は水曜日で、ぼくは開店前から客がすっかりいなくなるまで居座った。居座るつもりなんてなかった

のだけど気がついたら時間が過ぎていたのだ。初めはいつものようにカウンターの一番端で、ハンスがやってきてからは彼らとともに、ギョントーとライナルトがふらりと現れると三人でテーブルを囲んだ。二人とも彼女にすぐ気づいた。ライナルトは、しかし先日見たバンドのギタリストだとはわからなかったようだ。

「彼女、きみのお母さんのお葬式のとくにいなかった？」

「ラーラの友だちで大学生だ、夏期休暇中だけ手伝ってくれる」

「ずいぶん飲んでるな、明日も仕事じゃないのか？」

「そうだけど」

「心配なのよねえ！ はい、お水」

おばさんがうしろからニュツと首を伸ばしてくる。そんなんじゃない、彼女だって大人だ、心配だなんて。撫でているつもりなんだろうが頭をガシガシと揺さぶられては悪酔いしそうだ、水を一

息に飲む。ライナルトが目をまん丸にしてぼくを見るから、つい悪態をついた。

「なんだよ、きみまでおれをからかうのか？」

「違うよ。なんだ、そうだったのか？」

「オリバーには言うなよ、あいつの冷やかしはしつこくてかなわん」

「わかったわかった」

二つ返事で承諾しながら、ライナルトは愉快そうに笑った。ギョンターがたばこの煙をゆつたりと吹き、いいねえ青春だねえ、なんてしみじみと言う。すぐさま同じ年だと文句をつけたが、なにかおかしかったのか、それともぼく以上に酔っていたのか、二人は大笑いしていた。

二人が帰るころには店内もだいぶ落ち着いていた。ぼくもそろそろ帰ろうかと思つたが、まだヒルダがいる。働いているから当たり前なのだけど頭がちゃんと働いていなかった、彼女がいるうちは、と再びいつもの席へ戻ってぼんやりしていた。やっと事実気づいたときには、最後の一人にな

っていたというわけだ。

「明日も仕事でしょう、大丈夫？」

「大丈夫」

「事故を起こさないでね」

「気をつける」

ずっと店にいたのに、この日に彼女と交わした言葉はこれだけだ。

次の日は無事に乗り切ったもののふらふらで、仕事のあとはすぐに帰宅して寝た。木曜にはハンズから、土曜日にはヒルダから、たっぷり叱られた。自分が吞める量は把握しておきなさい、と。さすがに反省した。

加えて、ヒルダからは心配された。

「いやなことでもあった？」

「いいや、なんにも」

「じゃあどうしてあんな無茶をしたの？」

「それは……」

もごもごと口ごもる。正直になんて言えやしない。最近はずっとオクターヴにいてと言えばトラ

ツクの運転手なのに酒浸りはよくない、次々に知り合いが来て帰るタイムングを失ったと言えばちやんと断りなさいとたしなめられる。いちいちごもつともで、ぐうの音も出ない。

「やっぱり流されやすいんじゃないの」

ため息交じりに。情けないが認めざるを得なかった。

ヒルダがあんなにぷりぷりと怒ったのは、たぶんあの日が初めてだったな。ほおを膨らませ、まったく、と両腕を組む。

ひとしきり怒ってしばしの沈黙。それからぼつりと彼女が言った。

「でも、安心した」

ふふ、と笑みをこぼす。

「あなたを大事に思っている人がたくさんいるのがわかって」

「……うん。みんないい人だよ。数少ないぼくの自慢さ」

青い空には白い雲、視界の隅では木々が青々と

葉を茂らせる。排気ガスがひどいから窓は開けられないが、ドライブ日和のいい天気だ。気づくとぼくは鼻歌を歌い、彼女がそれに合わせてハモっていた。心地いい二重唱。幸せなひとときだった。そうだ、ぼくにはすばらしい友だちがたくさんいる。一人一人の顔を思い浮かべては、誇らしく思った。

## 十一

オクターヴで働き始めたヒルダを、オリバーもほどなく知ることになった。ラーラの友だちで、実家はポツダム、ぼくの運転するトラックで毎週土曜日に帰っていることなどは、いつとなく伝わったらしい。

オリバーは平日は忙しくしていて、店に現れるのはせいぜい土曜か日曜、平日は月に一度金曜に

顔を出すか出さないかくらいだった。それがこのころになってようやく仕事に慣れたと言って、来店頻度が上がった。また四人で飲むことが増えてうれしかった。

八月の半ば、ライナルトがニューースを持ってきた。アメリカの人工衛星、エクスポローラー六号が打ち上げに成功、初めて地球を撮影したというものだ。

「アメリカは有人宇宙船の計画を進めているけど、ソ連は去年にスプートニク三号を打ち上げてそれきりだ。でもあいつら、いつも成功するまでは公表しない。まったくやきもきするよ」

「どう見てもきみのそれは『うきうき』だよ、ライナルト」

ギンターが茶化す。ライナルトはげらげら笑って、そりゃあそうさ、と肯定した。

「これまで戦争に使われていたような技術がさ、今は宇宙に行くために開発されているんだ。こんな平和な競争はないよ」

「もうちょっと声を落とせ、おまえたち」

おじさんが顔をしかめる。ぼくたちは顔を寄せ合って話を続けようとしたが、それで、とライナルトを促すと、おしまいと返ってきて、四つの顔は一分も待たずに解散した。

「なんだよ、もう」

「詳細なんかそうそう知り得っこないよ、わかってるだろ？」

口角を片方だけ上げて肩をすくめる。違う、この国で正式に流通している西の情報なんて信用に値しない。

オリバーが目配せし、ヒルダを呼ぶ。

「ビールを」

「はい。四つでいい？」

オリバーの満面の笑みに、ヒルダは愛想笑いを返す。手伝おうかと立ち上がると、これが仕事なんだからと断られた。

だれかがライナルトに歌をリクエストした。ライナルトは上機嫌で請け負い、伴奏してくれとぼ

くに言う。選曲はジャコモ・プッチーニの歌劇「トゥーランドット」より「誰も寝てはならぬ」

——彼の十八番だ。

伸びやかなテノール。あいつは実に気持ちよさそうに歌う。いつ来たのかラーラがいて、歌を絶賛するものだから、ライナルトは顔を真っ赤にして照れていた。楽しい夜だった。

次の日曜日はぼくとギョクンターでライナルトの家を集まった。エクスプロラー六号について、西のラジオなら新しい情報が入るかもしれないと思ったのだ。オリバーは、仕事がたまっていると行って来なかった。

結果はからきしだった。宇宙のうの字もない。

残念がっていると、代わりにというわけではないけど、とライナルトがスクラップノートを引き張り出してきた。開くと、ソ連とアメリカ、それぞれ宇宙開発結果を報じる記事が切り貼りされている。ライナルトの手書きによる年表まである。宇宙開発なんて自分には縁のない、ライナルトが

嬉々として語るのを聞くだけの遠い存在だったが、これはなかなか読み応えがあった。

ふと疑問を抱く。宇宙にしろ歌にしろ、ライナルトには好きなこと、得意なことがあるのに、なぜそれらを趣味にとどめているのだろう。もちろんパン屋が悪いわけじゃない、このパンは最高にうまい、いずれはライナルトが継ぐのだろう、でもほかの道を選んだってよかったはずだ、せめて志すくらいは。ぼくは疑問を、ライナルトにぶつけた。

彼はきょとんとして、こともなげに答える。

「競争はいやなんだ」

「競争？」

「そりゃあ憧れはあるよ。でも音楽で食っていいことしたらさ、うまい下手を比べられるわけだ。ましてやこの国だ、数少ない席を争って、ときにはお上に取り入らなきゃならない。そういうのはおれ、苦手だよ。

宇宙開発競争だって端から見ただけだからい

いんだ。どっちにしろそこまで頭もよくないしね」

首を横に振りながら淡々と説明する。びっくりした。彼のなかではすっかり整理された話題だったのだ。

「あと、パンを焼くのは好きだし。おれはこれでもいいんだ」

思い出したように付け足し、はにかむ。

東ドイツでは芸術家も労働者に含められた。社会的に保証されたと言えば聞こえはいいが、音楽にしろ美術にしろ、経済活動をするには資格が必要だった。しかも自由はない。検閲はしないと宣言しておきながら実際にはしっかりチェックし、都合の悪いものは世に出させなかった。一方で、お偉いさんの強力なコネがあれば、多少は融通が利いた。

社会主義はみんな平等だなんて建前だ、権力者はたしかにいた。

ぼくはピアニストになる夢を諦めてはいなかった

た。けれどピアノで食べていくには実力が足りないことに気づいてもいた。ライナルトの選択は、賢く正しいように思えた。

ヒルダは将来をどういうふうに考えているのだろうか。ロックバンドでギターを弾き、今は音大で理論を学んでいる。こちらじゃ自由な音楽なんてできないし、ほかのメンバーはみんな西ベルリンだ。ロックを続けるならいずれは西へ行かなくてはなるまい。けれどおばあさんがいる：：おばあさんとあちらへ行くなら？

ロックを諦めるなら——ギターを弾く彼女の姿を思い出す。諦めてほしくはない。

もし彼女が西へ行くというなら、ぼくはどうする？：：なにを考えているんだ、今のぼくらは、ただの友だちじゃないか。

なんだかヒルダの元気がなさそうだと気づいたのはそれからすぐだった。ヒルダの顔から笑顔が

減り、いないなと思うとカウンターの陰でうつむいている。どうかしたのかと訊くと、しばらく黙ったあと、なんでもないと弱々しく首を振った。

体調でも崩しているのだろうか。おばさんにも訊いてみたが、本人が平気だと言うからと首をかしげる。店では人が多すぎて言いづらいのかもしれない、二人のときにでも訊いてみてよと言うので請け負った。

土曜日の朝、彼女は時間よりだいぶ早く来た。ぼくはまだ準備ができていなくて、助手席で待っていてほしいと伝えた。二〇分くらいかかったと思う、出発しようと運転席に乗り込むと、彼女はポストンバッグをぬいぐるみみたいに抱え、すうすうと寝息を立てていた。

シートベルトをしていない。起こさないよう慎重に装着しようとするも体を揺らしてしまい、結局起こす。

「ごめん、出発するから、シートベルトを」

「ごめんなさい、自分でやるわ」

眠そうに目をこする。どうしたんだろう、やはり具合が悪いのか。疲れたら言ってくれ、休憩するからと言ったが、大丈夫としか言わない。

「最近ちよっと寝付けなくて：：実家でちゃんと寝るわ」

「そう：：寝てなよ、着いたら起こす」

「ありがとう」

そう言って再び目を閉じる。時間には余裕がある、ゆっくり行こう。エンジンをかけ、ゆるゆると出発した。

なるべく静かにのんびり運転したらいつもよりかかってしまった。沈黙の二時間、だけどもよりあつという間だった。ずっといやな予想ばかりしていた、そうじゃなければいいと願いながら、母との別れを思い出してしまっていた。

到着しても、無理に起こして大丈夫だろうかと不安になった。でももうすぐ十一時だ。彼女は以前、十一時には着きたいと言っていた。肩を叩き、そっと呼びかける。

ちゃんと目を覚ましたときは安心した。

「……どうしたの？」

ぼくの顔を見てぼかんとする。ちよつとムツとした、ついとげとげしくなる。

「それはこっちのセリフだ、心配するじゃないか」

「ああ……ごめんなさい」

しゅんとうつむく。困らせたいわけじゃない、でも言葉がのどにつかえて出てこなかった。いけない。ハンドルにうつ伏せ、こみ上げる感情をこらえる。

彼女の手が伸びてきて、ぼくの肩に触れた。

「ごめんなさい、本当に寝不足なだけ」

「寝不足の原因はなに？ なにかあるんだろう」  
顔を伏せたまま訊ねる。彼女がうつと言葉を呑む音が聞こえた。

「でも……話したらあなた、きつといやな気持ちになると思って」

「おれの気持ちときみの健康が関係あるかい？」

「……そうね」

彼女はなおもためらう。重い沈黙。やがて大きな——ため息というよりは息継ぎをして、意を決したように切り出した。

「オリバーさんって……その、どうなの？」

「オリバー？」

思いがけない言葉に彼女の顔を見つめる。眉間にしわを寄せ、目は泳ぎ、口はへの字に両端を下げる。

「どうなの——と言われても。」

「いい友人だよ。ああ……ちよつとしつこいところがあるけど」

「ちよつと？」

怒気が混じる。さつきまで青白かったほおがにわかにな気する。ひざの上で作った握りこぶしが、かすかに震えている。

彼女は、努めて冷静に話そうとしていた。

「好きだと言われたわ」

——え？



「断ったんだけど、昨日も遅くまで話している。車を買ったと言った、ポツダムまで送り迎えするよって、でも——疲れちゃった」

頭の奥がチリチリする。冷たく白く冷えていく。思い当たる節はあった。オリバーがまたオクタ―ヴに来るようになったのはヒルダが働き始めてからだ。注文するときはヒルダを狙っていたように思う。コップが空になっていても、近くにいないのがおばさんなら、すぐには注文しなかった。

まさか、あいつが？

ヒルダは居心地悪そうに、拳を開き、指を組んで、ギョツと結ぶ。視線はフロントガラスの先へ飛んでいくが、たぶんなにも見てはいない。

「どう思う？」

質問に、ぼくは答えられなかった。

ぼくが黙り込んでしまうと、彼女は大きくため息をついて、ごめんなさいと言った。謝罪ではない、諦念と拒絶だ。

「これはわたしと彼の問題だけ」

シートベルトを手早く外し、ドアを乱暴に開けて飛び降りる。引き留めようと手を伸ばしたが思いとどまった、彼女は帰らなくてはいけない。ずりずりとポストンバッグを引っ張る彼女の顔に映るのは疲れか不満か、泣きそうに見えた。

なんと言えればいいのだろう。あの、と叫んでも続かない。ヒルダはちらとぼくを見上げ、いつものようにありがとうと言い、弾みをつけてドアを閉めようとして——ぼくは手を伸ばし、止めた。

「いいやつなんだ、でもちよつと鈍い、もしきみがいやな気持ちになっても悪気はないんだと思う、でもきみがいやだと思うのを我慢することはない、

だから」

ヒルダはしかめ面をして、黙って聞いていた。

「：：話してみる。今日明日は、どうかゆっくり休んで」

「ありがとう。でも鈍いのは彼じゃないわ——じやあ、また」

今度こそドアを閉める。彼女は振り返りもせず、いつもの方向へ消えていった。

翌日、ぼくはオリバーの家を訪ねた。広い庭付きの、大きくて簡素な建物だ。真っ白な壁が遠目にもよく目立つ。

あいつの家は古くからライプツィヒで機械工場を営んでいた。敗戦後に接収されてしまったが、親父さんやお兄さん、二つ下の妹——モニカも、技師や事務員として勤めている。オリバーは成績優秀、兄弟のうちで唯一大学へ進学した。みんなおれを自慢に思ってくれているんだ、がんばらな

いとと、よく言っていた。

駐車場には車が三台、うち一台は初めて見る。きつとあれがオリバーの車なんだろう。

ベルを鳴らすとあいつのお袋さんが出てきた。

丁寧に挨拶し、彼を呼んでもらうも、しばらくして帰ってくれとの返事を伝えてきた。表情には困惑が浮かんでいる。あの子ったらどうしちゃったのかしら、と。

ぼくは制止を無視し、あいつの部屋へ向かった。ドアを開けた瞬間、思わず鼻をつまむ。たばこくさい。オリバーは持ち帰った仕事に取り組んでいて、迷惑そうな顔をされた。

「忙しいんだ、また今度にしてくれないか」

「ヒルダさんの話だ」

「きみには関係ない」

力尽くで追い出しにかかろうとするが、話してみるとヒルダに言ってしまった、ぼくも引けなかった。

「きみも彼女も大事な友だちだ、険悪になってほ

しくない」

「陰悪？ ばか言え、うまくやれる」

見下すような口ぶりと顔つきだった。カチンときたが、忙しさからイライラしているんだろうと自分に言い聞かせる。無理やり彼の部屋に入ってベッドに腰掛けた。すこし前までは勉強机だった仕事机の背後だ。

「仕事しながらでかまわない」

「気が散る」

「だいたいどうして日曜に仕事をしている？ このあいだまでは職場で片付けてきていたじゃないか」

「……事務所にずっと残っていると無能だと思われるだろう」

ふてくされ目をそらし、鼻で笑う。

「きみにはわからないよ」

そりゃあなあ。机の上には書類やファイルが山積みになり、本立てには辞書が並んでいる。オリバーの就職先は県議会議員の事務所だったはずだ。

持ち帰ってきてよかったのだろうか。

お袋さんがアイスコーヒーを淹れて持ってきてくれた。オリバーはあからさまに顔をしかめた。

飲み物なんか出したら歓迎しているみたいじゃないかってところだろう。ありがたくいたたく。

飲み物が来たことでオリバーもようやくやくいすに腰を下ろす。コップを傾けると氷がカラカラと涼しげな音を奏でた。

「彼女がなにか言ったのか」

諦めたのか、低い声でつぶやく。ぼくは努めて明るく、冷静に答えた。

「近ごろようすがおかしかったから聞き出した。

最初は話しながらなかったよ」

「無理に問い詰めたのか？ 今みたいにな？ ひどいやつだな」

「彼女が躊躇したのはきみとおれが友だからだからだ」

「友だち？ おれときみが？ やめてくれよ！」

激高。室内の空気がビリビリとしびれる。ドア

の外で小さな物音がした。だれかが——おそらくお袋さんだろう、聞き耳を立てている。

血走る目、青白い唇。オリバーは貧乏揺すりをしながらたばこを取り出して火をつけた。灰皿には吸い殻が山になっている。

いや、友だちだろう？

「なあ、疲れているんじゃないのか。すこし休めよ、倒れちまうぞ」

「おれは忙しいんだ、休んでいるひまはない」

「働き過ぎは体に毒だ、たばこも増えたんじゃないか」

「頭脳労働はストレスがたまるんだ」

「ならなおのこと休めよ」

「なんの権利があつて意見するんだ、まだ就職したばかりなんだぞ、そう簡単に休んでいられないんだ、おれの仕事のことなんかなんにも知らないくせに」

きりきりとまくし立て、かと思えば鼻で笑う。

「見ていろ、おれならすぐに出世する。そうした

ら彼女もおれに感謝するようになるさ」

「感謝？」

「おれなら彼女を手助けできる。そうだろう？」

彼女がおれを選んでくれるなら、いずれ、この国でロツクを認めてやってもいい」

ハハハ、と体を揺らして笑う。耳目を疑った、気味が悪い。こいつは本当にオリバーなのか？

オリバーはヒルダが西ベルリンで見たバンドのギターリストだと気づいていた。女のくせにやるじゃないか、美人だし働き者だ、今は学生だがいずれ卒業するだろう、大卒ならおれのパートナーにしようどいい：オリバーはヒルダのことを、そんなふうの評した。

愕然とした。なにを言っているんだ？ きみは彼女に、好きだと言ったんじゃないのか。女のくせにやらちようどいいやら傲慢が過ぎる、パートナーにという相手に向ける言葉じゃない。

ふつつつと怒りがわいてくる。衝動的に殴りかかりそうになるのを必死でこらえた。冷静に冷静

に。けれど説得に口を開こうとした瞬間、さらなる追い打ちを受ける。

「まあ従うしかないさ。ロッカーだなんて、ばれたら大変なことになる」

せせら笑う。

気がついたらあいつの襟首をつかんでいた。オリバーはぎよっと目を見開いて硬直した。だがすぐにまた、あざ笑うような顔になる。

「落ち着けよ、どっちにしろきみに見込みはない」

「どういう意味だ」

「知らないのか、彼女のおばあさんはユダヤだ」

「それがなんだ」

「おまえの親父さんと兄貴たち、ナチ黨員だったんだろ」

大きな音に驚いてやつのお袋さんが飛び込んできた。書類と吸い殻がぐちゃぐちゃにひっくり返り、枕は破れて綿が舞う。殴ったし殴られた。互

いに相手を罵っていたがなんと言ったか、なんと言われたかもよくわからない。

お袋さんの悲鳴を聞いてか、それともお袋さんが助けを呼んだのだったか、親父さんとお兄さんがやってきて、ぼくらは力尽くで引き離された。モニカがバケツで水を運んできて室内にまいた。オリバーが絶叫した。それでやっと気づいた、書類が燃えていたのだ。

わめきながら半泣きで書類を拾い集めるオリバーを、だれも助けなかった。全員が無言で見つめていた。

ヒルダに言った言葉を思い返す。いいやつなんだ、悪気はない——悪気がないわけがない。人を嘲り、侮り、辱める。情けなくなつた。

お兄さんの手を振り払い、ゆっくり立ち上がる。「おれのことはいったかと思ったら言えよ。でも彼女を脅すようなまねはするな、もしすれば、きみを軽蔑する」

オリバーは振り向きもせず吐き捨てる。

「どっちももう遅い」

「：：きみとはもう会わない。友人として最後の忠告だ、ちゃんと休め。：：それじゃ」

騒いだことをご家族に詫びて、屋敷を辞した。オリバーとはそれ以来会っていない。

歩いているうちに怒りは冷え、帰宅したとたん泣きに泣いた。知り合ってそろそろ十年になるというときだ、楽しい思い出がたくさんあった、ついこのあいだまで仲良く酒を交わしていたのに、こんなふうになるだなんて。

鏡を見るとあざがたくさんできていた。口のかなかを切ったらしく血の味がした。翌日からしばらくは会う人みんなに驚かれ、問い詰められた。ギンターとライナルトには当然、そのほかはハンズにだけ、オリバーとけんかしたこと、絶交することを打ち明けた。

オリバーはオクターヴにも来なくなった。さすがに反省したのかと思っただが違った。二週間ほど過ぎたころモニカがやってきて、西へ逃げたのだ

と教えてくれた。

「焦がしたのが持ち出し禁止の書類だったの、わたしたち、そんなのちつとも知らなかった。それで違反がばれちゃって、あのあと一週間は事務所に缶詰で始末書に追われて、すっかり参っちゃったみたい。連絡が取れないなあと思ったら、西に住んでる親戚から電話があって：：そのせいで工場にも当局の監査が入って。本当、いい迷惑。

でもせいせいした。あいつ、工場の仕事をばかにするんだもの、学歴のいらぬ単純労働だって。あなたにもひどいことを言ったんでしよう、ごめんなさいね。

そうそう、お母さんが、氣遣ってくれてありがとうって」

晴れやかな笑顔でとうとうと話す。あのとき、ぼくはどんな顔をしていただろう。裏切られた悲しみと、氣づけなかったことへの自責と、心のうち不可侵の領域を守られた安心とが、溶けて滲されて混ざり合う。そういうえばぼくは、その日も

アイスコーヒーを飲んでいたな。

ヒルダはしばらくポツダムにとどまっていたが、オリバーがいなくなったことを、ラーラを通じて知ったらしい。いつのまにかライブツイヒへ戻っていた。

九月十九日。土曜日だというのに、彼女は夕方、オクターヴに現れた。

### 十三

その日はぼくの誕生日だ。パーティーなんてがらじゃないし金もない、でもいちおう、オクターヴのキッチンを借りてケーキを焼いた。すぐ焼ける簡単なパウンドケーキだ、プレーンを二本とレーズン入りを一本、ミックスナッツ入りを一本。これだけあれば足りるだろう。

まずは手伝ってくれたおばさんにプレーンを一

切れ、おじさんにミックスナッツを一切れ。母さんはレーズンが好きだったな、代わりにぼくが一切れ。いいできた。

子どものころからここに居座っているからか、ちょっと親しくなった人たちはみんな、教えなくても誕生日を知っている。わざわざ呼びはしないが、お祝いに来てくれた人には、ケーキ一切れとワイン一杯を振る舞う。就職して以来、そういうふうにしてきた。

ぼくはまだくさくさしていた。オリバーのことはもちろん、ヒルダがどうしているか、まだわかっていないでいた。連絡くらいしてくれたいのに。楽しくおしゃべりする気分じゃない、ひたすらピアノを弾いてやりすぎそうと考えて、楽譜集を持って行った。

フランツ・シューベルト。三一歳で早世、その短い生涯のうちにおびただしい数の作品を残し、特に歌曲においての華々しい功績から、歌曲の王と謳われている。楽譜集といったってもちろん全

曲収録されているわけじゃないが、これだけあれば場は持つだろう。

ピアノの脇に小さなテーブルを置き、カットしたパウンドケーキとワインを用意する。なるべく明るい曲にしよう、「鱒」を弾いているうちにオクターヴは開店、お客が入ってくる。もちろん全員ではないが、来店時間に合わせてやってくる客はいつもより多く、そのほとんどがぼくのお客だった。ギョント、ライナルト、ハンスや同僚。

お祝いの言葉とともにプレゼントをもらう。こちらからは予定通りケーキとワインを。祝われるというのはいいものだな、徐々に元気を取り戻していった。

ヒルダがラーラとともにやってきたのは開店から一時間くらいしてからだ。彼女の姿を認めた瞬間、驚きのあまり思わず演奏を止め、立ち上がる。おかげで店内のほとんど全員が彼女に注目してしまった。

ヒルダが来てくれたことにはもちろん驚いたが、

彼女の大きな荷物にも、ぼくの心は躍った。身長の半分以上もある、いびつな形の黒いケース——中身がなにかなんて疑問は持たない、見ればわかる。クラシックギターだ。

「お誕生日おめでとう。プレゼントになにがいいかと悩んだんだけど、あなたの好みがわからなくて。代わりになるかどうか：：よければセッションしない？」

「もちろん——もちろん、喜んで」

ほらね、とラーラに小突かれたヒルダが、もう、とふくれ面をしてみせる。青い瞳はきらきらと光り、ふっくらしたほおはほのかに色づく。元気そうだ、よかった。

ヒルダが用意しているあいだに、ピアノの横に彼女のためのいすを置く。どうぞと促すと、足をすこし開いていすにかけ、ギターを構えた。

「今日はシューベルトの楽譜しかないんだ、ほかにも覚えているのなら弾けるけど」

「シューベルトね。なら最初は『野ばら』でど



う?」

「オーケー」

ぼくはピアノ伴奏を、彼女は主旋律をギターで奏でる。しかしもともと独唱曲だ、主旋律だけなんて彼女には役不足だろう。どうするのかと思ったら、見事なアレンジで華やかに、愛らしくまとめてくれた。

断っておくが打ち合わせもなしに相手に合わせるなんて芸当、ぼくにはできない。にもかかわらず、曲が終わると、店内ははじけるような拍手で盛り上がった。クラシックギターでも彼女の演奏はすばらしかった。

ヒルダが照れくさそうにほほえみ、目配せをくれる。顔が熱くなる、ぼくは両手でほおを押さえつけて、緩む口元をごまかした。

「そうだ、彼女にもケーキとワインを。」

「おいしそう」

「ブレインとレーズンとミックスマスナッツ。どれがいい?」

「おすすめは?」

「うーん……」

無邪気な質問に窮する。具材によって調査を変えたりはしていない、あとは好みだ。ヒルダの好みを、ぼくもまだわかっていなかった。

「そういうえばラーラはどこだろう、彼女にもまだ渡していない——そうだ。」

「ちよつと待ってて」

キッチンからナイフと二枚の皿を借りてきて、三種のケーキを一切れずつ、さらに半分にして、二枚の皿に盛る。

もちろん、一皿はヒルダに。

「きみたちだけ特別だ。ラーラにも渡してくる、次になにを弾くか考えておいて……ああ、まだ付き合ってくれるなら、だけど」

「オーケー」

ふふ、とはにかむ。どうしてもニヤニヤしてしまふ、悟られたくなくて、ぼくはわざと顔を背けた。

ラーラはライナルトたちと三人でテーブルを囲んでいた。ワインと半分ずつのケーキが三つ乗った皿を置くと、ギョントアが肩眉を上げて無言のクレームをつけてくる。あいつはあれで食い意地が張っている、おれにもよこせと言いたいんだろう。毎年余ったぶんを持って帰っているんだからいいじゃないか。

「ヒルダさんと半分ずつだ。今日は来てくれてありがとう、元氣そうでほっとした。きみが呼んでくれたの？」

訊ねるとラーラは、まさか、と笑った。

「いいえ、悪いけど、あなたの誕生日なんかわたし知らないわ。行こうって言い出したのはヒルダのほう」

「そうなのか」

おばさんたちから聞いたのかな。振り返ると、ヒルダは先ほどまでぼくがかけていたすに座り、楽譜をめくっては小首をかしげて悩んでいた。やがてページをぐいっと開いて譜面台に戻す。決ま

ったらしい、きびすを返す。

ライナルトが背後から、がんばれよ、と声をかけてくれた。片手を肩まで上げて答える。知らず知らず足が弾む。

ヒルダは曲番号だけ告げた。

「D七七六。どう？」

「オーケー」

派手ではないが、しなやかで美しい曲だ。彼女の奏でるギターの音色に聞き入って、ぼくは何度も手を止めかけた。これはあとで叱られた。

不安や孤独が解きほぐされていく。

楽しいとかうれしいとかそれよりも、ぼくの心は、安堵と安心で満たされていた。母さんのいない初めての誕生日を無事に迎え、無事に終える。今までと同じではないけれど、変わらずに進めるのだ、と。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。お客が一

人二人と帰っていき、もうすぐ今日が終わるとい  
うころ、店内はほとんど空っぽになっていた。

ラーラはいつものまにか帰ってしまっていた。ラ  
イナルトもない。ギョウターだけがケーキ欲し  
さにしつこくテーブルにかじりついていた。そん  
なにケーキが食べたきやライナルトの家で買えば  
いいのにと言うと、買うのもらうのでは味わい  
が違うんだとのたまう。まったく、いい性格をし  
ている。

お開きにしよう、外は真っ暗だ。一人じゃ危な  
い、送っていく。たぶん自然に言えていたと思う。  
ギターを持つと、初めは遠慮されたが、持たせて  
くれと頼むと受け入れてくれた。おばさんたち  
お礼を言って、ぼくらは店をあとにした。

風が吹いていた。この日はまだ暖かいほうだっ  
たと思うけどそれでも肌寒くて、肩をすぼめるヒ  
ルダにカーディガンを貸した。体格が違う、  
ぶかぶかで不恰好だったが、喜んでくれたのでう  
れしかった。

「ところで、今日はポツダムに帰らなくてよかつ  
たのかい？」

「あなたの誕生日のほうが大事」

ふふ、という笑い声がかぐすくったかった。しか  
しすぐ不安に陥る。オリバーの言葉を思い出した。  
ユダヤ人なら、土曜日は安息日ではなかったか。

しかし情報源はオリバーだ。どう切り出したも  
のか。口ごもっている、彼女のほうが察してく  
れた。どうしてこう、ぼくの考えていることがわ  
かるんだろう。

「おばあちゃんはたしかにユダヤ人だけど、わた  
しは無宗教。顔を見せないと心配するから帰って  
るだけ。……まあ、」

静かだ。靴が石畳を叩く音がよく響く。

「ナチのことは、憎んでいる。わたしの両親はナ  
チに殺されたから」

「……そう」

心臓を握り潰されるような気持ちだった。予想  
できなかったわけじゃない、ご両親の話を彼女は

したことがなかった、でも。

「ごめん」

絞り出す。ぼくが謝ることだろうか、でも謝らずにはいられなかった。

父や兄がなにを思っただけでナチスに入党したのか、ぼくは知らない。当時はナチ黨員でないと生きづらい時代で、兄たちに関してはヒトラー・ユーゲントへの参加を義務づけられていた。本心はわからない。いやだったかもしれないし、喜んで入党したのかもしれない。真相をたしかめるすべはもはやない、事実は、ナチ黨員だった、ただそれだけだ。

ヒルダの手がぼくのそれに絡んできた。驚いて振り返る。

「あなたが悪いわけじゃない」

ひんやりして、温かい手だった。

歩きながらお互いにいろいろ話した。ぼくからは父のこと、兄たちのこと。彼女からは、おばあさんのこと、ご両親のこと。お母さんがユダヤ人

で、お父さんはお母さんや親戚、友人たちをかくまっていたのだという。彼女はおばあさんとともにソ連へ逃げて無事だったが、ご両親は処刑された。ポツダムはもともと暮らしていた町だったが、戦後だいたい経ってから戻ったとき、あまりの変貌ぶりに言葉をなくした。それでもすこしずつ取り戻してきて、やっと落ち着いてきた。

「西じゃナチの残党がのうのと公職に就いてる。おばあちゃんはその嫌ってる。だからわたしがベルリンに通ってることもないしよ……前の勤め先のことね、ぜったいしないしよよ」

いたずらっぽく、唇に人差し指を当てる。

「うん」

「じゃあ……送ってくれてありがとう。また来週ね」

古いアパートの前にいた。見上げるとラウラが手を振っている。ここか。ギターとカーディガンを交換する。

「また来週、おやすみなさい」

笑顔で手を振り合う。ひんやりして、暖かい夜だった。

#### 十四

ヒルダと大げんかしたのは十一月の終わりだったと思う。オクターヴでギンターやライナルト、ラーラを交え、クリスマスの過ごし方について話をしていたときのこときっかけだった。

夏期休暇だけという約束で始まったオクターヴでのアルバイトだったが、ヒルダは思いのほか気に入らないう。授業が再開してからも空いている日は店にいて働いていた。練習できるといふのは大きかった、ギターを持ち込み、余裕のあるときはリクエストを受けたりもした。セッションもした、ライナルトと三人で合わせることもあった。だれより喜んだのはラーラだ、ほとんど連日来店

するようになり、自然と、主に音楽について四人で語らうようになった。

町ではクリスマスマーケットが始まっていた。東ドイツじゃ宗教の類いは好まれない、ほとんどの人が無宗教だけれど、それでもクリスマスはわくわくする。だれもがどこもなく浮き足立っていた。

せつかくのクリスマスだ、演奏会なんてどうだと、だれからとなく提案があった。だがヒルダが難色を示した。割って入ってきたおじさんにも、そういうのは目をつけられるからと釘を刺され、話は流れた。

話が一区切りついて、ヒルダがすこし席を外した。そのあいだに、たまたまモニカがやってきた。「こんにちは、ごいっしょしてもいいかしら？」  
「ああ、ちょっと待って」

ライナルトがほかのテーブルからいすを奪い、自分とギンターのあいだに差し込んだ。モニカは礼を言ってそこにかけた。ラーラとは初対面だ、

オリバーの妹さんだと紹介すると、ああ、と小さくつぶやいて、愛想笑いをしていた。

モニカとはオリバーが西へ行った話を聞いて以来だ。オクターヴに来たのも二回目、だいたい彼女の家と工場の立地から考えて、ふらりと立ち寄るような場所じゃあない。にもかかわらず訪ねてきたのは、あいつのことで話したいことがあるのだろうと察しはついたが、まあ、案の定だった。「手紙が届いてさ。今はミュンヘンにいるみたい、仕事もしないでぶらぶらしてらって」

「へえ」

「あなたたちにも伝言があるの。今日はそれを届けに」

ここでヒルダが戻ってきた。ラーラにしたようにモニカを紹介すると、見るからに不機嫌になった。

「そう。それじゃあわたしは仕事に戻るわ。ごゆっくり」

笑顔を作っただけが快く思っていないのは明

らかだった。しかし仕事と言われては引き留めることもできない。幸いというべきか、モニカは気にしていなかった。ありがとうごさいますとにこやかに返して話を続ける。屈託のない返事にラーラは毒気を抜かれたようだ、素直でいい子だわ、と笑っていた。

そうだ、いい子なんだ。だからなおのこと、ヒルダの態度が気になってしまった。モニカが帰ってから声をかけようとしたが、まだつむじを曲げていて、諦めて帰ってきた。

次の日はオクターヴに来なかった。その次の日はもう土曜日で、彼女はいつも通り、約束の時間に営業所へ現れたのだけど、お互い——いや、ぼくだけだったかもしれない、とにかくごちなかつた。

会話も弾まなかった。彼女のほうからはいくらか話を振ってくれていたのに、右から左、ぼくの耳を通り抜けていく。生返事を繰り返すべくに呆れて、彼女もいつしか無言になった。

再び口を開いたのはアウトバーンを降りたときだった。もう一〇分もすればポツダムの営業所だ、無事にやりすごせたとこっそり胸をなで下ろしていたところ、冷たい声が飛んできた。

「オリバーさんはなんてよこしたの？」

ため息交じりに、素っ気ない口ぶりで。興味なんかちっともないくせに、仕方ないから聞いてあげるとでも言わんばかりだ。そんなんじやあぼくだって頭にくる、きみには関係ないよと答えると、ヒルダは目をむき、にらみ、それから目をそらしてほおを膨らませた。

「あら、そう」

「そうさ、あいつが反省しているとか、二度とこちらには戻らないとか、きみには関係ないだろう？」

「そうね、関係ないわ。ああそう、それならもう二度と会わなくてすむのね、うれしいわ」

「よしてくれ、ぼくには友だちだったんだ！」

つい声を荒げる。ヒルダはごめんなさいと言っ

て——口先だけだ、またそっぽを向いている。

モニカがもたらした伝言は、ぼくを少なからず救ってくれた。仕事から離れたオリバーは冷静さを取り戻したようで、ひどいことをしたと謝罪の言葉をくれた。彼女にもどうかよろしくとあったから、これはヒルダにも伝えるべきだったのだろう。けれど言いたくなかった。あいつの名前を出すだけで嫌悪感をあらわにする彼女だ、きつと聞きたくないだろうと思った——いいや、違う。あいつの話をして、また不機嫌にされるのがいやだった。

わかってはいた。そもそもはオリバーのまいた種だ、彼女があいつを嫌うのは当然だ。彼女は詳しく話したがらなかった。ぼくには話せないくらいひどいことを言われたのかもしれない。不愉快な思いをさせたことは申し訳ないと思っている。

でも友だちだったんだ。大事な仲間の一人だった。これからもぼくらが集まればあいつの話は出てくるだろう、モニカが来れば必然だ、そのたび

にきみはあんなふうに感情的な、とげとげしい態度を取るのか？——そんなことを言ったと思う。

ヒルダは気色ばんで反論した。

「黙ってうなずいてろって言うわけ？ 嫌いな人の話を知らない人と盛り上がっているのを？」

「そういうわけじゃ……」

「ならどうしろって言うの？」

語気を強める。どうしろ？ どうしろって……わからなかった。

「それよりあなたこそ、わたしが気に入らないからっていつまでも子どもみたいにふてくされて。

いやならいやだと言えばいいじゃない、ご機嫌取りはしたくない」

「ご機嫌取りなんかいらぬ」

「そうは見えなかつたけど。今日もありがとう、じゃあ、また」

ポツダムの営業所に到着、ヒルダはぶつきらばうに言うのと、さっさと降りて足早に消えていった。

翌週も険悪な雰囲気は続いた。口も聞かない、

目も合わさない。合いそうになつたらそらすんだ、お互いに。でも彼女はオクターヴで働いているし、ぼくのほうもピアノを弾くにはオクターヴへ行くしかない。不穏な空気を漂わせていた。

そんなふうなのに、土曜日になるとぼくはいつも通り三〇分早く出勤して支度をしたし、ヒルダは約束の時間に現れた。ぼくらは挨拶のほか一言も交わさず、愛想笑いもせず、その日はベルリンまでだったから二時間以上、無言のドライブをした。

これを三週間繰り返した。もちろんこのあいだ、彼女との共演はなしだ。ライナルトはオロオロし、ラーラは呆れていた。ギュンターは……なにをしていたっけ。

いよいよ迎えたクリスマス、ぼくはオクターヴにいた。会社は休みだしほかの店もほとんど閉まっている。昨年までは母と過ごしたが今年はひと



りぼっちだ、家にいっても塞ぎ込んでしまいそうでふらりときてみたら、開店中のを示す札がかかってた。

「来ると思ったよ、いっしょに楽しもう」

おじさんがそう迎え入れてくれたのがうれしかった。

店にはぼくと同じように、クリスマスを一人で迎えたらしい人たちが集まっていた。ホットワインやカモの丸焼きをのんびりと味わっている。ギョウタンもいた。ヒルダはいない、実家で過ごしている。

おじさんがピアノを弾いている。その脇に、飾られたツリーがそっとたたずんでいた。

ロベルト・シューマン、作品十五「子供の情景」。全十三曲からなるピアノ曲集だ。

ぼくに気づくとおじさんは演奏を止め、席を立った。続けてと言ったが仕事をしたいのにとこやかに返され、半ば強制的に、ぼくはピアノの前に座らされた。仕方がない、なにか弾こう。同じく

シューマンの作品二、「蝶々」。置きっぱなしにされたおじさんの楽譜集をばらばらとめくったらあったんだ。クリスマスらしい曲ではないが、明るくて楽しそうな曲ならいいだろう。

弾き始めるとなんだかんだで夢中になる。おじさんがテールを寄せてくれて、おじさんがホットワインとカモを一切れ、それからケーキを置いてくれたのだけど、気づいたときには冷めていた。まったくもう、と笑いながらおかわりをくれた。

思わぬ来客が二人あった。

一人目はベルントおじさんだ。手を休めてホットワインで温まっていたら乱暴にドアが開いて、驚いて振り返ったら彼だった。酒焼けしたガラガラ声で、盛り上がってるなあ、なんて下品に笑う。おじさんはカッと目を見開き、おじさんは動揺して青ざめ、店内にいた客は一様に顔をしかめた。どうしてここに？

ベルントおじさんは客たちの顔ぶれを、まるで検問するかのようじろじろ見ると、鼻で笑った。

「寂しいなあ、クリスマスだってのによ」

「あんただって同じだろ」

反射的に言い返す。強気なぼくにおじさんや客たちが驚いていた。どうして？ もう遠慮するのではない、母さんもないし家だってあいつのものじゃない。

ベルントおじさんは、しかし愉快そうだった。

ピアノにもたれ、蓋を開けたり閉めたり、なかを覗いて——最低の気分だ、酒臭いし、耳障りな声でこうあざ笑う。

「彼女はどうした、フラれたのか？」

「あなたには関係ないだろう」

「知ってるぞ、けんかしたんだってな、音楽性の違いってやつか？ はは、おまえみたいな下手くそに音楽性もないか——音楽家っぽく言ってる、不協和音ってやつだ」

げらげらと笑う。いったいどこで聞きつけたんだ？ とんでもない侮辱に激高し、怒鳴ろうとしたとき、朗らかな声が出た。

「不協和音、けっこう！」

二人目。ドアの前で満面の笑みを浮かべ、ストリンドナー先生が立っていた。

## 十五

とっさに立ち上がる。勢い余ってイスを倒すところだった。

分厚い毛皮のコートと揃いの帽子には、そちこちに小枝と枯れ葉がくつき、あるいはぶら下がっている。羽毛がついている、最近動物園でも行ったのだろうか？ ストリンドナー先生にはいつものことだが、ベルントおじさんはあんぐりと口を開けていた。

「なんだ、あんたは」

「失礼。彼はわたしの教え子でね、不協和音と言いなさったか、すばらしい評価です、ありがとう

——音楽について学んでらっしゃるんで？ 不協和音についてぜひ語りたい！」

先生の純粹無垢な質問に、ベルントおじさんは口ごもる。そりゃあそうだ、ベルントおじさんに音楽のことなんてわかるはずもない。聞きかじった用語を使ってみただけだ。

ぼくはというと、実に九年ぶりの先生の登場に、一気に心が晴れた。

「先生、お久しぶりです。どうしてここに？」

「アルベルトくん！ 立派になったなあ。きみが変わらずピアノを愛していることをうれしく思うよ。」

なに、ご母堂を亡くしたきみがどう過ごしているか気になって、手紙を送ったのだがね、返事がないから来てみた」

「手紙？」

「届いていないかな？ どこか旅に出たのかもしれん」

まあたいしたことは書いていないとカラカラ笑

う。先生からの手紙が届かなかっただなんてぼくには一大事だ、すぐに郵便局に問い合わせないと怒ってみせると、やめておきなさい、とおばさんに制止された。

クリスマスプレゼントだと、先生がボールほどの包みを差し出した。なかからは食べごろになったバナナが三房も出てきて、みなさまで、と仰るから、店内のあちこちから歓声が上がった。ギョウターなんか目の色を変えて飛びついた。先生曰く、ヘルベックがあまりにもバナナに感激するからわけを聞いたら、東ドイツじゃ高級品だと言う。喜ぶと思って手土産に選んだのだそう。

さて、とベルントおじさんに向き直る。

「不協和音の妙なる響きについては、わたしも一家言あるのですよ」

「はあ、いや、ご教授はけっこう」

「遠慮なさらず」

ベルントおじさんの声は届かない。先生は喜色満面で荷物を広げ、バイオリンを取り出した。先

生のバイオリンをぼくは初めて見た。

「あまり得意じゃない——アルベルトくん、伴奏を頼めるかな」

「はい」

恥ずかしそうにしながら楽譜を差し出し、自身は左手にバイオリンを、右手に弓を構える。

クロード・ドビュッシーのバイオリンソナタ。

ドビュッシーの最後の作品だ。得意ではないと謙遜しておきながら、先生のバイオリン演奏は見事だった。弾ききった瞬間、拍手喝采が起こった。

たぶん半分はベルントおじさんへの当てつけもあったと思う、全員が音楽に明るいわけじゃない。

先生は照れくさそうに両手を挙げ、お辞儀をし、称賛に応える。

「音楽というのはいいものすな、このように初対面であつても、一人ずつと言葉を交わすことはなくとも、わかり合えるのですから」

ハハハ、と豪快に笑う。一方、ベルントおじさんの顔は引きつっている。こういうとき無邪気は

やっかいだ、遠回しな拒絶、婉曲な辞退はいっさい通じない。いや、もしかしたらわかっていたのかもしれないが、少なくとも、先生からうかがえたのは音楽への広く深い愛だけだ。

一息ついてから再びバイオリンを構える。

「そもそも和音には三種類ある——失礼、もちろんご存知でしょうが」

言ってから、幾組かの和音、つまり二つ以上の音を同時に奏でる。美しく響くもの、明るいもの、暗いもの、不安を覚えるものもあつた。

ベルントおじさんはうなだれている。

「完全和音はこのように、完全に響き合い、とても美しい。協和音——長短三度、六度の和音だね。これも美しい、かつ表情が生まれる。アルベルトくん、ちょっとピアノを貸してもらえるかな」

喜んで席を譲る。先生は弾むような足取りでいすに腰を下ろし、鍵盤に手を置いた。ドミソの三和音。シンブルで明朗な、ハ長調の主和音だ。何度か連打して、おや、と眉根を寄せる。

「響きが狂っている、蓋かな。イレーネさん、修理に出してみたまえ」

首をかしげつつも指は踊り始める。ドファアラ、シレソ、再びドミン。

「そして不協和音だが——完全和音と協和音以外の和音が、そう呼ばれる。長短二度、七度と、増減のすべてだね。ハ長調で言えば、ドとレ、ドとシ、ファとシは不協和音となる」

順に音を出す。快い響きではない。先生は次々というんな不協和音を取り上げる。不気味で泣き出しそうな音たちがぼろぼろと生まれ、こちらまで悲しくなってくる。

不協和音か——ヒルダを思う。

ベルントおじさんを認めるようで悔しいが、たしかにぼくたちは不協和音なのかもしれない。どうもきれいに響かないんだ、互いに穏やかなときはいいのだけれど、意地の張り合いになると収拾がつかない。

ぼくらは合わない。合わないんだ。

「だがね、」

ハツと顔を上げる。

ドビュッシー「ベルガマスク組曲」より第三曲「月の光」。波のように打っては返す旋律が、静かに、優しく染みる。

「わかるかね——不協和音の響きが——ここにも、ここにも」

耳を澄ませ、恍惚の表情を浮かべて、先生がささやく。

その一瞬一瞬を切り取れば、たしかに不協和音だった。けれどそれとわからないほど優雅だ、旋律の優しさを引き立て、流麗な響きを生み出す。ゆったりと湖面をたゆたうような、夢のように幻想的な音たち……

演奏が終わると再び拍手が——さっきみたいな皮肉ではない、先生への賛美が店内にあふれた。

立ち上がり、再びバイオリンを手に取る。

「さて、アルベルトくん。平均律と純正律の違いについては、まだ教えていなかったね」

弦を指で弾きながら言う。無言でうなずくと、  
よろしいと言って、音を二つ鳴らした。

「ヨハン・セバスチャン・バッハが『ウエル・テ  
ンペラメントによるクラヴィーア曲集』を発表し、  
その後、十二平均律が生まれた。これにより音楽  
は自由になったが——同時に、自然で完全なハー  
モニーを失った」

「完全なハーモニー、ですか」

「そう。そもそも音楽というのは数学だ。」

A という弦を弾く、A の半分の長さの弦を弾く、  
するとちょうど美しく響く。これが一オクターブ  
だ。

では三分の二にしたらどうか？ これも美しく  
響く、完全五度だ。最初の音がAだから、これは  
E。ではEを三分の二にしたら？ Eの完全五度  
上、F、G、A、H、：：C。こんなふうには繰り返  
返して八音を求めた。これが純正律だ。ずいぶん  
大雑把な説明だが、詳しくはまた今度。

美しい和音を求めて生み出された八音だ、美し

くないわけがない！ ：：だがね、計算してみれ  
ばわかるが、これでは「ずれ」が生ずる。組み合  
わせによっては同じ調のなかですら合わない、転  
調なんてもってのほかだ。

十二平均律は大発明だった。その名のとおり、  
一オクターブを十二等分して音を割り振っている。  
どんな調でも演奏できる一方、和音にはどうして  
もうねりが生ずる——調子外れになる」

弓を弾く。鋭い音が耳をつんざき、たまらず両  
手で塞ぐ。汚い音ではないがどこことなく落ち着き  
がない。先生はにやりと、口角を片方だけ上げた。  
やり直し。

「アルベルトくん、不協和音は悪者かね？」

「：：いいえ」

「そうとも」

今度は美しいハーモニーだ。柔らかく優しい、  
温かい旋律。落ちていく高音、受け止める低音：  
：先生の作品だ。

だれもがうっとり聞き入っていた。

「同時に鳴らせば不協和音でも、順に奏できれば旋律になる」

ベルントおじさんはいつのまにかいなくなっていた。

「不協和音、けっこうじゃないか。すなわち、同じ調べのなかにいるということだよ」

その夜、ベッドに寝転がって天井を見つめ、静かに考えた。

ベルントおじさんが帰ってしまったことを、先生は心底残念そうにしていた。まだ音楽を始めたばかりなのだろう、あの年齢でなお向上心にあふれている、すばらしいと褒め称えていた。純粹って怖いな。

それから先生の近況をうかがった。ヘルベックが弟子入りして以後、入門希望者が来始めたそうだ。小さいながら教室を開いて忙しくしているという。ぜんぜん知らなかった、どうして教えてく

れないんですかと言ったら、わたしの手紙は旅が好きらしい、と返ってきた。

すこしばかりレッスンもしてくれた。シューマンの曲をいくつか。最中、先生がぼつりとこぼした。

「純正律なのだよ、きみもわたしも」

「どういう意味です？」

「平均律から見れば調子外れなのだ、たった一音がすべてを台無しにする、実に不愉快な異音なのだ。」

だがくさってはいけない。諦めることもない。なに、仲間ならすぐ見つかるとも、奏でることを恐れさえしなければ。もしそんな相手に出会えたときは、きみ、大事にしたまえよ。互いの音をよく聞くんだけ。不協和音も——鳴らさなければ——よくない」

噛んで含めるように。先生はなにも知らないはずなのに、知らないふりをしているだけ、本当はすべてを知っているかのように、ぼくを諭した。

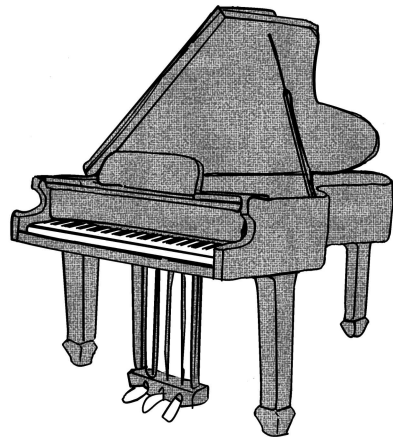
言葉はじんわりと、頭に、心に染みこんでいった。目を閉じ、思い返す。

わかっていた。感情的になっっているのはぼくのほうだ。なにひとつまともに言い返せない、でもどうしても折れたくなかった、妙なプライドが邪魔をした。ぼくが悪かった、けどあんな言い方をしなくてもいいじゃないか、オリバーのやつ、いなくなっただけだからもやっかないやつだ——そんな逆恨みさえしていた。

受け入れてほしかった。聡明な彼女だ、わかってくれると思った。しかしそれは甘えだ。

謝ろう、ちゃんと。心に決めた。ぼくは謝るのが下手くそだ、手紙にしよう。きつと次に会うのは年明けだ、そのときに渡せるように、書いておこう。

雪がよく降った。クリスマスは静かに過ぎた。





次にヒルダと会ったのは一月四日だった。仕事終わりにオクターブへ行ったら、空いたテーブルを片付けていたので、手紙を渡して——押しつけて帰ってきた。どきどきした。あれでよかっただろうか、かえって気を悪くしないだろうか、悶々と考えた。食事くらいしてくればよかったと後悔したのは家に着いてからだ、食料がなんにもなくて、空きっ腹を抱えて寝た。

返事が来たのは三日後だ。その日はたまたま仕事かひまで早くに上がった。オクターヴに着いたのはまだ開店前だったが、そこは勝手知ったる他人の店、裏から入ったところ、ちょうどヒルダと出くわした。まさか裏から入ってくるなんて思わなかったらしい、目も口も大きく開いて言葉を失っていた。やあと声をかけたが返事がなく、目をそらしそそくさと更衣室へ引っ込んでしまった。ちよつとシヨックだった。

しかし三分もしないうちに戻ってきた。手紙を持って。三日前ぼくがしたように、黙って押しつける。

手紙にしてはすこし大きめの封筒で、妙に厚みがあった。帰ってから読んで言うので、すぐさま帰った。緊張した、胃がギュツと痛んだ。手紙を差し出す彼女の顔はこわばっていて、もしや迷惑だとか、もう会いたくないとか、そういうことが書いてあるんじゃないかと不安になった。ひとりばっちの静かな部屋なのに、心臓の音がやけにうるさかった。

覚悟を決めて開封する。ぽかんとした。手書きの楽譜だった。

なんの曲だか、すぐにはわからなかった。五線譜には主旋律のみ、ト音記号にシャープが三つ、イ長調か嬰へ短調か——イ長調だな。ところどころにA、D、Eなどとアルファベットが振ってある。

意味がわからない。試しに歌ってみる。覚えの

ない曲だ、だがくせのようなものを感じた。ひよつとして、ロックなんじゃないか？

しかしロックはわからない。だいたい、これをどう解釈しろというんだ。オクターヴで演奏したのか？ まさか、さすがにまずいだろう。やるならロックとわからないようにしないと——待てよ、そういうことなのか？

ぼくは作曲をしない、五線紙なんか持っていない。悩んだ末に、白い紙に定規でちまちまと線を引いた。一段目に彼女の旋律を書き取り、二段目と三段目を大譜表にして伴奏をつける。なるほど、アルファベットは和音を指示するものだと理解した。

だがそれがわかっても難しい。単純な三和音、あるいは多少転回してみせるが、あまりにも稚拙だ。せめてピアノが欲しい、主旋律すら、弾いてみないことにはいまいつかみきれない。

時計を見ると午後八時。いつのまにこんなに時間が過ぎたんだらう、外はとつぷりと暗い。オク

ターヴはまだやっているはずだ。いても立ってもいられず、コートを羽織り、楽譜だけを持って、店へ向かった。

オクターヴは混み合っていた。酔っ払いたちが賑やかに酒を楽しんでいる。ぼくがいつも座っている席も埋まっていた。おばさんが申し訳なさそうに眉尻を下げたけれど問題ない、ピアノを弾きに来たんだ。おじさんが、おまえの指定席はそこだよなあ、と笑った。

騒がしいのも都合だった。だれかに聞かせたいわけじゃない、消音ペダルを踏み、なるべくそつと鍵盤を押す。まずは主旋律だけ、楽譜は手元に、ラの二分音符から始まる四八小節。なるほどこんな曲なのか。アルファベットをもとに伴奏をつけるなら、……うまくない。

これまで既存の曲を楽譜通りに弾くことしかしてこなかった。自分で考え、作り出すということが、こんなに難しいだなんて思わなかった。一からじゃあないのに、ヒントもあるのに。

彼女の作曲だろうか。春を駆け抜けるような、明るく希望に満ちた旋律。スタッカートがついている、元気な印象をそがないように——足すなら花だ、花畑がいい。赤やピンク、青や黄色、色とりどり、大小様々な花たちが咲き乱れるなかを、風が抜けるんだ。

そんなことを考えているうちにおばさんに頭をはたかれ、閉店だよ、と告げられた。びっくりして時計を凝視した、いつのまにか店内は空っぽ、すっかり静まりかえり、ぼくだけが取り残されている。翌日も仕事だ、慌てて帰ってベッドに入った。でも眠れない、耳のなかでずっと音符が遊んでいる。

花畑か、いいな。春になったらピクニックでも行きたい。サンドイッチでも持って行って、彼女にギターを弾いてもらって。車が欲しいな、そうだ、車があればいつでも彼女をポツダムへ、ベルリンへ迎えに行ける——待て待て、気が早いぞ。まずはちゃんと仲直りして——手紙の返事が楽譜

とはどういうつもりなんだろう。歌詞があればまだしも、文字は例のアルファベットのほか、なにもなかった。

翌日もぼくはオクターヴでピアノと奮闘した。彼女はいなかった。もとから休みだったのか、ぼくが来ることを予期して避けたのかはわからない。ライナルトとラーラが来て、どうやら察してくれたが、助言を求めることはできなかった。二人とも終始ニヤニヤしているのが気に障った。人ごとだと思っただけ！

結局この日も気づいたら閉店時間だった。さすがに帰宅後はすぐに寝付いた。慌てたのは翌朝だ、土曜なのにいつも通りの時間に起きてしまった。営業所までマラソンする羽目になってしまった。

時間には間に合った。だのに定刻通り出勤してきたハンスや同僚たちに笑われた。どうしてだろうと首をかしげていたが、やがて現れたヒルダまで、ぼくを見るなり笑いをこらえる。でも理由を言わないからイライラした。いったいぜんたい、

なんだったんだ。

八時をすこし回って出発する。ようやく太陽が顔を出したところだ、あたりはまだ暗い。ドライブは年末と同じく、挨拶を交わしたきり無言、無音で始まった。彼女の口の端からこぼれる笑い声以外。

それが五分も続いたら、さすがに黙っていられなかった。

「なにかおかしい?」

「ただちは隠せていなかったと思う、しかし隠さなくてもいいとも思った。声をかけるなり、ヒルダはもはやためらいなく笑い出す。

「だってあなた、その…その髪! ひどい寝癖、鏡見た?」

「えっ、寝癖?」

そんなこと言われても今さら止まらない、とっさに手で髪を撫でるがわからない。もつと早く言ってくれよ、あれだけ人数いてだれも教えてくれないなんてひどいじゃないか。悔しさと恥ずかし

さで泣きそうになるのを、顔をしかめてごまかす。

「寝坊したの?」

「ああ、だれかさんのせいで」

「だれかさんって?」

「さあね」

久しぶりに交わしたまともな会話がこれだ。あつちは完全におもしろがっているのに対し、こっちは完全にふてくされていた。あまりの素っ気なさか不安にさせたのだろうか、おずおずと、彼女が弁解する。

「手紙は——苦手なの、もらうのはうれしいんだけど、自分の気持ちを文字にするって、わたしには難しい」

意外だった。こうして話しているときには、ぼくなんかよらずとすらすると、的確な言葉選びをするのに。

「おれには曲を作るほうがよっぽど難しいよ」

「そうなの? でも、受け止めてくれてうれしい」

はにかんでほおを染める。単純なもので、うれしいと言われると、こっちもなんだか気持ちがいい。わだかまりが解けるのを感じた。

ぼくが編曲に四苦八苦していることはラウラから聞いたようだ。楽譜を受け取った日の夜には彼女自身もぼくの奮闘を見ている、まじめに考えてくれたんだと安心した、とほほ笑む。

今なら訊けると思っていくつか質問した。まずはアルファベットの意味だ。あれはやはり和音を示すもので、コードネームと呼ぶのだそうだ。

「スパイみたいだな」

「コードネームはAメジャー?」

「ならきみはHメジャーかい」

「残念、ロックじゃHを使わないの」

肩をすくめる。そうなのか。

「調にしましょう。イ長調とロ長調……ロ短調のほうがいいですね」

視線は空へ、細い指先で顎をつつきながら、いたずらっぽい笑みを浮かべる。さすがにちょっと

考えた、ああ、下属平行調か。音楽理論はおばさんから習ったのと本を読んだくらいだ、それもずいぶん離れている。いつかは音楽大学へ通うんだ、これじゃあいけない、勉強し直さなくちゃあな——こっそり反省すると同時、ほおが緩む。

ロ短調のほうがぼくに近い。ぼくに近い、か。オクターヴで演奏したいのかと訊ねると、それもいいねと返ってきた。ならどういうつもりで楽譜をよこしたのかと訊けば、あなたならわかってくれると思ったと言う。これで正解だったかなと確認すると、にこりと一瞥をくれた。

車両は太陽から逃げるように、西へ、北へと進む。濃紺の空は、背後から迫る橙色と混じり合い、赤くにじんできく。雲の腹が黄金に光る。

一九六〇年一月九日。幸福な夜明けだった。

それからぼくらのあいだを、封書がたびたび行き交うようになった。彼女からはいつも楽譜で、

ぼくからは手紙だったり、彼女の楽譜に伴奏を加えたものだったり。つくづく思い知ったがぼくに作曲や編曲の才能はない、毎回苦悩した。引き換え、彼女のほうはバンド用の楽曲も書いていたのだから舌を巻く。でも、うまくいかないことも楽しかった。

できあがった曲はオクターヴで演奏した。なに、個人的に楽しんでいただけだ、演奏料を取ったりはしていない。当局のやつらが怪しんで調べに来たが、おじさんがその都度、客のお遊びだと追いつ返してくれた。実際、ぼくは一円ももらっていない。ときどきごちそうになるのはぼくとオクターヴのよしみってやつだ。もっとも、演奏目当てらしい客がちよっと増えたという副作用はあったようだが。

封筒には宛名の代わりにこう書かれるようになった。口短調へ。あるいは、イ長調へ。交互に順番に、ときには不協和音も奏でながら、ぼくたちはぼくたちだけの音楽を育てていった。

一九六一年、それはとつぜんだった。

四月。ライナルトが興奮気味に持ってきたニュースに、ぼくたちは胸を躍らせた。ソ連が初めて宇宙に人を送ったのだ。ユーレイ・ガガーリンはボストーク一号に乗って宇宙へ飛び立ち、無事帰還した。地球は青かったという彼の言葉を、ライナルトはまるで金言のように尊び、うっとりとし返した。

「宇宙に人が行ったんだ、ついに！」

「それはいい、なんの役に立つのさ」

顔を寄せ合い、ギンターが真剣なまなざしでライナルトに問う。ギンターのラジオ趣味とライナルトの宇宙趣味は、まったく別の話のようで、相関性があった。宇宙開発が進み、人工衛星を介した放送がもはや夢ではないことを、ぼくらは知っていた。二人が活発に議論する横で、宇宙戦争という小説があったなあ、なんて考えていた。

ガガーリンが宇宙へ行った。その話を聞いた日は何度も空を見上げた。大地のないあの雲の上まで人が行って、戻ってきたみたいなんて嘘みただった。見上げた空は青い。見下ろした地球も青いのか。ふしぎな感じがした。

五月。またもライナルトからのニュースだった。ラーラもいっしょだった。今度のニュースは個人的、かつぼくらには宇宙開発よりよっぽど重大だった。

「結婚する」

驚きのあまりギンターがたばこを落とした。

ライナルトは顔を真っ赤にしてほころばせ、照れながら頭をかいた。ラーラも珍しく恥ずかしそうにしていた。あんまり幸せそうにするもんだから、ついついからかいたくなった。

「きみのガーベラはライナルトってことかい、ラーラ？」

「やめてくれよアルベルト」

ライナルトの顔がますます赤くなる。困ったよ

うに眉尻を下げるライナルトとは反対に、ラーラはウフフとはにかんで、こともなげに答えた。

「いいえ、エーデルワイスよ」

思い浮かべる。白くて小さい、星みたいな花だ——なるほど、ライナルトにぴったりだ。ヒュウと冷やかしたら、あとでヒルダに叱られた。

それから、わたしの家のことも考えてよね、とも。考えるまでもない、うちに来たらしいよと答えたら、満足そうに笑っていた。

六月、ぼくはついに車を手に入れた。中古車だが新車と同じくらい高価で、しかもちよつと調子が悪かった。自分で整備しようとしたがどうもうまくない、ギンターに手伝ってもらった。あいつや会社の手ついで必要なパーツを集めて、なんとか走れるようになったのは七月半ばだった。ギンターには西ベルリンで入手した、まだ青いバナナを渡した。

西ベルリンへ行ったのはヒルダのバンドのライブがあったからだ。ライナルトがどうしても苦手

だといふので、ライブへはラーラと二人で行くようになっていた。演奏終了後、ベルリン・ドイツ・オペラ——西ベルリンの歌劇場だ——がもうすぐ完成すること、九月にこけら落とし公演があることを知った。演目はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」だった。

オペラか、機会があれば観てみたいなとつぶやくと、ゼルマが聞きつけて、用意しましょうかと言った。

「ライナルトくんも、オペラならいいんじゃない？ ラーラとヒルダと、あとわたしも混ぜてよね、五人でどう？」

「チケット、五人ぶんも取れるの？」

「わたしに任せてよ」

ラーラの結婚祝いもかねて、と胸を張る。ゼルマはお嬢さまらしい。そういえば誕生日パーティーでライブを催して見知らぬ人まで迎え入れる人だものな、と妙に納得した。

本当にチケットが取れたのかはわからない。その年、ぼくたちは分断されたのだ。

八月十三日は日曜日だった。昼過ぎだったと思う、そろそろオクターヴへ行こうかと身支度をしていたら、血相を変えたギュンターとライナルトが訪ねてきた。手にはラジオを抱えていた。なにやら必死に説明しようとするが要領を得ない、迎え入れると、手際よくラジオを設置する。

呆然とした。

「西ベルリンが封鎖された」

ぼくが理解した瞬間、全員が沈黙した。

それからハツとした。ヒルダは？ 今日には練習の日ではない、ポツダムにいるはずだが、列車はどうなっている？

連絡を取ろうにも、当時電話は普及していなかった。ぼくの家にもない。郵便局へ行こうと立ち上がったが、長蛇の列だったとギュンターが首を振った。車がある、迎えに行ったらどうか、しかし家を知らない、ラーラなら知っているんじゃない



いか、今日は当直で仕事に行っている——だれかがしゃべり始めるとみんなが怒濤の勢いで発言し、それが途切れるとまただんまりになる。異様だった。

ぼくらはラーラの勤める病院へ行った。無言だった。まるで隠密活動だ。到着してすぐラーラを呼び出す。彼女は神妙な面持ちで、落ち着いて、騒がないでと言った。

「患者さんもいるから」

ニュースを聞いてショックを受けた人がちらほら来ているらしい。

「ヒルダから電話があったの、戻れることは戻れるみたい」

「そう」

ならよかった、とは言えなかった。

ラーラが仕事に戻り、ぼくらは病院を出た。頭はまだ混乱していた。西ベルリンが封鎖、それはもうあちらへ行けないということか、仕事なら行けるのか、個人でも行けるのか。正確な情報はど

こへ行けば手に入るのだろう。沈黙のままとぼとぼと歩いていると、むこうからハンスが小走りやってくる、ぼくを見つけて叫んだ。

「いた！ アルベルト、来い！」

「どうしたんです」

「所長から話がある。急げ」

せき立てられ、わけもわからぬまま走り出す。ギンターとライナルトを置いてけぼりにしてしまったが、気にしていられなかった。

営業所にはすでに数人の同僚たちが集まっていた。所長はじめ、だれもがいらだちや不安を隠せないでいる。ぼくを認めるや所長が立ち上がり、咳払いをした。

「もうみんな知っているだろう。政府によってベルリンの西地区が封鎖された。西からの悪しき洗脳から市民を守るためだ。これからは理由なく西ベルリンへは入れない。必要以上に近づいてもならない。列車でもだ。壁はこれから順次、強固に建設される予定だそうだ。」

ついてはハインリヒ、きみの運送ルートが変更になる。ポツダムから東ベルリンへ向かうのに、西地区を横切ることとはできない。迂回するんだ、いいね」

所長は必要以上に丁寧に説明した。うなずくしかない。所長の目は真つ赤に乾き、唇は真つ青だった。どうしたのかと心配していたら、解散となったときにハンスが教えてくれた。

国に裏切られたと失望したらしい。

「六月にウルブリヒトが言っていたらう、壁なんか作らないって。まだ二ヶ月も経ってない」

あの人は純粹に国を信じていたんだ、と哀れむ。ぼくにはよくわからなかった。当局からの監視や責任の追及を、所長は恐れていたはずだ。

ハンスは言う。そのとおりだ。しかし多少の不便はみんな同じだ、分かち合い励まし合い、みんな懸命に働けば国は豊かになる、みんな幸せになる。所長はそう信じていたんだ、と。

「所長、大丈夫でしょうか」

「なに、三日もすれば落ち着くさ。前もそうだった」

「前？」

「八年前の——六月十七日蜂起って呼ばれてるやつさ。ソ連兵まで出てきて何人も死んだ、あの事件だよ。力尽くで押さえ込もうってのが所長は気に入らない、それが国のやることかってさ。あのときは娘さんがなだめて——だから今回も——まあ、大丈夫さ」

思い出しながら説明するハンスの語り口はだんだんゆっくりになり、やがて、ちよつと話してやるよ、と引き返した。

そこでなにかあったのか、ハンスは言わない。ただ翌日から所長の姿は消え、一週間後には見るからにふてぶてしい男がやってきて、所長室の主になった。

時間を戻そう。八月十三日だ。その日、ヒルダ

はポツダムから戻らなかつた。次の日も、その次の日も。ラーラも連絡が取れないという。手紙は出したそうだが国内はまだ混乱している、訪ねたほうが早い。住所を聞き出した。

土曜日、ぼくはヒルダを乗せるときよりもさらに早く出発した。休憩時間も合わせて、ポツダムで一時間ほど余暇ができる。初めて歩く土地だ、あらかじめ地図で確認はしたが迷わないとも限らない。慎重に道を選び、足早に先へ進む。

大きな、けれど寂しげな屋敷だった。家族か知り合いか、数人がせわしなく出入りしている。ヒルダさんとは訊ねると呼び出してくれたが、出てきたのは老婦人だった。彼女のおばあさんだ。

「孫に、なにか？」

いぶかしげにじろじろと見る。頭のとっぺんからつま先まで。ムツとしたが、いつか言われたことを思い出す。ぼくは顔が怖い。初対面なんだ、警戒されても仕方ない。努めて笑顔を作る。

「ライプツィヒから来ました、彼女とは親しくし

ていて。連絡が取れないので、友人一同心配しているんです」

「そう、お気遣いありがとう。でもご心配なく、そつとおいて」

「それじゃあ、その……これを渡してもらえませんか」

用意していた手紙をポケットから取り出す。しまったと思った。いつものくせで宛名が「口短調」になっていた。しかし引つ込みがつかない、思い切つて差し出したとたん、おばあさんはまじりを決した。

「あなたがイ長調さん？」

「は……はい」

心臓が飛び出しそうだった、ぼくを知っていたのか。耳が熱くなる。

しかし思っていたのとはどうやら状況が違った。おばあさんの声に、集まっていた人たちが振り返る。そのうち一人の男がカツカツと歩み寄ってきて、おばあさんの手から手紙を奪い取り——ぎよ

つとした、断りもなく開封して中身を読んだ。内容はたわいのない、他人が読んだところでおもしろくもなんともないものだが、恥ずかしいし腹が立つ。思わず怒鳴りかけたところ、ぎろりとらまれた。

「口短調というのはどういう意味だ」

やっと気づいた。この人たちは知り合いでなくてもない。ぼくらは、彼女は、疑われているのだ。

## 十八

とはいえやましいことはなにもない。

「……ヒルダさんのことです。彼女のイニシャルがHだから」

「イ長調というのは？」

「ぼくです、アルベルトといいます、イニシャル

がAだから——ぼくたち、音楽が好きで」

「訊かれたことにだけ答えればいい」

ぴしゃりと拒絶する。冷淡で事務的な口調。痛くもない腹を探られるのは不快だが下手なことは言えない、ヒルダになにかされては困る。

「なぜこんなことをする？」

「こんなことは？」

「この、口短調とかイ長調とかというやつだ」

眉をひそめ、顎を撫でる。興味関心からの質問ではないことは明白だが、落ち着いた口ぶりは、問い詰めるわけでも恫喝するわけでもない。事実だけを確認したい、そう言わんばかりだ。かえってぞっとした。

彼らには数ある業務のうちのひとつに過ぎないのだ。

「遊びですよ、ただの。音楽が好きなんです、イニシャルというのもあるけど、口短調とイ長調はシャープが二つと三つで関係が近くて——ちよつと楽典をかじればわかります」

「わかるものはあるか」

男が呼びかける。一人が、筋は通っています、と応えた。男は納得したように何度か小さくうなずき、手紙をおばあさんに返した。

「なるほど、わかった。行ってくれ」

「待ってください、彼女には会えませんか」

「ここにはいない。だがすぐ戻るだろう」

それきり、ぼくはほとんど追いつかれるように敷地を出た。

啞然としてしていると、おばあさんが人目を忍ぶように追いかけてきた。先ほどよりは穏やかに、しかし今にも泣き出しそうな顔で、まずはごめんなさい、と頭を垂れた。

「あの子ったら、まだ通れるところから西へ行ったのよ。なんとか戻ってきたけど、なにしに行っただか。それで捕まって調べられて。そうしたらあなたとの手紙が出てきて、西のスパイじゃないかと——でもきつともう大丈夫、あなたが来てくれたおかげ」

「いえ、もとはといえ、ぼくらが悪ふざけをしなければ……」

「そうよ、ただの悪ふざけよ。子ども同士のおふざけに目くら立ってちゃって、みつともないつたら」

痩せた小さな体がぶるぶると震えている。慌ててハンカチを取り出してほおに寄せた。ポケットのなかでしわくちやになっていたそれに、大きなしずくがポタポタと落ちて染みこんでいく。

「こんなことはこれまでも幾度となくあった。でも、慣れないものね」

もう大丈夫、ありがとうと無理やりにつめた笑顔は、とても痛々しかった。

ヒルダが帰るまで付き添いたいところだったが、仕事に戻らねばならなかった。夜にもう一度来ていいかと訊くと、遅くなるでしょう、部屋はあるから泊まる準備をしておいでと快諾してくれた。

お言葉に甘え、大急ぎで仕事を終わらせ帰宅すると、着替えと買っておいいたパンだけを持って、再

びポツダムへと戻った。

ヒルダは帰ってきていた。疲れたのかりビングのソファでぐっすりと眠っていた。顔色は悪くない、ほっとした。

おばあさんはぶりぶりしていた。死ぬほど心配したのにケロッとしちゃって、こっちの身にもなあってほしい、と。怒りかたがヒルダとそっくりで、思わず笑ってしまった。

彼女が目を覚ましたのは夜遅くだった。ぼくはそばで本を読んでいたのだけど、いつのまにか眠ってしまって、揺すられて起きた。どうして、いつからここにいるの、と驚きつつうれしそうにはしゃぐ。再会を喜びながら昼間の出来事を話すと、ヒルダはうんうんとうなずいていた。

「ゼルマに会いに行ったの。新曲ができたから、どうしても届けたかった」

「そう……無事に渡せた？」

「ええ。ギターのこともお願いしてきた、いつかまた会う日までって」

視線をそらす。いつかまた会う日まで。そんな日は来るのだろうか。

それにしても無茶をする。おばあさんが泣いていたよと言うと、ふてくされたように口をとがらせた。

「心配なんかいらぬ。だってわたし、悪いことはなにもしていないもの。そうでしょう？」

これまで西ベルリンへ行くことは許されていた。バンドは趣味だ、ロックをやっていたのは西でだけ、東へはなにも持ち込んでいない。それに当時は東ドイツでもロックに代わる音楽を作ろうと取り組み始めていた、エレキがだめなわけじゃない。手紙の提出をためらったのがよくなかったのはわかるけど、だって恥ずかしいでしょう、と憤慨する。

ぼくは黙って聞いていた。彼女が怒れば怒るほど安心した。元氣だ、よかった。ソファに並んでかけ、ずっと彼女の髪を撫でていた。

すっかり話し終えると眠気が来て、また寝た。

翌朝、おばあさんにいとまを告げ、二人揃って車で帰ってきた。

自由は着実に削り取られていった。

壁の出現に人々は戦々恐々としていた。戦争が再び始まるのではとパニックに陥り、ただでさえ薄汚れた空気がピリピリと張り詰めて息苦しかった。ライプツィヒにいる限りはまだマシだったけれど、ぼくはほとんど毎日ベルリンへ行かなくてはならなかった。西ベルリンを国境に沿って迂回していると、徐々にできていく壁、断絶され涙に暮れる人々が否応なしに目に入る。不安に駆られた。

新しい所長は偉そうで気に入らなかった。だが逆らっては面倒なことになると直感し、文字通り黙々と従った。返事は「はい」だけだ、逆らわない、余計なことと言わない。同僚たちも似たような対応だった。

オクターヴは心なしか静かになった。所長のこともあったと思う、ハンスもあまり来なくなった。ひまができてヒルダのアルバイトも減った。

ゼルマたちとの連絡が絶たれたことは悔しく悲しかった。十月にはライナルトとラーラの結婚式があつたけれど、ラーラは親しい友人を呼べず、寂しそうにしていた。

ぼくは家にいることが多くなった。どこへ出かけても鬱々としているし、なにせ家にはヒルダがいる。ピアノを弾くためにオクターヴへは相変わらず通ったが、食事をするのは彼女が働く日だけになった。

暴政はなおも続く。

一九六二年一月。東ドイツは徴兵制の導入を発表した。対象は一八歳から五〇歳の健康な男子、期間は十八ヶ月。ひとたび招集を受ければ、国家人民軍に加わらなければならない。

ストリンドナー先生との約束を思い出す。きみの手は音楽のためにあれよ、握るべきは銃ではない。

い——あれから十年以上が経った。戦争なんてだれが望むのだ、だれが好んで銃を持ちたがるのかと思っただけなのに。

武器を持たないということは、こんなに難しいことだったのか。

考えるのが面倒くさくなって、黙々と日々をこなし。母を亡くしたときと同じだ、慣れたことを慣れたとおりに。ただそれだけだったのだけど、みんながやる気をなくすなか、ぼくは好ましく映ったらしい。模範的な労働者だと、新所長からやたらと褒められかわいがられた。よい評価を得て悪いことなんてない、表向きはうれしそうにしていた。気持ちはずいぶんよかった。

前の所長はどうしているだろうか。決して好きではなかったが、聞く耳は持っていた、不満があれば抗議もできた、まさしく対等だと感ぜられた。それが今は、どうだ。

こびを売っているつもりはないが、端からはそう見えるだろうな。どうだっさい、わざわざ抗

う気力も理由もない。どんなにがんばったところで、徴兵されたら離れるんだ。足下が崩れるような感覚。落ち着かない、目が回る、ここはおれがいていい場所ではない。

不安定な心は理性をむしろおぼしめる。自分が自分の操り人形みたいに見えた。別のぼくが、世間様にご都合のいいぼくを操っているんだ。本当のぼくはずっとおびえていた。ぼくもいざれ銃を取らされる。怖かった。

漠然とした恐怖が現実となってにじり寄ってくる。ライナルトに召集令状が届いたとき、それを思い知らされた。

一九六二年の秋だ。ラーラがとつぜんうちへやって来て、ドアを閉めるなりヒルダにすがって号泣した。いつも元気なラーラが、だ。ヒルダともどもびっくりした。ライナルトとけんかでもしたのかと思ったら、あいつもすぐにやって来た。赤ん坊を抱えて。

こっちは落ち着いていて、必死にラーラと、ぐ



ずる赤ん坊をなだめた。

「たった一年半だよ、すぐ戻る」

「一年半も、よ。この子だって生まれたばかりなのに」

「きみには苦勞をかけるけど——でも拒んだら、それこそきみたちを苦境へ追い込む」

それだけですべて悟った。

ベルリンの壁をめぐっては、強引に超えようとした人が国境警備隊によつて射殺されるという事件が、すでに起こっていた。それでいて壁はまだ万全でなく、警備隊からも西へ逃げるものが少なくなかった。ライナルトのような、逃げられない状況の人材は、さぞ都合がよかつたろう。

「あなたのような優しい人が」

ラーラが声を詰まらせる。ぼくも同じ気持ちだった。

ベルネット先生の気迫に縮こまり、競争は嫌いだと言い、戦うことを拒んできたあのライナルトが、いずれ人にそれを向けるかもしれないと知り

ながら、銃を受け入れる。なんて残酷なんだろう。

しかし彼のまなざしには優しく、強い覚悟が灯っていた。

「戦争に行くわけじゃない。大丈夫、うまくやるさ。」

それに遅かれ早かれさ。今でよかつたんだよ、今なら両親も元氣だ。ぼくがいないぶんの手助けを、きつとしてもらえるから」

赤ん坊がふにやあと泣いて、母親に手を伸ばす。ラーラが抱き寄せると、ライナルトは妻子をまためて包み込む。それからぼくたちに、騒々しくして悪かつたな、そういうことだから、いないあいだはよろしく頼むよ、と言った。

ライナルトとはそれが最後になった。

以後、ラーラはたびたびこぼすようになった。

「わたしの好きな音楽は、これでもうおしまいなんだわ」

彼女は予感していた。決死の覚悟をした人を、

あるいは死そのものを目の当たりにしても今まで通りに歌えるほど、彼は強くない。

なにも言えなかった。ヒルダは黙ってギターを弾いた。クラシックギターだ、エレキじゃない。ぼくはピアノを弾いた、でもライナルトの歌声が足りなかった。

## 十九

音がどんどん欠けていく。

ギンターとは衝撃的な別離となった。

新所長の信頼を得たぼくは、運送業務のほかに、所長の出張時の運転手として駆り出されるようになった。ドレスデン、ハレ、ポツダム、そしてベルリン。営業所があるところはだいたいどこへでも行った。

これがまあつまらない仕事で、なにしろ所長が後部座席から始終話しかけてくる。適当にうなずいて適当に笑っておけば満悦だが、本音で言えば、すべてに賛同しているわけではなかった。むしろほとんど反対だった。当然だ、最近の若者はだらしがないのだ、女どもがうるさくてかなわんだの——東ドイツでは深刻な労働力不足を補うため、女性の社会進出を積極的に後押ししていた。とはいえこのころはまだ途上で、しかも古い頭がそう簡単に切り替わるはずもなく、所長にはおもしろくなかったようだ。

言い返しはしない。面倒だ。信頼を得るために嘘をつく。いつかのハンスの言葉を、よく反芻した。

悪いことはかりではなかった。ほかの営業所の面々とつながりができた。本社での会議は特に良かった、所長たちの会議が終わるのを待っているあいだ、同じように運転手にされたよその従業員と情報交換をし、個人的に親しくなった。

自由な時間は減った。オクターヴから、ますます足が遠のいた。

幸いというべきか、出張があるのは月曜から金曜までのどこかだった。出張当日はもちろん、夜遅くになった次の日は運送業務を後輩に頼まなくてはならなかったが、土曜日だけは死守した。ヒルダを助手席に乗せるのはぼくだけだ。

ヒルダが大事だと伝われば伝わるほど、所長はぼくを重用した。理由はいつだかのときと同じだ、彼女がいる限りぼくは西へは行かない。あのときとは状況が違うのに、勝手に信じられていた。

西ベルリンへ出かけることになったときも、運転はぼくに託された。

驚いた。西ベルリンへなんて、もう二度と行かないだろうと思っていた。まさかこんなに早く、またあの壁のおこうへ行けるだなんて。聞けば、壁ができたからといって物流を完全に止めることはできない。今後の対応について会議すると——今後西へ行ける可能性がある。

喜びは見せない。努めて平静を装う。頭のなかでは、にわかによからぬ考えが生まれていた。

このまま信頼を築こう。これは、使える。

ヒルダはまだ学生だ、おばあさんもいる。あとで幸せに暮らせるなら召集にも応じよう、ライナルトのように。だから今ではない、使わないかもしれない、それならそれでいい。これはつまり奥の手ってやつだ。そう思ったら、すこしだけ気持ち楽になった。

出張当日、ぼくは早くに営業所へ着いて準備をした。つまらない理由で止まりたくない、ガソリンは昨日のうちに入れ、タイヤは新品に替えた。窓を拭き、シートを整え、所長を待った。

所長は時間をすこし過ぎて出勤してきた。昨夜は遅くまで飲んでいたのでそうだ。いい気なもんだ。

会議に間に合わせるため、アウトバートを飛ばす。やけに尻が振られるのはそのせいだと思った。運転が荒いと所長が文句をつけてきたが、遅刻し

ますよと返したら口をつぐんだ。

二時間ほどでベルリンへ。検問所で制止を受ける。所長から預かった通行証を渡すと、兵士は指でなぞりながら読み、車とぼくと所長をじろじろと見た。そして言った。

「トランクを開ける」

なるほど、そこまで見るのか。まあなにも積んでいない——だから素直に勢いよく開けたとき、丸まって収まるギウンターを見たとき、驚きのあまり情けない叫び声を上げてしまった。心臓が止まるかと思った。

その上、あいつときたら固まって動かない。死んだと思った。二時間近くも乱暴に運転されたんだ、しかも夏だ、こんな狭い場所だ、密閉された空間だ、死んでいてもおかしくなかった。ギュッと閉じていた目がゆっくりと開かれたときは心底ほっとして、ひざからくずおれた。

もちろん非常事態だ。兵士たちの銃がぼくとギウンター、それから所長にも向けられた。所長は

目を白黒させていた。

「な、なんで……ここでなにしてる？　いつから？」

「……ごめん……」

やっと発した問いに、ギウンターは謝るだけで答えなかった。兵士によって引つ張り出され、問い詰められる。力なく、ぼそぼそと言った。

「この国がいやになった。どうしても西へ行きたかった」

その場で逮捕、連行された。ぼくは友人が連れて行かれるのを、呆然と見送った。

このあとが面倒だった。運転手であるぼくも聴取を受けた。でも本当に知らなかったんだ、そもそもギウンターとはしばらく会ってなかった、西ベルリンへ出かけることだってだれにも話していない。

所長の予定は所員ならだれでも知り得た。ハンズならギウンターと親しい、もしや彼が漏らしたのか？　……いや、ハンズも近ごろはオクターヴ

から遠ざかっている。じゃあ、だれから、どうやって？

ぼくへの疑いはすぐに晴れた。

ギンクターの供述はこうだ。所長が言っていた。前夜にオクターヴで飲んでいて、西ベルリンへ行くと自慢げに話していたのを聞いた。それで西へ行こうと考えた、衝動的だった、もし捕まれば迷惑をかけるとはわかっていたが、アルベルトなら許してくれるだろうと思った——取調官からの又聞きだ。

まったく、呆れた。許す許さないの話じゃない、死ぬところだぞ。

悲惨なのは所長だ。今このご時世に西ベルリンへ行くことを軽々しく口外するだなんて、と。自業自得ではあるのだが、会議には間に合わず、理由も理由だったから信用をすっかり失った。それまでの言動も問題視され、降格処分となつてどこかへ飛ばされてしまった。ぼくの運転手業もこれでおしまい、くわだてもおじやんだ。

次に赴任してきた所長は女性だった。所長が愚痴っていたのはこれか、四十代前半でまだ若いのに、きびきびと従業員を仕切った。年配の運転手は反発したが、次第に有能ぶりを認めて従順になった。

彼女も運転手を欲しがったが、ヒルダが嫌がったからぼくは辞退した。ちよつとほつとした。その職には後輩が就いた。

ベルントおじさんが行方をくらませたのは雪が降り始めた時期だ。

ある日帰宅すると、とつぜん人民警察の訪問を受けた。ベルントの行き先を知らないかという。知らない、どうかしたのかと訊くと、消えたと返ってきた。

「家のなかが空っぽだった。机といすしかなかった」

知らないならいい、と立ち去った。大嫌いな男

だ、消えてくれてせいせいするが、気にかかる。まさか西へ行ったのか？ どうやって？

このまま戻らなければ、家は接収されるだろう。今のうちに見ておきたい。日が落ちてから、かつての住処を訪ねた。

すっかり朽ち果てていた。壁も屋根も、窓すら真っ黒だ。日が沈んで暗かったからそう見えたというわけじゃない、触ったら手がすすだらけになった。

ちよほど隣家のおじさんが出てきた。お久しぶりですと声をかけると懐かしがってくれてうれしかった。

ベルントおじさんのことを訊いてみた。やはり知らないという。だが、おかしなことがあったんだよね、と教えてくれた。

「今日の昼にも警察が来たんだよ。毎日大変だねえって言ったらさ、来たのは今日が初めてだって言うんだよ。びっくりしちやってさあ、じゃあ昨日まで毎日みたいに来てた人たちは、なんだった

んだろうって」

丸い目をぱちぱちさせながら、のんびりした口調で首をかしげる。昨日まで毎日？ さっぱり意味がわからない。

お礼とお別れを告げ、家へ入ってみた。やはりすすだらけだった。母が毎日掃除して真っ白だった壁が、ピカピカだった床が、真っ黒だ。なにやら焦げ臭い。でもなにかが燃えたような感じではない。このにおいはなんだろう、かすかにつんとした。あれでも科学者だ、実験でもしていたのだろうか。

うちに来た警官の言うとおり、机といす以外にもなかった。うちから持ち出した母のアクセサリはどうしたんだろうな、まだ持っているのだろうか。金に困っていたようだしとくに売り払ったか：：いやなやつだったが、いきなりいなくなれると怒りのやり場もない。

その足でオクターヴへ行った。ヒルダのアルバイトの日だった。おばさんにベルントおじさんの

ことを話すと、パツと花が咲いたような笑顔を見せた。

「本当に？ あらあ、めでたいわ！」

「やめてくれよ」

黙っておくべきだったと後悔するも、もう遅い。鼻つまみ者がいなくなつたと大騒ぎで、オクターヴはちよつとしたお祭り騒ぎになつた。複雑な気持ちだ、嫌いだったけどぼくの親戚だ、こんなに嫌われていたなんて。あまりの騒ぎのように、ベルントおじさんを知らないヒルダはきよんととしていた。

おじさんもまた、信じられないとばかり啞然としていた。

「あいつ、シュタージじゃなかったのか」

そうつぶやいたのをたしかに聞いた。逆にどうしてそう思ったのさ、あんなに素行が悪いのに。でも会話が面倒だった、カウンター席の一番端で、黙ってビールを飲んでいた。

ベルントおじさんのように、働けるのに働かな

い人というのは、少数ではあつたがいけないわけじゃない。東ドイツでは一定期間無職していると強制的に仕事に就かされる。でも働かない。それでも動かない。そうなるかどうかでもない。こんな人だから警官があつさり引き下がったことはふしぎじゃなかった。もし西へ逃げたのだとして国にはなんの損害もない、むしろ年金を払わなくて済む。きつと本気で探したりもしないだろう。

警察が知らないとなると、本当にどこへ行つたのだろう。どこぞで野垂れ死んだりしてなければいいが——しかしこの事件で明るみに出たのは、ベルントおじさんの悪事じゃあなかった。

## 二十

一九六四年一月。卒業を目前にして、ヒルダが逮捕された。

オクターヴでアルバイト中、警察が突入してきて連れて行かれたという。そのときぼくはまだいなかった。仕事を終えて向かっている途中だった。店に着いたころには騒ぎはすっかり引いていて、店内でおばさんがぼんやりと虚空を見つめていた。客はおらず、おじさんは片付けをしていた。

ピアノがなくなっていた。驚いて訊ねると、おばさんはやっと我に返って、起きたことを説明してくれた。

そしてさめざめと泣き出す。

「あの子、やっぱり西のスパイだったのよ」  
「え？」

「ピアノに細工がしてあったの。いつからかしら？ この店は西のスパイたちの、情報の受け渡しに使われていたのよ」

頭が真っ白になった。そんなはずはない！ 叫ぼうとしたとき、おじさんと目が合った。おじさんは悲しいとも言いたげに目を伏せて、早く帰ったほうがいい、と言った。

「家にも警察が行っているはずだ」

「やましいことはなにもない」

言い切るぼくを鼻で笑う。

「信じるものはばかを見るんだよ、特にこの国ではね」

蔑むような目。カツとなったが言い返せない。いろいろありすぎた。

おばさんが言うには、ヒルダの荷物にも怪しい書類が混じっていたらしい。本人は否定するがどう信じるかっていうの、と震えていた。

ヒルダにかけられたのは国家反逆の容疑。西のスパイの協力者とされた。

筋書きはこうだ、以前は西ベルリンで働いていたヒルダが、大学進学を装って活動の場をこちらに変えた。ライプツィヒ・メッセは世界最古の歴史ある見本市だ。冷戦中も開催され続け、西諸国からも多くの来賓を招いた。スパイを紛れ込ませるにはもってこいだ。そして人の出入りが激しいオクターヴに目をつけた。たしかにあり得ない話



ではない。

でも違う。ぜったいなにかの間違いだ。話にならない！

帰宅すると警察が待ち構えて——いや、もう調べ終えていた。手紙の類いはすべて回収された。

隠していた、ベルントおじさんから母への手紙もだ。ぼく自身忘れていたのによく見つけたものだ。

ぼくも連行され、取り調べを受けた。知らないものは知らないとしか答えられない。彼女がどうしているか気になり何度か訊ねたが、教えてもらえなかった。

やはり例の、暗号みたいな名前は言及を受けた。それから、こうも。

「ハ長調とはだれだ？」

「……わかりません」

「隠し立てするのか」

「そうじゃありません。これはぼくと彼女、二人だけの呼び名です。ぼくがハ長調、彼女が口短調。ほかにだれもいません——でも、」

頭を抱える。

「ぼくらのこれを知っている人は、たくさんいます」

壁ができた直後、ライプツィヒへなかなか帰ってこれなかった理由を説明するために、ぼくらはその話をした。秘密にしておく必要を感じなかった。言うべきじゃなかった。

利用された。だれだ、だれがこんなことを？

そうだ、字だ。手書きなら、見ればもしかしたらわかるかもしれない。そう提案すると、すでに鑑定に回していると返ってきた。

彼女が違うというなら、ほかに心当たりはあるのか、と問われた。そんなこと言われても、オクターヴはいつも繁盛していた。ほとんど常連だが、メッセの時期に初顔が紛れ込んできてもだれも疑わない。ピアノに細工があったと聞いたが、ピアノを珍しがって触るのも別におかしくない。

ピアノに施された細工とはどんなものだろう。彼女がピアノに触ることはほとんどない、ぼくの

ほうがよっぽど触っている。知りたかったが、訊いても答えてもらえなかった。

「それを調べるのはこちらの仕事だ。心当たりがないならいと言え」

「ないです……いえ」

本当を言うのと、怪しいなんて思ってなかった。

鼻で笑われたのがむかついたんだ。ちよつとした、悪いひらめきだった。

自己嫌悪に陥る。散々世話になったのに。でも、許せなかった。

「おじさん——オクターヴのマスター。親戚のベルントおじさんがいなくなったとき、シュタージじゃなかったのかと、安心してました」

ヒルダが戻ると同じくしてオクターヴがなくなり、もうここにはいられないと思った。二人で話し合い、卒業を待つて離れることにした。彼女もさすがに疲弊していた。痛々しかった。

ラーラには打ち明けた。彼女はオクターヴの騒

ぎを目撃していて、ぼくらの決意を理解してくれただ。ライナルトとの約束を果たせないことは心残りだったが、あなたたちの責任じゃないでしょ、と笑った。

ヒルダには、ごめん、とも。

「わたしがあそこを紹介したから」

「あなたが悪いわけじゃない」

そうだ、二人とも悪くない。もし悪いとすれば気づけなかったぼくだ。ずつとあの店にいて、ずっとピアノを弾いていたのに。

おじさんは雲隠れしてしまった。置いてけぼりを食らったおばさんは自宅に引きこもり、それきりわからない。知りたくなかった。

ベルントおじさんをシュタージの職員だと思ひこんでいたおじさんは、ベルントおじさんがいなくなつて大胆になった。積極的に西のスパイを手引きし、不都合があればすべてをヒルダになすりつけるつもりで準備していた。だが詰めが甘い、ひとつのほころびからすべてが暴かれた。慢心は

命取りつてことだ。

信じるものはばかを見る、か。そのとおりだな。信じていたのに。

あのピアノはどこに行ってしまったんだろう。おばさんが大事にしていたピアノ。おじさんが細工したピアノ。そういや、響きがおかしいと先生が仰っていたっけ。あのときにはもう細工されたのかな。

さようならライブツイヒ、大好きな町。

ぼくらはひとまずポツダムの、彼女の実家に身を寄せることにした。仕事は辞めた。所長は事情を酌んでくれて、ポツダムの営業所に移ったらどうかと勧めてくれたが、別の仕事をしたいと断った。

見送りに来てくれたのはラーラだけだった。平日だったしな。

ポツダムに着くと、おばあさんは喜んで迎え入れてくれた。事情は手紙で伝えてあった。部屋は

余っている、好きに使ってと言ってくれた。孫娘の受けた仕打ちに心底から憤っていた。

別の仕事をしたというのは嘘だ、もちろん。なんにもしたくなかった。でもそういうわけにはいかない、無職でいれば目をつけられる、それも面倒くさい。単発のアルバイトを重ねて糊口をしのいだ。所長の運転手をしていたときに得たつてがうまく使えた。

ハンスが会いたがっていると教えてくれたのもポツダム営業所の人だった。彼を通して待ち合わせ、久々に顔を合わせた。

「お元気そうぞ」

「こっちのセリフだ、思ったより元気じゃないか。安心した」

喜色满面、肩をバンバンと、痛いくらいに叩かれた。

土曜日の午後だった。たまたま天気がよくって、公園のベンチで、たぶん一時間くらい話したと思う。いろいろ聞いた。訊いてないのにあっちが勝

手に話したんだ。

新所長がやり手でみんなやる気になった、相変わらず人手は足りていないがうまく回っている。オクターヴの代わりに別のバーを開拓したいがどこもコーヒーマグがまなくてかなわない。最近になって自分が音痴だと気づいた。娘にもどうやら遺伝している、娘の歌を聴いてラーラが首を横に振ったんだ——いろんなことをおもしろおかしく。わかってはいる、気を使ってくれたんだ、そういう人だ。

興味深かったのはピアノの細工について、だ。「一番端の鍵盤が引き出しみたいになっていた。あんな端っこ、弾かないもんな。ある日、取り出そうとしたやつの手際が悪くてもたついて、見ていた客が通報してさ、それで発覚したんだ」

「鍵盤？ 蓋じゃなくてですか」

ハンスが、お、と肩眉を上げる。

「そいつはどこで聞いた？」

「いえ……いつかストリンドナー先生が、響きが

狂っていると蓋をにらんでいて」

「なるほど、響きか。耳がいいんだな」

感心してうなずく。

蓋にも細工があった。しかし分解しないとわからないほどなじんでいた。出てきたのは盗聴器だったが、超小型の無線式、だのにやたら性能がいい。しかもどうやら西のものではない。だが、なぜ？ こんなものをこんな小さなバーに仕掛けるだなんて、いったいこの店になにがあるのかと、シュタージのやつらが必死に調べているという——いや待て。はたと気づいて訊ね返す。

「ハンスは、その話をどこで？」

「おっと、しゃべりすぎたな」

わざとらしく肩をすくめる。それ以上は訊かないことにした。

別れ際、ハンスが大きな封筒を差し出した。差出人を見て、いや、筆跡を見て、心に光が差した。

「ストリンドナー先生！」

「おまえんちに届いたのを、ラーラが預かって

た」

急いで開ける。楽譜が入っていた。バツハだ。それから短いメッセージ——美しい不協和音のために。

こんなになりたいと思ったことはない、先生にも、ラーラにも、届けてくれたハンスにも。思わずはしゃぐ。するとさっきまでべらべらしゃべりまくっていたくせに、ハンスが唇を噛んで黙ってしまった。

目が潤んでいる。びっくりした。

「おれはさ」

ごつごつした指で目頭を押さえながら、震える声で言う。

「みんなが元気でいてくれればそれでいいんだ。おれのしていることを知れば、みんなおれを軽蔑するだろう。でもいいんだ、みんなが元気でいてくれれば、それで」

いつも明るくて、たくましくて、かっこいいハンスが、肩を震わせ涙をこらえる。ぼくの知らない

い彼のこれまでが、そこにはあったんだと思う。

ハンスはこの国が好きだという。気に食わないことはたくさんある、壁だってそうだ、あんなの横暴だ。

でもここに暮らしている人たちが、仲間が、家族が好きだという。だからここで生きていく。これからも、ずっと。

## 二十一

ぼくは再び計画を練り始めた。

ある夜、ヒルダが、みんなはどうしているかしら、とつぶやいた。みんなというのはゼルマたちバンドの仲間だ、ゼルマもギターを弾くとはいえ、リードギターを失ったバンドが今どうしているか、気にならないはずがなかった。

最後に渡したあの曲を弾きたい。みんなで。彼

女の願望は、聞かなくてもわかった。

ぼくも、ハンスと話していろいろ考えた。彼には家族がいる、仲間が、仕事、生まれ育った町がある。でもぼくにはない、なにもかも失ってしまった。家族も、友だちも、仕事も、居場所も、音楽すら——ここにはピアノがない。買おうにも高すぎて手が出ないんだ。

西へ行こう。ごく自然に、そう考えた。

西へ出て、ストリンドナー先生に会いにオーストリアへ渡る。今度こそ音楽を学ぶんだ。ずっと後回しにしていたけれど、これから。

アルバイトを増やした。ポツダムやベルリンの営業所はもちろん、他社の求人もチェックした。東西ベルリンを行き来する便を持つ会社に、片っ端から応募した。

通行証が必要だ、通行証さえ得られればいい。なんでもいい、西へ荷物を運ぶアルバイトが欲しい。そのためには信用だ。頼まれた仕事は時間通りにこなし、ときには荷造りだけとか車両の整備

など、直接関係ない仕事も受けながら、ひたすら機会を待った。

だれにも話さなかった。ヒルダにさえ。止められたくなかった。

五月某日、ぼくはついに仕事を得た。楽器の運搬だ。チェロ、コントラバス、ティンパニ、マリナー——ひとつくらい大きな箱があってもわかるまい。

前日になって、ヒルダに打ち明けた。ドライブに行こうと誘って市内を回った。ポツダムには湖や森がたくさんある、場所には困らない。暗くなるところ、休憩と言って車を止め、切り出した。ひとしきり話し終えると、彼女は長く深いため息をつき、頭を抱えた。

「最近ちよつと元気になったなと思つたら……そう、そんなことを考えていたのね」

それきり黙り込む。

拒まれることを予測していなかったわけではない。だが、拒まれたときにどうするかは決めてい

なかった。決められなかった。おばあさんのこともある、ヒルダがそう簡単に決断できるはずがないんだ。

選択肢を用意していた。

「きみがこの国を選ぶというなら、悲しいがお別れだ。今はいやだというなら、今回は見送って単に仕事をこなすにとどめる。ついてきてくれるなら——結婚しよう」

「そんなのずるい！」

顔を真っ赤にして激高する。たじろぐ。そんなに怒るとは思わなかった。

でもそれしかなかった。この国で生き続けることが、ぼくにはもう考えられなかった。だから付け加えた。

ぼくだけがあちらへ行けば、残る彼女に迷惑をかける。今ならただの恋人だ、仲違いして破局した、その勢いで出て行つたと言え、うまく収まるだろう。あとは連絡も取らない。互いのためにここにどまらぬのも期限付きなら多少耐えられ

るかもしれない。アルバイトを続けて、次の機会を待つ。

ついてきてくれるなら……言いかけたとき、帰りましようと思切られた。

「わたしの気持ちは考えてくれないのね」

「考えてる」

「……もう一度考えて」

ぶいとそっぽを向く。何度か声をかけたが無視された、諦めてエンジンをかけ、帰路につく。

ぼくの胸は静かだった。彼女の返事に、波ひとつ揺らがなかった。悲しいとも、寂しいとも、なんとも。落ち着いているといえれば聞こえはいいが、無感動だった。なにも感じなかった、火が消えたみたいに。

帰宅すると、今夜は一人にしてと言いついて、ヒルダは部屋にこもった。翌日も姿を見せない。のんびりもしてられない、時間が迫っている。行ってくるよとだけ告げて、家を出た。

これで終わりか、と思った。

車でベルリンへ向かった。昨日のドライブを思い出しながら。どんな話をしたっけ、あれがブランデンブルク門、ベルリンのより古いのよとか、サンスーシ宮殿、今度行ってみましょうよとか、ヒルダは一所懸命説明してくれた。ああ、また聞き流していたな。今さら気づいた。翌日には西へ行くつもりくせに、今度なんてないじゃないか。けんかをするのもこれで最後だ、さようなら、どうか幸せに——そんなことを考えていたら気づくのが遅れた、急ブレーキをかける。もうすこしでひくところだった。

目を疑う。人通りの乏しい細い道路のど真ん中、そいつは急に飛び出してきた。

白いシャツにこぎれいなスーツ、整えられた髪に中折れ帽、ピカピカの革靴とステッキ。身なりこそ整っているが、ジトツとした目つきと薄ら笑いを浮かべた口元は——間違いない、ベルントおじさんだった。

「よう」

「……どうしてここに？」

「ベルリンへ行くんだらう、乗せて行ってくれよ」

二の句を告げないでいるぼくをよそに、勝手に助手席に乗り込む。しかも暑いなどぶつぶつ言いながらあちこちつまみをいじるから、思わず声を荒げた。ヘラヘラしやがって、胸くそ悪い。

「そう怒るなよ。おっと、彼女はどうした？ やっぱり別れたか」

「あんたには関係ない」

「知ってるぞ、けんかしたんだらう。おまえも悪いやつだな、明日出発って言われて、はいそうですかなんて言えるかよ——まあ、世の中そういうやつもいるだろうがよ、あの女は違うだろ。へっ、やっぱり不協和音なのさ」

「……なんだって？」

「不協和音だって言ったんだ」

「そうじゃない！」

「なんであんたが、おれと彼女との話を知ってい



る？」

血の気が引いた。だれも知るはずのない会話だ、しかも昨日の今日、まだ半日ほどしか経っていない。それを久々に出くわしたこの男が、なぜ？

ベルントおじさんは勝ち誇ったように鼻を鳴らした。

「おれは耳がいいんだ」

なにを、ばかな——体を、頭を、電気が走る。

とつぜん、すべての点がつながった。

ストリンドナー先生のことを知っていたくせに顔は知らなかったこと、ヒルダと面識がないのに彼女を知っていたこと。ぼくのピアノを下手くそだとけなしたが、聴いていたような覚えはない。ばかにしたいだけだと聞き流していたが：：つじつまは合う。それじゃあ、まさか。

「オクターヴのピアノの盗聴器は、あんたが？」

「おう、みんなして右往左往して、おもしろいなあ。なに、ちょっと音楽を聴きたかっただけさ」

「：：この車にも仕掛けたんだな」

「へへ、そのデータが欲しくてさ。なあ、西へ行くんだろう、この車、譲ってくれよ」

悪びれもせず暗に認め、たかる。いつ、どうやって？ いや、仕事もせずぶらぶらしていた男だ、時間はいくらでもあつたらう、問いただしたところではぐらかされるに決まっている。

「早く行かないと遅刻するぜ。信用がペアだ」

偉そうにふんぞり返る。本当にいやな男だ。怒りを感じるなんてしばらくなかったのに、腹の底からぐつぐつと、煮えるような感情がわいてくる。乱暴にアクセルを踏む。

「盗聴器なんて、どういうつもりだ」

「なに、ただの実験さ。車ならあちこち動くだろう、追跡もできたらおもしろいと思つてよ。成功だ、だから回収しに来た」

「あんたは東か、西か？」

「どっちでもない。もっとでかい組織が拾ってくれた」

薄ら笑う。つくづくうさんくさい。黙っている

ぼくに、いいだろ、よこせよ、と繰り返す。大事な車だ、しかし妙な仕掛けが施されているものをほかに譲れない。下手に置いていたら調べられるだろう、盗聴器が出てきたらきつと——きつとまた、ヒルダが疑われる。なにせ三度目だ、偶然で済ませてもらえらるだろうか？

とはいえこの男の言いなりになるのは癪だ。口をつぐんでいると、ベルントおじさんはただとは言わねえよ、と提案する。

「西へのアルバイトを都合してやるよ。あの女もいっしょに行けるようなやつをさ。なに、覚悟が決まったらおまえ、そこに座って、いついつ出かける、とでも言え。また来てやる」

「あんたの言うことなんか信じられるか」

「そう言うなよ、おれだつてなあ、おまえらには悪いと思ってるんだ」

断りもせずたばこを取り出し、火を付ける。こちららは承諾していないのに、すっかり我が物顔だ。ゆつたりと長く煙を吐く。

そしておもむろに語り出した。

「ストリンドナーのじじいの話よ、けっこう気に入ってんだぜ」

先生がじじいならあんたもじじいだろ、とは黙っておいだ。当時で六十は超えていたはずだ。

その六十超えたじじいさんが、しみじみ言う。

「おれは今までずうつと、どこにも居場所がなかった。やりたいこともやれねえでよ、仕事も気にならなくってぜんぜん続かなかった。それが、人生わからねえもんだな。今いるところはよ、おれの技術を買ってくれてよ。」

やつとおれの——へへ、おまえらふうに言うなら、調べてやつがわかったんだ。音楽もちよつと勉強したんだぜ」

「さつきは、おれたちを不協和音だと言ったじゃないか」

「間違いないだろ？ でもよ、わかったんだぜ」  
笑うのをやめ、妙に落ち着いた声色で、ゆっくり、はつきりと。

「不協和音だからって取り除いてたら、音楽にならない」

胸を突かれる。瞬間、どこか遠くを見つめるまなざしが、母に見えた。そして脳裏によみがえる父が、母に宛てた言葉を。

——あなたがいなければぼくはぼくてなくなるんです。いつでもそばにいてください、いつでもそばにいますから。

## 二十二

帰宅すると、おばあさんが出迎えてくれた。ヒルダは訊くと部屋だという。そつと上がり、ドア越しにたたいまと言っていると、奥から、バタバタと足音がして、ヒルダが勢いよく飛び出してきた。

「……お帰りなさい」

髪はぐしゃぐしゃ、目は泣きはらして真っ赤だ。

ぼくを見るなりかすれた声でささやいて、両腕を伸ばす。

応えた。胸のなかで声もなく泣きじゃくるヒルダを、壊れないように抱きしめ、慰める。ごめんと、何度も何度も繰り返し返した。足から力が抜ける。その場にへたり込み、手のひらで互いの存在を確認し合う。言葉はなかった、ならなかった。けれど静かではなかった。鼓動が聞こえる、息づかいが聞こえる。彼女の体温に、重さに、おいに、柔らかさに、久しぶりに触れた気がした。

おばあさんがそつと寄り添い、彼女の頭を撫でる。

「まったく、あなたたちは——わたしは、音楽のことはわからないけどね」

わからないなんて嘘だと知っている。ため息交じりに、まるで独り言のように。

「だからかまわないでいいの。音楽は自由であるべきよ。好きなようにやりなさい」

もう一方の手でぼくの肩を叩く。そつと自室へ

向かう小さな背中とは、どこか頼もしかった。

ヒルダがよろりと立ち上がり、誘う。

「顔を洗ってくる。散歩でもしましょう、その公園まで」

まもなく日が沈む。

手をつないで歩いた。最初はだんまりだった。

でもどこからともなくピアノの音が聞こえて、どちらからともなく歌い出した。

エドワード・エルガー、作品 十二「愛の挨拶」。

公園には同じように散歩に出てきたらしい人がいた。夜風が気持ちよかった。西の地平線は赤く光って、東の空からは濃紺がやってくる。雲は半々に、それぞれの色に染まるけれど、もとの白さも残っていた。

「あなたさえいけばいいなんて言えない」

ヒルダが切り出す。小さな声だった。ピアノシモ、ピアノシッシッシモ、もっと小さく。

「あなたもそうでしょう？ わたしたちは不協和

音なのよ、お互いだけじゃなくて、もっとたくさん仲間が——音が必要なの」

握る手に力を込める。ヒルダがにこりとほほ笑み、その手を口元に寄せた。

「探しに行きましょう。いっしょに」

「うん」

ぼくたちは、決めた。

言われたとおり、いついつ出かける、とつぶやいた。一週間ほどするとベルントおじさんが現れて、いついつ、どこそのなんとかを訪ねると指示された。

「ハゲベックサーカスにライオンを運ぶ仕事だ」

「ライオン？ オリじゃあ荷台のなかが丸見えじゃないか」

「こいつを着せろ」

やたらでかい荷物を抱えていると思ったら、中はメスライオンの着ぐるみだった。こんなのどこで見つけるんだらう、いやに精巧だ。なるほど、

これなら行ける。

当日はヒルダと車で出発し、ベルリンで彼女を降ろしてから、ベルントおじさんに教わった場所へ向かった。ベルリン郊外の、よく言えば自然が手つかずで残る、悪く言えばジャングルみたいで本当に人がいるのか不安を覚える地域だ。ベルリンからそう離れていないのにこんなところがあるなんてな、とちよつと驚いた。

すこし迷ったものの無事に着いた。駐車場の入り口でベルントおじさんが手を振っていた。こんなところにあるなんて怪しい会社かと疑ったがそうではなく、動物を扱う都合で都心を避けているらしい。仕事そのものはまっとうだ、と言い張る。これがどうにも引つかかった。

仕事を受け取る。通行証の書式がなんだか違うような気がした。訊ねると、変更になったんだとか、猛獣だからとか、言い分がコロコロ変わる。そういうものか、と自分を納得させた。もう引き返せなかった。

ライオンと顔合わせする。ここにヒルダを乗せるんだ、襲われちゃかなわん。サーカスのために仕込んであるだけあってライオンは従順で、名前を呼ぶとゴロゴロとのを鳴らした。シンバというらしい。かわいいやつだ。やつとすこし安心した。

助手席に着ぐるみを乗せ、車をベルントおじさんに。

「じゃあ、うまくやれよ」

「ありがとう」

「おまえに礼を言われるなんて初めてだなあ！

……元気でな」

今度こそ、ベルントおじさんとの最後だった。

ベルントおじさんのことはヒルダには言わなかった。彼女には知らない人だ、しかもやたら評判が悪い。だから前みたいに、世話になっている運送会社から回してもらったアルバイトだと思っていたはずだ。

フリードリヒ通り検問所近くの岩場で待機して

もらい、合図をしたら出てくるように言い含めてあった。これは問題なく落ち合えた。

「大丈夫かしら」

「大丈夫さ」

着ぐるみを着せ、荷台に載せ、シンバには食いつかないでくれよなんてジョークを飛ばす。内心は震えていた。うまくいくだろうか。いや、やるしかないんだ。

検問所へ。通行証を見せる。落ち着け、仕事だ。緊張も興奮も、するな。

「ライオン一頭か……待てよ、オリには二頭いるじゃないか」

「はい、それがシヨ一の都合で、急に二頭必要になったのですから……」

検問官の目がぎろりと光る。やっぱりだめか？

「まあいいだろう、通れ」

「ありがとう」

ほっと胸をなで下ろし、アクセセルを踏む。次の瞬間だ。

「おい、待て」

——頭のなかに真つ白な五線紙が現れたんだ。

音符が次々に置かれていく。見たことも聞いたこともない曲だ。作曲なんかできないくせに、でも決してでたらめではなかった。美しい不協和音が、頭のなかで鳴り響いていた。

イ長調から下属調のニ長調へ。

たくさん顔の顔を思い浮かべる。母、おばさん、おじさん、オリバー、ライナルト、ギユンター、ハンス、所長、ラーラ、おばあさん……思えばベルントおじさんも、ぼくの調べのひとつだった。なによりヒルダ。いつしか当たり前のよう隣にいた。

ニ長調からさらに平行調の口短調へ。

回転するエンジン。車体を叩く小石。高鳴る鼓動。シンバのうなる声。はね飛ぶバリケード。たくさんの不協和音。

調子外れの銃声が、すべてを止めた。

\*

ブラックゴーストとの戦いを終え、ぼくはドイツに戻った。戻ったといっても西側だ、わざわざ東に戻らない——戻れない。

ピアノは完全に諦めた。こんな体だ、鍵盤に手を置くだけでコチコチといやな音がしやがる。でもヘルベックには会った。先生は楽壇を追われ山奥へ隠居してしまっていたが、弟子は増えていて、ヘルベックを中心に交流するようになった。

仕事には困った。ほかの仲間は見た目がまだまともだ、でもぼくはまず手が機械だし、服の下はほとんどロボットだ。冷たい戦争っていうがようは情報戦、スパイ合戦だ。東からの亡命者は徹底的に調べられる、隠せなかった。いちおう信じてもらえたが、ろくな仕事に就けなかった。

あいつと再会したのはそんなときだった。

「あれ、きみ、アルベルトか？」

「えっ……」

目を疑った。

「ギョントター！ どうしてここに？」

ここは西だよな？ 信じられなくて周囲をキョロキョロ見回し、またあいつを見る。ずいぶん太ったが間違いない、ギョントターだ。バナナをうまそうに食ってやがった。

「きみも逃げてきたのか。ヒルダさんはどうした？」

「……彼女は来ていない」

「そうか」

ふうん、と軽くうなずく。別れたと思ったんだろう、それ以上は訊かれなかった。ありがたかった。

あいつはいろいろと驚くことを言った。

「機械の音がする。なにか体に付けているか？」

ああ——それじゃピアノは弾けないな。どうしたんだよ、あれか、車の修理でもしようとしてやらかしたか？ まあ無事でよかったよ。

車といえはきみの車、東に置いてきたのかい？

「ああいや、ちょっと気になってさ……整備には  
ぼくも手伝ったんだ、愛着くらい持ってたってい  
いだろ？」

ベルントさん？ 知らないよ。ああ、ぼくが東  
を出るちよつと前、黒い人たちが口説きに来てい  
たのは知っている。追跡装置の技術が欲しいって  
んで——いや、聞いた話だよ。だれに……い  
いじゃないか、昔のことだ、もう忘れた！」

感心するやら呆れるやら。ちよつと水を向けた  
ら、言わないでいいようなことまでしゃべった。  
きみだったのか、まったく。

ひよつとして西へ出てこられたのもベルントお  
じさんの手引きだろうか。そう思って訊いてみる  
と、いぶかしげに顔をしかめた。

そんなわけないだろと前置きして、声を落とす。

「いやな言いかたをすればさ、買われたんだよ」

「買われた？ だれに？」

「国に、さ」

「え？」

「ぼくみたいな政治犯をさ、西が買い取る。一人  
いくらでって。東はそれで外貨を得る。そういう  
ことが、こっそり行われている。」

もつとも、東じゃそんな話できやしない。ふつ  
うの人はきつとだれも知らないだろうけどね」

頭が真っ白になった。

なんだ、そうだったのか。なんだ……なんだ。



一九八九年十一月、ベルリンの壁はとつぜん崩れた。

そのすこし前から、ライブツイヒから始まった月曜デモのことがニュースになっていた。デモは回を重ねるごとに拡大し、国全体へと広がっていた。

中継を見ていたら懐かしい面差しのある顔が映り込んで、思わずテレビに飛びついてしまった。

ああ、あの子だ。大きくなったな。きっと二人も元気でやっているだろう、二度と会うことはないが、それを知れてよかった。

壁崩壊の直接のきっかけは勘違いだったというから笑ってしまう。その後、東ドイツは西ドイツに吸収される形で消滅した。あつけない幕引きだった。

あれからぼくは、どうやら新しい調べを手に入れた。付き合いが長くなるにつれ、それぞれの音

がわかってくる。これはこれで悪くない。ときには仲違いもするが、しまいにはここに帰り着く。あるとき、小さな仲間のためになを残すか、という話になった。おいしい料理を、芸術を。じやあぼくは？ ぼくはなにも持っていない、ぜんぶ置いてきてしまった、あの壁のおこうに。できるとすれば。

「兵器撲滅を目指す」

みんな黙った。そうだな、ぼくが言うど皮肉が過ぎる。でもぼくに残せるのはそれくらいだ。言い換えよう。

「戦いのない世界を残す」

「きみらしいや」

だれかが言う。みんながうなずく。ぼくらしい、か。そう言ってくれるのか。たまらなくうれしかった。

世界が、平和になりますように。

了

※石ノ森章太郎「サイボーグ009」の非公式二次  
創作作品です。原作者や実在の人物・組織・事件  
などとは一切関係ありません。  
※本作品を無断で転載・印刷して販売するなどの  
行為はおやめください。

### 壁のおここの不協和音

初出：<https://www.pixiv.net/novel/series/1147673>

公開日 令和元年七月十二日～同月十八日

著者 かぼすわん

サイト <https://cyborg.oo2jet.link>

Twitter kaboSwan

